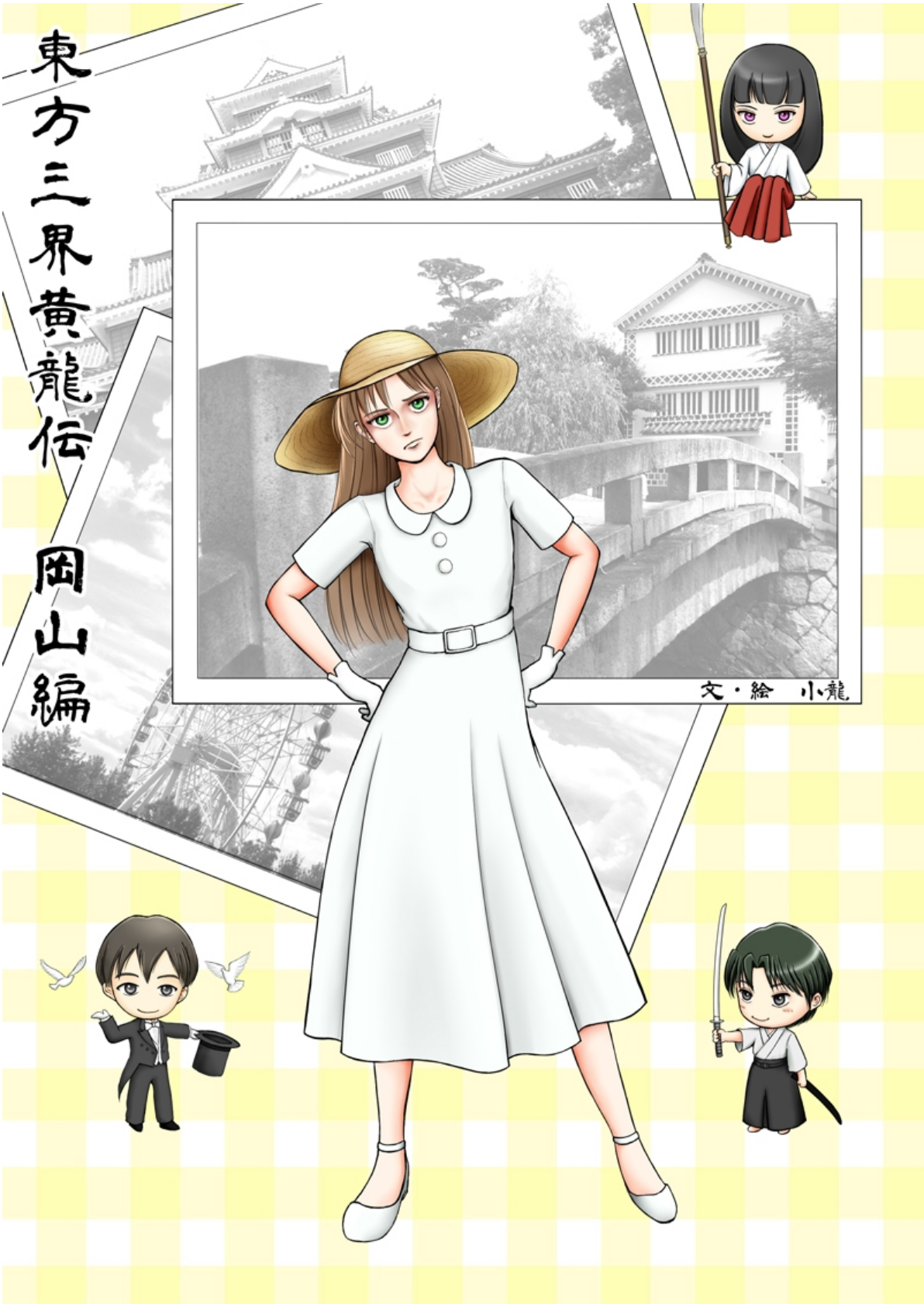
東方三界黄龍伝
岡山編
文・絵　小龍

東方三界黄龍伝　『岡山編』

小龍

目次

1 二〇〇〇、夏 6
2 イロコイは面倒なもの 21
3 腕一本の重さ 40
4 接触 59
5 チンジュ 78
6 いざ、倉敷 92
7 祖父ト邂逅ス 106
8 美観地区にあったもの 117
9 遺産のゆくえ、ピーちゃんのゆくえ 133
10 リュウオウザンノボレ 148
11 我らは青年探偵団 165
12 山登りで日は暮れる 180
13 沙龍の推理 192

14 龍王宮 206
15 相馬さんちの事情 227
16 一本勝負 241
17 わたしを離さないで 256
18 斎藤姓の理由 269
19 墓参り 290
20 阿知王 308
21 遠いところ 319

登場人物

李沙龍（リーシャロン）（甲斐馨（かいかおる））……主人公。中国生まれ中国育ちの日本人。十九歳。
木佐小次郎……沙龍の親友で、東新宿探偵社の所長。剣術の達人。
鈴木千春……東新宿探偵社の所員。マジックのスキルを持つ。二十二歳。
江田秀樹……岡山の弁護士。神谷家の顧問をしている。
神谷藤四郎……岡山の名士。
神谷百合子……神谷藤四郎の娘で、沙龍の母親。故人。
甲斐弥太郎……沙龍の父親。故人。

1　二〇〇〇、夏

灼熱の東京駅に着いて、事務所に電話を入れたときから嫌な予感はしていたのだ。

こちとら一週間の出張で疲れているというのに、この嘘みたいに綺麗な顔をした所長ときたら、書類一式を差し出し、表情ひとつ変えずに「今日中」と言い放つ。

エアコンのブーンという微かな音だけがしばらく事務所兼居間の一室を満たした。

一昨年、このボロ家には、こんな文明の利器はなかった。

去年、沙龍がどうしてもうだるような日本の夏に我慢ができず、給料で買ったエアコンである。

今年は、おかげで快適に過ごせている。

「今日中？」

沙龍はこれ以上ないというくらいの険悪な声色で聞き返した。
しかし、木佐も負けていない。
「今日中」
同じ調子で同じ言葉を繰り返す。
「……ハァ」
と、一回、わざとらしくため息をついてやった。
東北の奥地から息も絶え絶えに戻ってきたばかりなのだ。せめて、ひとっ風呂あびて、キンキンに冷えた缶ビールくらい飲ませて欲しいものである。
沙龍はチラッと背後のテーブルを見た。さっきから千春はそ知らぬ顔でパソコン操作をしている。こちらのやりとりに反応するつもりはないらしい。さっきは電話で「所長がいささかおかんむりです」とこっそり教えてくれたのに。
「……」
ホラ、受け取れよ、とばかりに書類が目の前でヒラヒラ上下に動かされるので、仕方なく受け取った。もしかしたら、町内会の夏祭りのお知らせかもしれない、と一縷の望みを託してみるも、その望みはすぐに打ち砕かれた。

書類の一枚目には見慣れた書体のファイルナンバーがある。これは紛れもなく仕事だ。

このファイルナンバーが打たれたということは、我が東新宿探偵社の美人所長が、正式に依頼を承諾したということである。そして、請け負った以上、所員の誰かが仕事をしなければならない。つまり、沙龍か、千春のどちらかが。

普通に考えれば、涼しい部屋でのらくらパソコン仕事をしていた鈴木千春に行かせるのが妥当だ。自分は出張から戻ってきたばかりである。

「クライアントは七丁目の奥田さん。打ち合わせは先方の家で五時。遅れるなよ」

無駄な言葉を恐ろしいほどそぎ落とした説明をして、木佐は自分の仕事に戻ろうとする。

沙龍は慌てて上半身を乗り出した。

「ちょ、ちょっと待って？　ワタクシイ、一日にバスが二本しか来ないというド田舎の、医者に見放された湯治客しか来ないというさびれた温泉宿で、それ明らかにネズミとか狸の仕業じゃん？　っつー無茶な幽霊退治という名の野生動物駆

除の仕事から戻ってきたばかりなんですが？　労いの言葉もなく次の仕事？　なにそれ」
木佐の首がギギギッと音を立ててこちらに向くと、凍てつく視線が容赦なく放たれた。
そこで、やっと沙龍もなにか自分に落ち度があるらしいことに気付く。
「労いの言葉、だって？　本来なら二、三日で済むところを、無能な仕事ぶりのせいで一週間に長引き、宿からは超過料金を請求された挙句、馨の壊した備品の損害額が、大きく報酬を上回ったことについての反省もないのに、労いの言葉？　この数ヶ月、赤字仕事しかしてないくせに、労いの言葉、だって？」
「あ、あう……」
こうなると、沙龍に勝ち目はない。
腕っ節だけをみれば沙龍のほうが強いはずなのだが、木佐の怒りゲージが上がると、沙龍は完全に萎縮してしまうのである。図体のでかい悪ガキ息子が、おかんに勝てないのと同じ道理だ。
しかし、沙龍は見た目は小学生サイズの普通の女の子であって、木佐はごく普

通の美少年、いや、そろそろ美青年という年である。去年、この東新宿探偵社に入社した鈴木千春にとって、この光景はいつも不思議でしょうがないものだった。

「まぁそれでも？　現場には僕の理解の及ばぬ事情なんかもあるだろうから？弁解があるなら、聞こうか？」

木佐は怒っているらしい。

それも当然で、今年に入ってから沙龍は一円も稼いでいないのだ。

「……え、いや、だって、それは不可抗力っていうか……。物見遊山で着いてきたマッキーは途中で帰っちゃうし、敷地だけはやたら広い日本家屋で小動物を駆除しようと思ったら、根気勝負にならざるを得ないっていうか……」

「……」

「床下の柱とかもさ？　腐ってたみたいで、ボキッと折れちゃったのも、たぶん、私のせいじゃないと思うんだよね？　大体、あそこの温泉宿もさ、戦国時代に建てたのかよってくらい古くて……」

しどろもどろながら延々続きそうな言い訳をイライラしながら聞いていたが、

パソコンのモニターの時間表示を見て、木佐は頭を切り替えた。
「まぁ、過ぎ去ったことはもういい。次の仕事、遅れるぞ」
「……ハァ」
やっぱり自分が行くのか、と、沙龍はもう一度深くため息をついた。
「じゃ、着替えてくる……」
七丁目の奥田夫人といえば、以前、いなくなったペルシャ猫を探してくれという依頼をしてきた、絵に描いたような有閑マダムである。お城と見まごうお屋敷には、ペルシャ猫のほかにもアフガンハウンドだのロップイヤー（※ウサギの種類）だのがぞろぞろとお住まいになっている。
あのお屋敷に、Ｔシャツに短パンというこの旅装で行くわけにはいかない。せめて、年相応に見えるスーツで行こう。
事務所兼居間を出て、廊下の突き当たりにある自分の部屋に戻った。

高校を卒業してから、一年半。

日本の夏はもう三回目になるので、いい加減、慣れたことは慣れたが、好きにはなれない季節だった。沙龍は高温多湿が苦手なのである。

「あぢい……」

一週間ぶりの自室は、さぞかし熱した空気がこもっているだろうと思ったが、そうでもなかった。木佐が空気の入れ替えはしてくれていたようだ。

エアコンをつけ、汗でベタベタになった服を脱ぎ捨て、しばらく部屋の温度が下がるのを待ってから、濃いグレイのスーツに着替えた。これなら、ギリギリ年相応に見えなくもない、という木佐のお墨付きをもらった一着である。沙龍も木佐もまだ十九歳だが、大人相手の仕事なので、舐められない程度にはこちらも大人でいなければならなかった。

ありがたいことに、東新宿探偵社に舞い込む仕事は途切れることはない。

開業したての頃は、宇佐美の紹介仕事で訳あり一家の夜逃げの手伝いをしたり、任侠系のお嬢さんのボディガードをしたり、近所の日常トラブルを解決したりするだけだったが、木佐の手腕もあってひっそり名も売れてくると、普通の興信所が請け負うような仕事も持ち込まれるようになった。つまり、不倫調査だ

の、失せ物探しだの、ストーカートラブルだの、である。
当然、ふたりだけでは手が回らなくなり、仕事が詰まっているときは新規の依頼を断ることもあったが、「来る仕事は拒まず」というのが所長である木佐のモットーなので、思い切ってスタッフを増やそうか、という話になったのが、去年の夏頃のことである。
といっても、気軽に募集できるような職でもない。
表向きの不倫調査くらいなら、好奇心旺盛な若者でもなんとか勤まるだろうが、東新宿探偵社の本命というのは、公権力から（あるいはそのスジ方面から）身を隠したい依頼人が、普通の興信所には依頼できないようなことを最後の頼みの綱として持ち込んでくるような仕事である。当然、危険を伴うし、その分、ペイは破格だ。
そういった仕事に対処できるようなスタッフでなければならないのだ。簡単に見つかるはずはない、と沙龍は思っていたが、木佐が大学で見つけてきた鈴木千春という青年は、条件をほぼクリアしていた。
武道の心得はないのだが、例えば、街中でテロや乱闘に遭遇したとしたら、無

傷での生存率は沙龍よりも高いだろう。それくらい、身のこなしが素早いし、機転も利く。彼の生い立ちと環境がそうさせたのだ。

沙龍が着替えて玄関で靴を履いていると、鈴木千春が出かける格好で出てきた。持ち運び用の衣装ケースと、小道具を詰め込んだ大きなバッグを持っている。

「駅まで一緒に行きます」

暗い瞳をした大人しい青年だが、誰に対しても口調が丁寧で、それが一部の女性にやたらウケがいい。母性本能をくすぐるタイプなのだろう。

ただ、背中にスイッチがあるようで、それが入ると人格が切り替わったように明るくなり、営業にはもってこいのスタッフとなる。自覚のある二重人格、と本人は言っている。

どんな仕事も器用にこなすので木佐は気に入っているようだが、沙龍はあまりこのタイプは得意ではなかった。

「……うん」

千春が出てくるのをなんとなく予想していたのか、特になにも言わず、先に玄

関を出て待った。
同僚としてはうまくやっているほうだと思う。そろそろ同じ職場で過ごして一年は経つし、その間、トラブルがあったわけでもない。
ただ、千春の主体性のなさや、優柔不断なところが、沙龍の癇に障ることが多く、それは千春自身も分かっていた。
「お待たせしました。行きましょう」
Yシャツにネクタイという、会社員スタイルである。
年は二十一、二のはずだが、こんな格好をするとだいぶ上に見える。
「今日はどこ？」
「先月から引き続き、歌舞伎町の潜入調査ですよ」
「ああ、まだ標的が現れないのか……」
千春がいま抱えているのは、とあるフリージャーナリストからの人探しの依頼である。
都内で起きた殺人事件に関係のある重要参考人で、おそらく、捜査機関も追っているはずの人物だが、匿っている組織があるのか、なかなか尻尾が掴めない。

もう殺されたのでは、という噂もあるが、一方で、歌舞伎町のゲイバーでの目撃情報などもあり、ジャーナリストはなんとしても探し出して独占インタビューをしたいようである。

千春はそのゲイバーで、夜毎、マジックショーを行っている。評判はとてもいいらしい。一流マジシャンに仕込まれたこのスキルがあるので、本当は興信所の所員などしなくても食べていけるはずなのだが、木佐と出会ったときは職にあぶれて、暇をもてあましている偽学生だった。

「その歌舞伎町の件が終わってれば、この仕事も春ちゃんにやってもらうんだったのに」

沙龍はまだぶつぶつ言っている。

「すみません、代わってあげられなくて……」

千春はそれを言うために、出てきたのだろう。

気の使い方を心得ている青年なのだ。

「キサさんはなんであんなに不機嫌だったの？」

「所長は、今朝、上半期の収支決算をしてたんですよ。それで、馨さんの担当分

が一円の儲けも出してない、ってボヤいてて……」
「ああ、そういうことか」
儲けどころか、毎度、損害が大きくて、だいぶマイナスになっていることだろう。無能といわれても仕方がない、と自分でも思っている。
しかし、沙龍が居なければ無事に終わらなかった仕事もあるのだ。それは木佐も承知しているはずである。
いつだったか「事務所が立ち行かなくなったらクビにしてもいいよ」と本心で言ったこともあるのだが、木佐は「どんなことになろうとも、馨をクビにだけはしない」と言っていた。その本意を、沙龍は理解しているつもりだった。
「あづい……もう休みたい……夏休み欲しい……」
東京のこのうだるような暑さへの不満、木佐の鬼所長ぶりへの不満、それらがだだ漏れになって、言葉になって出てくる。
「七月でこんなに暑いんだから、八月はどーなるんだ……。もう、北極に行きたいよ……」
千春は、沙龍のこのわがままお嬢ぶりには慣れていた。

マジシャンだった養父が、わりとこういう気質だったからである。
「でも、馨さん、少しは温泉でゆっくりしてきたのでは……？」
「こんな真夏のシーズンに温泉に入ってうれしいもんか。今にも出そうな、おんぼろの温泉宿だったし。なのに、マッキーは『あ、幽霊は居ないね』とか言ってすぐ東京に帰っちゃうし」
アスファルトの照り返しがきつくて、沙龍は目を細めた。着替えたばかりというのに汗がべたつく。
東北での仕事は、『創業二百年の由緒ある温泉宿にどうも悪霊が憑いているようなので、東京の高名な霊能者の方に来てもらいたい』という内容だったのだ。
そこで、暇を持て余している松木ゴローに打診してみると、「馨君と温泉旅行、いいね～」という軽い答えをもらったので、ふたりで行ってきたのである。
しかし、行ってみたら、山奥にぽつんと古びた宿が一軒あるだけで、本当に温泉以外なにもなく、都会っ子の松木は二日目で退屈してしまい、最近できたという女子大生の恋人からの呼び出しをこれ幸いと口実に使い、「幽霊は居ないみたいだから、あとは馨君ひとりで大丈夫。頑張って！」などと言って、東京に戻っ

てしまったのだ。
「結局、退治したのは悪霊でもなんでもなくて、ネズミ二匹とハクビシンだけ。まったく、地元の業者にでも頼みなさいってのよ」
「ハクビシンってタヌキみたいなのでしたっけ？　田舎には居るんですねぇ」
まるで天然記念物のように言う。
「春ちゃんはずっと東京なんだっけ？」
「はい。養父について、地方都市を廻ったことはありますけど、田舎はほとんど行ったことないです」
マジックの巡業なのだから、人の居ないところに行ってもしょうがないのである。
「ふーん……」
こちらも都会っ子か、と沙龍は思った。
つまり、動物相手の仕事は自分がするしかないわけである。
駅の手前で千春と別れ、向かった七丁目の奥田邸でも、頼まれたのはやはり動物の仕事だった。

二日前から愛鳥の「ピーちゃん」がいなくなったとのこと。羽は切っていないので、遠くまで飛んでいってしまったかもしれないが、なんとしても探しだして欲しい、と夫人はやつれた顔で言う。

（いやいや……、無理でしょ。インコは）

沙龍はそう思ったが、「見つけ出してくれたらいくらでも出しますわ」と夫人が言っているので、守銭奴の木佐が二つ返事で引き受けたのだろう。

「ピーちゃん」の写真を預かり、特徴などを聞いても、沙龍は最初から弱腰である。

（犬猫ならともかく、鳥はどうやって見つけりゃいいのさ……）

途方に暮れながらお屋敷のような奥田邸をあとにした。

2　イロコイは面倒なもの

やっと陽が落ちた七時頃になって、沙龍から事務所に電話があった。

奥田邸での打ち合わせが終わったので、これから遊びに行く。今日は帰らないので、三ネコにご飯をあげておいて欲しい――、という連絡だ。

彼氏のところに行くのだろう、と木佐は思ったので特に詮索もしなかった。椎名という三十路くらいの男だ。先月から付き合うようになったらしい。

何をやっている男かは知らないが、一度、ふたりで一緒に居るところを見かけたことがある。普通のサラリーマンには見えなかった。目つきが只者ではなかったので、まともな職ではないだろう。

どこか、雰囲気が鉄太郎に似ていた。

「鉄さんのなりそこないみたいな人」と素直な感想を言うと、沙龍は嫌な顔をする。

本人も、分かっているらしい。

結局、沙龍はあの初恋の雀士を追いかけているだけなのだ。そういう恋愛の仕方をやめない限り、長続きはしないだろう。いつものように三ヶ月で終わるのがオチだ。

（まぁ、僕も人のことは言えないんだが……）

しかし、木佐のほうはむしろ「後腐れのない、短期間のお付き合い」を好んでやっている。高校生の頃よりはうまく立ち回るようになったが、修羅場を回避する小賢しさを得て、ますます始末に負えなくなった、と沙龍は沙龍で思っていた。

ちなみに、千春はどうも無性愛者であるらしい。

無性愛者とは、学術的な定義だと「他人に対して性的欲望も恋愛感情も持たない人」である。だから、好意や敬意はあっても、そこに恋愛的なニュアンスは一切ない。

最近になって本人がそれをほのめかすようになったのは、木佐や沙龍を信頼しはじめたということだろう。

千春は、恋愛のできない自分を嘆いてはいない。「子孫を残すことに執着しな

い、あるいは望まない人間というものは、生物としてはいったいどういう存在なのだろう」と、興味深く探求しているくらいだ。

その千春の恒常的な問いかけに対して、沙龍は「ゲイもダイクもエーセク（※Aセクシャル。無性愛のこと）も増えすぎた人類を救うストッパー役である」と言っていた。千春はそれを聞いて珍しく声を出して笑ったものである。

木佐は、というと、自身がゲイなので、少し違った意見を持っている。一定数の同性愛者や無性愛者が生まれるのは現象に過ぎない。そこには意味も役目もない。ただ、少々生きにくいという事実があるだけ――、と。

千春は、木佐がゲイであることを知っている。仕事を一緒にするにあたって「教えておかないとフェアじゃないから」と木佐が言ったのだ。が、それを聞いても千春は大した反応はしなかった。「そうですか」と言っただけである。よくも悪くも、他人の嗜好はどうでもいいのだろう。

ひとりになった事務所兼居間では、電気代が勿体無いので、エアコンを切った。

さらにパソコンの電源も落とし、終業することにする。

自宅を事務所にしているとメリハリがつかなくなってしまうので、七時を過ぎたら仕事用の電話も留守電に切り替えて、なるべく仕事はしないことにしていた。

三人とも抱えている仕事はいっぱいいっぱいだが、それでもなんとかなっていた。鈴木様様だな、と木佐は思っている。彼が居なければ、ここまで『稼げる事務所』にはなっていなかっただろう。

去年、大学の構内で会ったときは、こんな優秀な所員に化けるとは思わなかった。嬉しい誤算である。

沙龍は機転や繊細さが求められる仕事においては、必ずしも優秀とはいえなかった。なんでもかんでも力技で解決しようとするからだ。そういう意味では、あのふたりは、お互い、無いものを補い合える関係になる。もっとも、所員が少ないせいで、基本的に単独行動が強いられるこの興信所では、補うような場面がほとんどないので、あまり意味はないのかもしれないが。

木佐が台所に立つ気配を察して、三ネコがどこからともなく集まってきた。彼らは沙龍が成り行きで飼い始めた猫だが、もうこの家の一部のようになってい

る。古い家屋にはつきもののネズミやその他を退治してくれるので、木佐も可愛がっていた。

「ナーン……」

三匹の中でも一番体格と毛並みのいい白猫が木佐の足に頭を擦り付けてきた。

ご飯の催促である。

このリーダー格の白猫をマサムネと名付けたのは我ながらいいセンスだ、と木佐は思っている。毛の流れが、五郎正宗の打った刀の、やや乱れた感じの刃紋に見えなくもないからだ。

茶トラのクニツナと、三毛のキクは、遠慮がちにちょこんと座ってご飯を待っていた。

猫缶を開けて皿にいれてやると、三匹とも、ガフガフいいながら食いつく。その様子をしばらく見守ってから、冷蔵庫を開けてみた。一通り材料を見てから、メニューを決める。

（今日はひとりだから簡単に野菜炒めでも作ろう）

沙龍が買ってきてくれたお土産の「きりたんぽ」があるが、鍋という気分でも

気温でもないし、これは三人そろったときにでも食べよう。
千春は、中野のほうにひとりで住んでいるのだが、夕飯を食べて帰ることも多い。ちゃんと食費も払ってくれるので、木佐にしてみれば、寮生を食べさせている寮母のような気分でもあった。
居間兼事務所のテレビをつけ、ニュース番組を耳だけで聞きながら人参の皮を剥いていたところ、食後の毛づくろいをしていたマサムネがふと顔をあげ、音もたてずに台所の流しの上に上がると、窓から玄関のほうを覗き込んだ。ガラス玉のような目が、警戒の色をたたえている。
見知らぬ客が来たようだ。一度、来たことのある人間なら、マサムネはこんな警戒の仕方はしない。
「誰だ？」
小声で聞いてみるも、この妖（あやかし）は「分かりません」という表情を見せるだけだ。
人語は喋れないのだが、こちらの言っていることはだいたい理解している。だから、慣れれば意思疎通も少しはできるのだ。

「……」
磨りガラスではっきりとは分からないが、人影が動いたのは木佐にも見えた。
しかし、数秒待ってもチャイムが鳴らない。人影は確かに玄関のほうにあるのだが――。不審人物か。包丁を置いて、代わりに自室から日本刀を持ってこようとしたが、その必要はなかった。
木佐が廊下に出たところで、ためらいがちにチャイムが押され、「すみません」という硬い声が掛かった。
「はい、なんでしょう？」
エプロンをつけたまま玄関を開けると、木佐いわくの「鉄さんのなりそこないみたいな人」が所在なげに立っている。
黒シャツに白のチノパンツという、どこかのマフィアのような格好だが、改めて間近で見てみると、それほど極道色は強くない。体育会系の大学生のような、短めの髪型のせいだろうか。
目つきが鋭いこと以外は、普通の三十路男だった。人相は決して悪くはない。確かに、沙龍が好きそうな不敵な面構えだ。

「自分は椎名といいます。突然訪ねてきて申し訳ないんですが、って、……わっ!?」
男は木佐の足元を見て驚いていた。
三匹の猫が興味津々に見上げているのだ。
動物が苦手なのだろうか、と思ったが、そこには触れず、
「はぁ、椎名さん。それで、ご用件は。事務所のほうはもう閉めたんですが――」
わざとそう言ってやった。
「ああ、興信所のほうに用があって来たわけじゃないんです。ええと、所長の木佐さん、ですか？」
手元の名刺を見て言う。その動作が少々わざとらしかった。
渡した記憶はないが、椎名が持ってるのは木佐の名刺だ。
「はい。そうです」
「ああ、やっぱり。お若いんですね」
その言い方には揶揄するような響きがある。

学生ながらに起業してそこそこ繁盛させているのだから、生意気にも映るのだろう。
「自分は馨さんとお付き合いさせてもらってます。この名刺も彼女から預かってきました。……お返ししたほうがいいですかね？」
「いえ、持っていてください。仕事の依頼はいつでも歓迎です」
見た目に反して、最低限の礼儀はあるようだな、と木佐は思った。
丁寧な口調は、初対面の人に失礼にならない程度の、おざなりなものだが、それでも礼を通そうとするだけマシである。
程度の低い中年になると、木佐くらいの学生相手には、初対面から舐めてかかってくるものだ。
「そうですか。では――」
と、椎名は名刺を胸ポケットに戻し、
「実は、彼女としばらく連絡が取れなくなったので、心配になってこちらに来てみたんです。ただ……、もし、それが彼女の意図したことなら、お恥ずかしい限りですが」

「……」

またか、と木佐は思った。

沙龍はこういうことをしょっちゅうやらかすのだ。

恋人にはほとんど自分から連絡を取ろうとしない。その理由はひとえに「面倒くさいから」である。恋愛の駆け引きなどという洒落た代物ではない。

出張で一週間秋田に行っていたということも、当然、椎名には言っていないのだろう。

しかし、だとしたら、沙龍はいまどこでなにをしているのか。ことと次第によっては椎名に同情する。

「僕はただの同居人なので、彼女のプライベートのことは分かりかねます。ただ、事実としてひとつお伝えすることがあるとすれば、今日、甲斐馨は一週間の出張から戻ってきたばかりで……。今は外勤で別の仕事中です」

半分嘘をついた。

仕事は終わって、あなた以外の人と遊びに行ったようです、とはさすがに言えない。

「一週間の出張？　それで、携帯電話を忘れた、とか？」
「いえ、持って行ったはずですが」
事務所には何度か連絡はあったのだ。
つまり、仕事の連絡はしても、恋人への連絡は後回し、もしくは面倒なのでしない。もっと最悪なパターンだと、もう恋人とは思っていない、ということである。
「そうですか……」
男はそれ以上は聞かなかったが、
「やれやれ、やっぱ振られたかなぁ……」
苦笑しながら率直な思いがこぼれた。
木佐はこのとき、初めて椎名という男に好感を持った。
「すみません、じゃ――」
軽く頭を下げて、行こうとするので、木佐も一礼し、家に入ろうとしたが、すぐ呼び止められた。
「その……、あなたは彼女とはどういう関係なんですか？」

「同居人で雇用者ですね」
聞かれ慣れている質問と、言い慣れている答えである。
「なるほど……。馨はあんたのことを『カレシより大事な人』と言っていたんでね。どんな男かと思って見にきたんだが……。俺にゃ、男女の友情とやらは理解できそうにないってことは分かった」
ここにきてこの開き直りか、と木佐も苦笑する。
椎名の心境は分からないではない。繕う気も失せたのだろう。
「あの、いま、夕飯の準備中だったんですが」
「ああ、手間取らせて悪かった。退散するよ」
「いえ、そうじゃなくて。もしまだだったら、ご一緒にどうですか。ありあわせなので、大したものは作れませんが」
「……？」
予想外の誘いに、椎名が真意をはかりかねる、という顔をする。
「自棄酒くらいなら付き合いますよ。もっとも、そう悲観的になるような時期でもない気がしますが」

「時期……？」
ますます分からない、という顔をしたが、木佐が愛想よく勧めるので、椎名は誘われるままに上がりこむことになった。
台所の小さなキッチンテーブルで、冷えた缶ビールを開けながら、つまみに出してもらったお新香をつつく。妙なことになった、と椎名は思ったが、この築七十年の日本家屋の居心地は悪くはない。
どこもかしこもボロいのだが、板張りの廊下といい、剥げかかった漆喰の壁といい、妙に落ち着く。腹巻を巻いた爺様がひょっこりと住んでそうな家である。
「付き合って一ヶ月なら、まだ馨も飽きてはいないと思いますね」
木佐がフライパンを器用に動かしながらそう説明した。
最短だと一週間という記録もあるのだが、木佐が知る限り、三ヶ月くらいで飽きて別れる、というのが沙龍のパターンなのだ。
「そうかい……。しかし、会ったのは結構前なんだぜ。実は、彼女が制服を着てた頃も知ってる」
「というと、二年くらい前の話ですよね？」

「ああ、そうなるな」
それは、なんとも奇妙な出会いだったという。

二年前の深夜の新宿中央公園で、最初、椎名は善意で注意をしたのだ。
「あんたみたいな若い女が、こんな時間にひとりで居るところじゃないぜ」
沙龍はジョギングの休憩中だった。
格好を見ればそれは分かるが、なにせ人通りもないし、夜はそこかしこにヤク中がうろうろしているような公園である。椎名でなくとも、中学生のような女の子がひとりで居れば注意をしたくなるだろう。
「ありがとう。すぐ帰るよ」
沙龍はそのとき、そう答えた。
しかし、翌日、また気になって同じ時間に同じ場所に行ってみると、やはり昨日の女の子がベンチでくつろいでいる。
椎名は、隣に座ってもいいか？　と断って、しばらくこの奇妙な女の子と話を

した。
家は近所なのか？　ジョギングならもっと安全なコースがあるだろう。そんな無防備な短パンで、痴漢にでも襲われたらどうする、と、自分でも笑ってしまうくらいに「まっとうな」大人のように説教をした。
椎名は本来、そういったことを諭す大人ではない。裏街道を生きてきた男で、昨日はこの公園でとある人物と待ち合わせをしていたのだ。いわゆる情報屋といわれている人間である。結局、椎名の欲しかった情報はなかったが、それなりの金を払って、さて、どこかに飲みにでも行くか、と思ったところで、沙龍に出くわしたというわけである。
このときは言い方は妙だが魔が差した、と椎名は後に説明している。沙龍は見るからに子供で、隙だらけで、危なっかしく見えたらしい。ならば、「天使が差した」とでも言うべきか。
「おじさん、警察官？」
「〝おじさん〟はやめてくれ。俺はまだぎりぎり二十代だ。……なんでそんなことを聞く？　サツに見えるのか？」

「普通、深夜に私みたいな女の子に出くわしたら、ナンパするか、襲うか、無視するか、のどれかだよ。家に帰れって言うのは学校の先生か、警官くらいなもん。でも、ミスターは学校の先生には見えないからさ」
「〝おじさん〟から〝ミスター〟ってのもすごい変わり身だな」
椎名はフフッと笑った。鋭い目つきに似合わず、人好きのする笑顔だ。
「だって、日本語にはミスターに相当する言葉、ないんだもん」
「……あんた、もしかして、外国人か？」
「うん、えーと、日本人だけど、外国育ち」
「ああ、道理で、ところどころ日本語がおかしいと思ったぜ……」
「で、ミスターは何者なの？」
「ただの通りすがりのお節介なお兄さんだ。悪いことは言わないから早くおうちに帰りな」
ポケットに両手を突っ込んだままベンチから立ち上がり、そのまま背を向ける。
鉄さんより背が高いな、と沙龍は思った。

さらに、インドア派の鉄太郎よりははるかにガタイがいい。
「……ミスター、お名前は？」
呼び止めると、半分だけ振り向いた。
その横顔を忘れないでおこう、と沙龍は記憶の中に書き込んだ。
「シーナ。あんたは？」
「李……、えーと、甲斐馨。十七歳。新宿高校の三年生」
「高校生かよ。世界が違うな……。この広い東京でもう二度と会うことはねぇと思うが、じゃあな」
「そうかな？　縁があったら、また会えるよ」
実際、縁はあったのだ。
その後、椎名は新宿駅で制服姿の沙龍を見かけたし、去年は、歌舞伎町のキャバレーで偶然出くわした。沙龍は千春が副業でやっているマジックショーを見に来ていて、椎名はふらりと飲みにきていたのだ。そのとき、連絡先を渡しておいた。
沙龍から気まぐれに電話があったのはそれから数ヶ月も経ってからのことだっ

たが、それ以降、付き合うようになったのである。

「なー、だから、あんたなら分かるだろー？　あいつぁ、正直、俺の手には負えねぇよ。どこのお嬢様で、どこの格闘技チャンプなんだよ、まったくぅ……」

缶ビールはだいぶ空いている。

椎名は最初はほろ酔いのいい気分だったのだが、途中から愚痴が入りだした。夜も更けてきた今はほぼ全編弱音になっている。

三ネコが、つまみのおこぼれに預かろうと、椎名に詰め寄っていた。キクはちゃっかり膝の上を占拠している。椎名はそれをデレデレな顔で撫でていた。猫が大好きらしい。最初、猫に驚いたのではなく、歓喜しそうになったというわけだ。

「確かに、同僚としては頼もしいが、アレを恋人にするには勇気が要るだろうな。僕はごめんだ」

木佐は適当に相手をしていたが、こちらも実はかなり酔っ払っている。顔に出

ていないだけなのだ。
少し前に千春から携帯メールで「動きあり」との報告をもらったが、緊急事態ならもっと他になにか言ってくるはずなので、放っておいた。
沙龍は「今日は帰らない」と言っていたのに、なぜか、夜遅くに帰ってきた。
キッチンテーブルに突っ伏してる男を見るなり、
「なんでシーナが居るのさ」
と、疲れた三白眼が言っている。
木佐は苦笑を見せるだけだ。
しばらく連絡をしてなかったので、心配になって会いに来たのだということは分かるが、なぜ追われると逃げたくなる心理を理解しないのだろう。
色恋は面倒くさい、と沙龍は思うのだった。

3　腕一本の重さ。

沙龍が風呂上がりに台所を覗くと、木佐は廊下にはみ出して寝ているし、椎名は物音に気付いて起きたものの、ボーッとした顔をしている。

「シーナさん、泊まってく？」

見かねて聞いてみたが、反応は鈍い。

「いや……。すまん、いろいろ醜態晒した。俺、帰るわ」

言いながらのろのろと立ち上がった。百八十センチ近くある椎名が背を伸ばすと、低い天井からぶら下がっている電球にぶつかりそうだ。

沙龍は頭を拭いていたタオルを椅子の背にかけると、

「ちょっと待って。送ってく。その前に、キサさんを布団に放り込んでくるから」

「それくらい、俺が……」

椎名が手を貸す間もなく、木佐を器用に担ぎ上げて、廊下の先の部屋までのし

のし歩いていく。
普通、逆じゃないのか、と椎名は思う。沙龍と一緒に居ると、今までの自分の常識が間違っているのではないか、と思うことが多々ある。
外に出ると、月夜で明るかった。いったいこの新宿という街には夜という感覚がない。
わずか数百メートル先に日本一の歓楽街もあるので、ネオンの灯りもまぶしいほどに届いてくる。
終電はなくなっている時間だったが、歩いて帰れる距離なので外苑東通りの方に向かう。沙龍は近くのコンビニまで着いていくことにした。
「醜態は晒したんだが、楽しかったぜ」
椎名はいつもゆっくり歩く。
早く歩くのは心に余裕のないせっかちなやつだ、と思っているらしい。
その歩調に合わせて歩くのは嫌いではなかった。
「そう。よかった」
生乾きの髪のまま、沙龍はTシャツに短パンという格好をしている。化粧っけ

もないので中学生くらいにしか見えない。最初に会ったときも、こんな感じだったな、と椎名は思い出していた。
「それに、謎がひとつ解けた」
「……ん？」
「あの美少年所長さんは、アッチだろ」
「ホウ？　まさかとは思うけど、口説かれた？」
「いや。俺も、色町で育ったんでね。分かるのさ」
などと、沙龍の知らないことを言う。
椎名は自分の話を滅多にしないので、どこで生まれ育ったのか、どんな環境で生きてきたのか、沙龍はほとんど知らない。
「ああいう美少年になら、襲われてもいいかなってちょっと思っちまった。襲うのは無理だが」
「フフ。試してみたら？　知り合いに両刀（バイ）がいるけど、普通の人よりも人生、確実に二倍楽しそうだよ？」
「んー、そうだなー」

と言いつつ、そんな気はないのである。沙龍もそれは分かっていた。本当は、自分のような〝棒に手足がひっついたような〟タイプより、肉感的な女性が好きなことも知っている。

なのに、なぜ付き合うようになったのかといえば、沙龍の気まぐれと、椎名の気まぐれが、ちょうどいいタイミングで重なったからだろう。

そして、いつの間にか、椎名の思いだけが強くなってしまっている。いまはそんな状態だ。

「まぁ、やつがゲイじゃなかったら、殺してるところだけどな」

これは本音だな、と沙龍は思った。

「物騒なことを言うねぇ。でも、やられちゃうのは、シーナさんのほうだと思うよ」

軽やかに言う。

椎名もそれなりの鉄火場をくぐってきた男なのだから、木佐の強さくらい分かるだろう。もし、分からないのであれば、椎名の力量が知れる、というだけの話だ。

大通りに出る手前で、椎名はいったん立ち止まった。
ここまでいい、という仕草を見せた後、
「出張に行ってたんだって？　東北のどこに？」
「うん。秋田と……、そう。出張で」
変な答え方になってしまった。
が、椎名はあまり気にしていない。
「連絡くらいしてくれと言いたいところだが、そういうことをやかましく言うと、お前は離れていっちまいそうだ」
「……」
なんだ、分かってるじゃないか、と沙龍は微笑んだ。
いや、分かっていても追いかけてしまう心理というものを、沙龍のほうこそ分かっていないのかもしれない。
面倒くさかろうが、色恋とはそういったものなのだ。
「じゃあな、明日、起きたら連絡する」
背中を見せたまま、手を振って歩いていく。

まだ少し千鳥足である。
「うん、おやすみ」
沙龍はしばらくその広い背中を見送っていた。

同じ頃、数百メートル先の歌舞伎町、ゲイバー『マロン』の裏口では、千春があまり得意ではない場面に遭遇していた。
途中まではよかったのだ。
一ヶ月張り込んだ甲斐があって、のこのこと標的が現れたとき、ちょうど千春はマジック・ショーを終えたところだった。
これ幸いと、馴染みのホステスとイチャイチャしていた標的のテーブルにつき、最初は迷惑そうな顔をされたものの、得意の手先を生かした芸を見せ、ものの数秒で標的の心をつかんでしまった。
しばらくテーブルマジックを見せつつ、談笑し、お客さんどこの人？　と、故郷が北海道であることも知った上で聞く。

それからはもう慣れたものだ。ステージ用に切り替えた愛想のまま、千春の独壇場である。え、苫小牧？　私の父がそこの出身なんですよ。出身校が、西高だったかな。え、お客さんもそうなんですか！　すごい偶然ですねー！　もちろん、全部調べてあって、話を作っているだけだ。

初対面でも同郷の人とはすぐ打ち解けられるというマジックを使えば、相手の警戒心をだいぶはがすことができる。

標的は自分のことを個人事業主だといっていた。嘘か本当かは知らないが、それは千春にとってはどうでもいいことである。

隣に侍っているホステスのアイちゃんは事情を知らぬまま、これも千春の、ひいてはマスターの新しい営業スタイルだとでも思っているに違いない。

不景気だから大変でしょう？　と話を振って、そうなんですよ、資金繰りが大変で、という話にでもなれば、こっちのものなのだ。

「実はいい話がありましてね～」

と、裏口まで引っ張っていって、口八丁手八丁で丸め込む寸前までいったのだ。

「丸川さん、いろいろと資金もご入用でしょ？　悪い話じゃないと思うんだけどなぁ？　そのジャーナリストさん、インタビューさせてくれたら一本払うって言ってますから」

千春がそう言うと、

「い、いっぽん？　百万？」

中年は、油っこい顔を輝かせた。

ふっくらした頬や額が目立つのは、つまり、顔の各パーツが真ん中に寄っているからである。

写真を見た沙龍が「中央集権型の顔」と言っていたのがおかしかった。

この風体で、羽振りがいいときには毎晩男を買っていたという。

彼には不思議な性癖があって、女装している男性にしか興味がない。普通の女性や、手術をして女になった元男には興味がないという話だった。『マロン』に来たら必ず指名するお気に入りのアイちゃんも手術はしていない。

アイちゃんはぱっちりした目をしており、細身の体に肩の大きく開いたドレスを着た〝美女〟だった。店では二番目か三番目くらいに人気がある。

「どうです？　なんだったら、今からでも――」
千春がそう言ったところで、大柄の筋肉マンが現れた。
丸川の護衛か監視をしている男だろう。
「困るねぇ、うちのセンセーを勝手に連れていっちゃあ」
四角い顔が無表情に言う。
軍人崩れか、元スポーツ選手か、そんなところだろう。
「……」
やばいな、と千春は思った。
とても勝てそうにない。
逃げるだけなら簡単だが、そうなると、もう永遠に丸川と接触することはできない。つまり、一ヶ月の仕事はパァだ。
こういった仕事はたいてい成功報酬なので、逃がしたとなると実費の半分しか払ってもらえない。それは困るのだ。あの鬼所長に無能の烙印を押されるのだけはなんとしても避けたい。
「センセーもセンセーだぜ。どうせこういうネズミがチョロチョロしてるって

言ったろう。なのに、出かけたいなんて言うから」
迫力のある胴間声で迫った。
「そ、そりゃ、一ヶ月も軟禁されてれば、羽伸ばしたくもなりますよ」
丸川は諦めたような顔をしているが、一方的に脅迫されている、という関係でもなさそうである。
「おいおい、人聞きが悪いな。保護と言ってくれよ。……それで？　兄さんは、雑誌記者かなんかか？」
と、後半は千春に聞く。
スーツの下でぴくぴくと筋肉が動いてそうだ。
「え～と、自分はただの使いのもので～」
苦し紛れに答えるも、筋肉マンは千春の言葉など聞いていない。
「センセーのほうから新聞、雑誌社宛にファックス流しただろう。それを無視して個別交渉しようってぇのは、ルール違反じゃないのかい？」
そんなの知らないって！　と千春は心の中で叫んでいた。

翌日の昼過ぎになって東新宿探偵社に出勤してきた千春は、右腕を吊っていた。

どうやら、昨日、派手な立ち回りをして、骨を折ったらしい。いや、正確には「折られた」のだろう。本人は詳しく言わなかったが。

「どーしたの、春ちゃん」

客用テーブルで『インコ探してます』のビラを作っていた沙龍はそれほど驚いてはいない。「まだくっついてるなら幸い」といったところだろう。腕一本切り落とされてしまっては、千春の生命線ともいえるマジックはもうできない。

「ちょっとやらかしました」

そう言って、沙龍の向かいのソファに腰をおろす。

八畳の居間兼事務所には、当初、三つの机と小さな応接セットを置いていたのだが、そうするとかなり狭苦しいので、普段、現場に出ている沙龍と千春の机は取り払うことにした。

だから、このふたりが事務仕事をするときは、客用のテーブルを使っている。

来客のときは、台所か、沙龍なら自分の部屋に移動すればいいだけだ。
「大丈夫だったのか？　病院行ってきたんだろう？」
奥のデスクで仕事をしていた木佐が、いつも以上に不機嫌な顔で聞いてきた。そう見えるのはおそらく二日酔いのせいで、本当に不機嫌なわけではない。少なくとも、ここまでは。
「すみません、所長。商売道具の右腕、しばらくダメにしてしまいました。まぁ、後遺症はないだろうってのが、不幸中の幸いですが……。ギプスは一ヶ月このまま、全治は二ヶ月だそうです」
千春はビラを一枚取って眺めたまま答える。
「二ヶ月、か……」
「あ、そうだ。春ちゃん、鳥の生態詳しいんじゃない？　ハト、飼ってたんでしょ？」
ビラをしげしげと眺めている千春に、沙龍が聞いた。
「ええ、昔のことですけど」
「鳥ってさー、帰巣本能強いんだよね？　このピーちゃんも、ひょっこり帰って

きたりしないかな？」
「それは野生の話ですね。飼い慣らされているインコは、帰巣本能鈍るようです。自力でエサをとることも知らないだろうし、もし、二十四時間以内に保護されてなければ……、まぁ、死んでるでしょうね」
「え、そうなの!?　じゃあ、ほとんど望みはないわけ？」
昨日は、見つかる可能性は十パーセントもないのではないかと思ったが、現実的には一パーセントもなさそうだと知って、沙龍は肩を落とした。
五百枚刷ったこのビラも無駄になるかもしれないと思うと、一気にやる気がなくなる。
「そうですね……。逃げたインコがどこで羽を休めたかにもよりますし、その場所をたまたま同じようにインコを飼ってる心優しい人が通りかかったとしたら、もしかしたら、保護してくれているかもしれませんが……」
その言い方からしても、絶望的な感じがする。
「でも、手品に使うハトは野生じゃないのにちゃんと戻ってくるんでしょ？」
「マジックで使うハトは、かなり特殊な育て方をされてますから」

「〝特殊〟って？」
「つまり、マジシャンのもとに帰ってくるような訓練ですね」
「ふーん……？」
具体的な方法は教えてくれなかった。やはりそのあたりは企業秘密なのだろう。
そのまましばらく沙龍と千春は鳥の話をしていて、木佐はパソコンのキーを叩いていたのだが、
「こうしよう」
音もたてずにやおら立ち上がった木佐が宣言した。
「……？」
「……？」
沙龍も千春も、喋るのをやめ、木佐に注目する。
なにが始まるのだろう。いや、なにかは確実に始まるのだ。木佐がこんな据わった目をして、なにかを決意した以上。
「鈴木、いま担当してる仕事の資料一式は？」

「あ、いま、出します」
木佐は、最初に出会ったときのまま、千春に対する態度は変わらない。つまり感覚としては「同級生」なのだ。千春が年を誤魔化していたことも、本当は学籍がないことを知った後も、同級生のままなのである。
千春が慣れない手つきでキャビネットから黄色い箱型のファイルを持ってきて、木佐の机の上に置いた。
「馨の分も、頼む」
そして、沙龍にも同じように持ってこさせる。が、こちらは「ピーちゃん」の写真三枚と沙龍が昨日聞き取ってきたメモだけだった。
木佐は、黄色いボックスファイルを自分の目の前に移動させ、「ピーちゃん」の写真は千春に渡した。
「……？」
「……？」
沙龍と千春は顔を見合わせる。木佐の意図はまだ掴めない。
「鈴木は、馨のかわりにインコ探しをしつつ、事務所の電話番と、僕の代理を頼

む。新規の難しそうな仕事は断っていい。簡単そうなら片手間にやってくれ。そのあたりの裁量は任せる。で、僕は、鈴木の代わりに、重要参考人探しの仕事を片付けようと思う。ジャーナリストからの成功報酬を逃すのは事務所としては痛いし、そのボディガードと関係団体には鈴木の治療費と損害賠償金をぜひとも払っていただくつもりだ」

「ぜひとも」の部分がものすごく強調されていた。

所員ふたりは、やっとここで所長の気迫を理解する。つまり、ビタ一文たりとも損失は許さん、というわけだ。

木佐は決してケチではないが、がめつさでは右に出る者は居ない。ふたりとも、それを嫌というほど知っている。

「えっと……、で、私は？」

沙龍が嫌な予感とともに聞いた。

「馨はしばらく夏休み。儲けを出すための、最良の処置だ」

木佐は視線を合わさずに言った。

「えーと、それって……」

反応したのは千春のほうだった。
沙龍を気遣ってか、思わず先に口が出た。
木佐は一層不機嫌な顔をして、説明する。
「別に『暇を出す』という意味じゃない。出張続きで強行軍だったから、しばらく休んでていい、って言ってるんだ」
「……」
同じじゃないか、と沙龍は思う。
結局、自分は役立たずだから二軍に落とされたのだ。
（ふーん……）
そのことに対するショックはもちろんある。が、顔には出さなかった。
（まぁ、好都合といえば、好都合か……？）
そう思うことにした。
実は、役立たずのままでいい、と思っている部分もあるのだ。木佐がそう思っているのなら、好都合である。わざわざこちらから訂正する必要もない。
東北で無駄に一泊してきたことも、木佐が気付いていないなら幸いである。

「夏休み？　今日から？」
極力、平常運転で聞いた。
「今日からでも明日からでも」
木佐も、いつものように素っ気なく答える。
「そう。じゃ、春ちゃん、インコの件はよろしく。ビラ配りはしておくよ」
「あ、はい……」
五百枚の紙の束を持って、沙龍は事務所を出て行った。
千春は複雑な顔をしてその小さな後姿を見送る。
木佐はどういうつもりなのだろう。こういうやり方はわだかまりを生むだけのような気がするのだが。
かといって、自分に口出しをする権利も気力もないので黙っていたのだが、
「なにか、言いたそうだな？」
木佐のほうからそう言ってきた。
「いえ……、正しいと思います。所長の判断は」
でも、と言い掛けて、やはりやめた。

千春が飲み込んだ言葉は、木佐にも伝わってしまったかもしれない。
『正しいだけじゃ、だめなんですよ』
それは、孤児として育ち、腕一本で生きてきた千春のポリシー、いや、宗教に近い。千春から見れば、木佐小次郎は〝正しすぎ〟て、〝強すぎる〟のだ。
たまに窘（たしな）めたくもなるのである。
「まぁ、しばらく様子を見るさ」
木佐は木佐で、意味不明なことを言っている。
こちらも言葉にしなかった思いが当然あるのだ。
（馨が話してくれない以上、こうするより、しょうがないじゃないか）
木佐はそんなことを思っていた。

4　接触

沙龍は数日、家に帰らなかった。
夏休み中なのだから、どこでなにをしようと勝手だし、沙龍に関しては一般的な心配ごとは無縁のはずである。
しかし、木佐には気にかかっていることがあって、三日も過ぎると連絡がないことにイライラしはじめ、五日目には無関心を装っていられなくなり、携帯電話にメールをする羽目になった。
『馨が買ってきてくれたきりたんぽ、今日、鍋にする予定なんだが、戻ってくるか？』
返事が返ってくる確率は半々だろう、と木佐は思った。
薄暗い路地裏で、呻き声をあげている男の背中を踏みつけたまま送信ボタンを押す。
「これでよし、と」

今日の仕事もほぼ終わりだ。
あとは鍋用の野菜を買って帰ればいいだけである。
足の裏では、ゼェゼェと息を吐く大男が、なにか言っている。
「すみ、ませ……、きゅう、きゅう、ひゃ」
木佐はゴキブリを見るような目で男を一瞥してから、言った。
「ろくに税金も納めてないくせに、これくらいで救急車を呼べとは、恐れ入るな。うちの従業員は、腕一本折られても、悲鳴ひとつあげずに、自力で帰ってきて、翌日、歩いて病院に行ったそうだが？」
木佐の足元に倒れているのは、丸川のボディガードをしていた大男である。分厚い胸板は見掛け倒しで、大したことはなかった。はんちくなヤクザ者など、武道を極めた木佐の敵ではないのである。
目には目をの言葉通り、腕を一本へし折ってやった。男はその痛みに呻いている。
この男を見つけ出すのは容易かった。千春が、対峙したあの晩、分からないように発信器を取り付けておいたのだ。転んでもタダでは起きぬ、というわけであ

る。
おかげで、正体もあっさり判明した。男は前科持ちの、暴力団の下っ端だった。
丸川という例の重要参考人は、その暴力団の税理士をしていたようである。
どういう経緯で殺人事件の重要参考人となったのかは不明だが、二ヶ月前に起きたその殺人事件の被害者というのがテレビにもよく出ていた資産家なので、金絡みであることは間違いないだろう。
そこに、携帯電話が鳴った。メールの着信だ。
『帰る！　でも、今、箱根だから、ちょっと遅くなるかも』
沙龍からの返信である。
しかし、
（箱根だって……？　山登りでもしてんのか？）
最近の沙龍の行動は謎だらけである。
事務所兼自宅に戻ると、午後四時を回っていた。所長の机でパソコン仕事をしていた千春の前に、銀行のロゴの入った封筒を置く。

「……？」
もの問いたげな千春の表情が木佐を見上げる。
「腕の治療費と慰謝料だ。二ヶ月働けない損失分を計算するととても足りないんだが、いまのところ、それで我慢してくれ」
「……」
封筒の口を指一本で押し開けてみると、かなりの厚さの札束が入っている。三桁はありそうだ。
「えーと……、これ、例のボディガードが？」
「話し合いで穏便に解決したから、心配するな。金も、快く差し出してきた」
大嘘である。
この金は役立たずのボディガードが木佐に脅され、個人の口座を解約して作った金である。こんな失態を上司に言うわけにもいかないし、組の金を使うわけにもいかないからだ。
「すみません、自分の仇をとらせるような真似をさせてしまって」
しかし、その言葉の裏には「ここまでしてくれなくてもいいのに」というニュ

アンスがあった。
報復の報復を恐れてのことではない。この前の話と同じで、千春は、弱者の生き方を知っているだけである。償わせて当然、という木佐や沙龍の強者の理論には拒否反応があるのだ。
「……気にするな」
木佐はその後、何箇所かに電話連絡をしたあと、業務のほうは切り上げ、鍋の仕度を始めた。
ボディガードから聞き出した丸川の居場所は例のジャーナリストに伝えたので、これ以上のことをする必要はない。あとは、むこうでうまくやるだろう。ジャーナリストの身の安全については、依頼内容に入っていない。
台所仕事をはじめてしばらくすると、開け放った事務所では千春が素っ頓狂な声を出した。
「馨さん、箱根に居るんですか？」
パソコンのほうにもメールがきたらしい。
「らしいな」

「鍋、残しておいてね、って言ってますけど……。夕飯までに間に合うんでしょうかね？」
「まぁ、ロマンスカーなら新宿まですぐだ」
「しかし、箱根って……。山登りでもしてるんでしょうか」
「……」
そういえば、と木佐は思い出した。
どこの山か、森林か、沙龍は日本の『深い緑色の景色』に奇妙な既視感を覚えるという。
何度か、本人からその話を聞いたことがある。しかし、答えが出る話ではないので、いつも会話は堂々巡りで終わる。中国生まれ、中国育ちの沙龍が、行ったことのない日本の山の景色を知っているはずはないので、その既視感は、きっと、昔見た映画やドキュメンタリー番組のせいだろう、と木佐は言う。
沙龍いわく、小さい頃はテレビのない山奥で育ったのだから、映画にしろなんにしろ、それは上海に行ってからの話だ、と。しかし、上海時代にも、そんな日本の映画を見た記憶や、教育番組を見た記憶はない。そこで、もしかしたら、そ

の『深い緑色の景色』は、甲斐家の血が覚えている景色なのではないか、という疑いが出てくる。本人も、半信半疑ではあるのだが。

その件で、なにか新たに思い出したり、判明したことがあって、箱根まで行ったのではないか――。そんな風に考えることもできた。

沙龍は、もともと、父親である甲斐弥太郎の足跡を探しに来日したのだ。いまだに詳細はなにひとつ掴めていないのだが、甲斐弥太郎は、一時期「斎藤新助」という名前を名乗っていたらしいことは分かっている。

なぜか記憶にある緑の景色と、父親のことが関係あるのかどうかも分からないが、沙龍が謎の行動をするとしたら、そのあたりしかない。

「馨さんのこと、なにがそんなに気になってるんです？」

仕事を切り上げた千春が台所にやってきた。

左手一本でも、最低限のことはできるので、手伝うつもりのようだ。食器棚を開けている。

「……」

木佐はどう答えようか迷いながら、大根の皮を剥いていた。

勘のいい千春のことだから、気付いているだろうとは思ったが、こうストレートに言われると、面白くない。
それに、自分たちの特殊能力についても、どう説明したらいいか分からない。あるいは、説明せずに済むのならそれに越したことはないのか。
「簡単に言ってしまえば、僕が、要らぬ心配をしてるってだけなんだよな……」
迷いながらも、ぼそぼそ話し始めた。
木佐は居合のほかに古式柔術を習っているのだが、その柔術道場に、一年ほど前から沙龍も通うようになった。
最初は素人に混ざって簡単な技を習っていただけだったのだが、すぐにコツを掴んで、自分のものにしていた。もともと会得している中国拳法に、その柔術の技を加えて、我流の技を編み出したりしている。
そうして、一週間に一、二度、汗を流していたわけだが、先月、どういうわけか、運動神経は超人並みの彼女がちょっとした怪我を負った。軽い捻挫だったのだが、素人相手の組み打ちで、攻撃をよけ切れなかった、と本人は言っていた。
そんなはずはない、と木佐は思ったのだ。

動体視力も、反射神経も、すべてが非常識なレベルの沙龍が、素人の技を読めなかったはずはないのだ。よっぽどほかに気を取られることがあったか、咄嗟に反応できない理由があったのだろう。

それが、木佐の疑惑の始まりだった。

そういえば、体力だけは人一倍あるはずの沙龍がすぐ疲れたと言うようになったのも、最近だ。一度、それを指摘して以来、木佐の前では言わなくなったが、松木あたりには無意識にこぼすこともあるらしい。

「なにか、隠していることがあるんじゃないかと思うんだが……、病院で精密検査を受けてみろ、って言ったところで、聞くはずもないし」

一通り、事情を聞いたあと、千春はなにも考えずに言ってしまった。

「うすうす気付いてはいましたが、すごい突き放しているように見えて、めちゃくちゃ過保護なんですね」

「……っ」

久しぶりに手元が狂うほどに動揺した。

大根を剥き終わっていてよかった。

「あ、すみません。あんまりはっきり言っちゃいけない類の話でしたね」
慌ててそんなことを言っているのだが、却って追い討ちをかけている。
「……」
結構、いい性格をしているよな、と木佐は思う。
でなければ、シレっと天下の国立大学に潜り込んで、学籍もないのに授業を受けたりはしないだろう。
沙龍の体のことについては『黄龍の保持者』という、千春が知らない事情もあるので、「過保護」とみなされるのは仕方がない。とりあえずはそう思うことにした。
「女性の体のことはよくわかりませんが、馨さん、厄年なんじゃないですかね？」
おもむろに、千春がそんな話をしだす。
はぁ？　厄年？　なにを言っているんだ、こいつは、と木佐は思ったが、千春が言っていることもそう的外れではない。
「厄年っていうのは、いろんな要因が重なって、これくらいの年齢にはトラブル

が多いっていう、統計学ですから、それほどバカにしたもんでもないですよ。確か、女性は最初の厄年が二十歳くらいじゃなかったかな……」
「ハァ……、それで、厄除けでもしてこい、と？」
「気休めにはなるんじゃないです？　自分の養父は、やはりマジシャンだったので、芸事の神社にはよくお参りしてましたよ」
「マジシャンって、結構、信心深いんだな」
一般にはあまり知られていないが、千春の養父は一流マジシャンとして、その界隈では有名人だった。
というよりも「ハリー・タカヤマ」という名前が有名だったのである。
初代のハリー・タカヤマは戦後の日本で活躍した、天才と呼ばれた奇術師で、その名前を襲名したのが一番弟子だった千春の養父である。
二代目ハリーは、若い頃にはおもにアメリカで活動し、何度か結婚と離婚を繰り返したようだが、子供に恵まれず、三代目を育てるつもりで、日本の孤児院を訪問した。そこで、千春と出会って、引き取ることにしたらしい。
木佐に偽学生であることがバレて、身の上話をしたとき、千春が語った話だ。

「別に、自分に才能があったとか、二代目がそれを見抜いたとか、そういう話じゃないんですよ」

なんでも、二代目が千春を選んだのは、何人か居た孤児たちの中で「容姿も性格も一番地味だったから」だそうだ。

マジシャンは個性の強い者には務まらないらしい。ステージに立つのだから、華やかな外見のほうが好まれると思うのだが、あくまでも見せるのは『芸』でなくてはならない、というのが二代目の主張なのだった。

「自分はそのときまだ二歳くらいだったんですけど、よっぽど、周囲に埋もれてたんでしょうね」

自嘲気味に呟かれる言葉には、昏い眼差ししかない。

彼は生まれてすぐに、孤児院の前に捨てられていたという。

本当の両親のことはなにも分からない。普通は、捨てるにしても、母親らしき人がお守りを身につけさせたり、数日分の粉ミルクや哺乳瓶を置いていくものなのだが、千春に関しては本当に「産み捨て」の状態だったという。駅のトイレではなく、孤児院の前に置かれていたのがせめてもの善意だった、ということかも

しれない。
おおかた、孕んだことも相手のことも誰にも言えず、十代の若い母親がひとりで産み落とした赤ん坊だったのではないか。千春は昏い瞳でそう語った。
「孤児院の先生たちは、みな、心得てますから、そういう情報を教えてくれることはないんです。自分が、勝手に当時の記録を盗み見たんですよ」
二代目ハリーに引き取られてからは、少し変わった幼少期を過ごすことになる。
マジックの修業をするかたわら、養父の地方巡業や海外の公演にもついていく。当然、学校は転々とする羽目になり、友達はできても、その場限りの、付き合いの浅いものとなった。
千春が人付き合いにおいて一歩も二歩も引いているのは、そういう経験の蓄積があるからだ。
「二代目とは正式に養子縁組はしてないんです。芸名はいくつも、何度でも変えられるけど、生まれながらにして持っている戸籍は変えないほうがいいっていうのが、あの人の考えでしたから」

「じゃあ、鈴木というのは……？」
「自分の、もともとの戸籍名です。両親が不明の赤ん坊の場合、氏名は市区長につけてもらうんですよ。鈴木は、当時の東京都知事さんの姓をもらったそうです。千春っていうのは、自分が拾われたのが春だったから、らしいですよ。そういう情報は、教えてくれるんですよね」
大学の食堂で、そんな話をしたのが一年前のことだ。
「厄除けか……、そうだな、連れて行ってみるか」
自分の息抜きにもなるかもしれない、と木佐は思った。
ここのところ、仕事仕事で、ろくに休んでいないのだ。土日もなんだかんだ仕事をしている。
従業員ふたりにはなるべく休みを取らせるようにしているが、最近の自分はまるでワーカホリックのようだ、と苦々しく思っていた。
鍋の用意はすっかり出来上がっている。
メインのきりたんぽのほかには、鶏とネギ、あとは大根、ゴボウ、マイタケなどを入れる予定だ。

沙龍は八時前には帰ってきた。
「ただいま！　あ、いい匂い！」
日に焼けた顔で、お土産の『温泉まんじゅう』を木佐に押し付け、缶ビールを開けつつ、既に自分の席に座っている。
「秋田ではね、味噌をつけて焼いて食べたりもするんだよ。宿で食べたの、美味しかったなー」
いつもの沙龍と変わらない。適当に相槌をうっている木佐も、さっき千春に見せた動揺を綺麗に消している。
その様子を見て、このふたりはもう家族に近いんだな、と千春は思った。
血のつながりがなくとも、自分と養父が家族だったように。
思春期になってからは、進路のことで何度も喧嘩したし、険悪なまま一緒に夕飯を食べたこともある。しかし、自分にとって、育ててくれた養父はすべてだった。
気難しくて、感情の起伏が激しくて、わがままなところもあったけど、それでも、孤児だった自分に家族をくれたこと、生きる術を教えてくれたこと、喧嘩を

したあとは必ず笑顔になるようなマジックを見せてくれたこと、そのすべてに感謝している。
その養父は、千春が中学生のとき、大掛かりなショーの最中に事故死した。
それが千春の心に傷を残したままになっている。
「……春ちゃん？」
沙龍の緑青の瞳が、ぬっと眼前に現れた。
ファニーフェイス、とはよく言ったものだ、と思う。
この同僚に関しては、百歩譲って「可愛い」という形容詞は無理矢理言えなくもないが、「美人」とはお世辞にも言えたものではない。
木佐小次郎が美形なだけに、『美少年と珍獣』とでも言いたくなる。
「あ、はい？　ごめんなさい、聞いてなかった」
「だから、『ピーちゃん』はどうなったの？　って」
「ああ、インコですか。いまのところ、残念ながら、情報はなにもないです」
「うーん……、やっぱ見つけるのは無理なのかなー」
「まぁ、三ヶ月後に奇跡的に保護された例なんかも、数少ないですがありますし

……、気長に情報集めするしかないですね」
「腕は大丈夫なの？」
「大丈夫ですよ。一応、左でも箸は使えますし……」
「春ちゃんさぁ、今度、一緒に道場でも行ってみる？　このリスキーな仕事を続ける気なら、護身術は身に着けておいたほうがいいかもよ？」
沙龍の提案は、耳に痛くもあり、渡りに船でもある。
千春は千春で、東新宿探偵社では一番数字を稼いではいても、強面（こわもて）が出てくるケースではまったく役立たずという負い目があった。
「そうですね……。右腕が治ったら、考えてみます」
きりたんぽ鍋を三人でつつきながら、沙龍が「やっぱ夏に鍋はいまいちだね」などと言うので、木佐も負けずに「だったらお土産はもう少し選別してくれ」と返している。
千春はたいていふたりが話すのを黙って聞いて、大人しく食べているのが、この家の食事風景だ。
そうして、飲み食いもおおかた終わったところで、

「で、誰なんだ、この弁護士は」
木佐が名刺を摘んで見せる。お土産のまんじゅうが入っていた紙袋の底に落ちていた名刺である。
それは、まるで夫の浮気を追及する妻の口ぶりであった。
「箱根にはこの弁護士と行ってきたのか？」
「え～っと、一緒に行ったわけじゃなくて～。現地で集合したっていうか……」
「別に、馨が誰と不倫しようが、僕の知ったこっちゃないが」
「なんで不倫って決めつけんのさ」
「弁護士には元ＣＡだの、ミスなんとかだのっていう奥さんが居るもんだ。世の中そういうもんだろう」
「うわ、すごい偏見」
「……ちょっと、すいません」
と、千春が木佐の手から名刺を取った。
その手つきはとても優雅である。
木佐も、取られたことが一瞬分からなかった。

「倉敷市？　なんでそんな地方の弁護士さんが？」
名刺の住所にはそう書いてある。
名前は、江田秀樹。
「だから、不倫でも、ナンパでも、ヘンな宗教の講習会とかでもなくて、その人から、遺産の件で呼び出されたの。二週間くらいまえに手紙がきて――」
「遺産？」
沙龍の説明によると、江田という男は、岡山の神谷藤四郎という人物の顧問弁護士だそうだ。
そして、神谷藤四郎なる人物は、生き別れの孫を探している、という。
「どうも、その神谷っていうじいちゃんが、私の母方の祖父らしいんだよね」

5　チンジュ

仕事最優先の木佐が、翌日の平日を臨時休業にしてまで三人で地元の花園神社に行くことにしたのはいくつか理由があるが、一番の決め手となったのは、単に今日がちょうど神社主宰の夏祭りだったから、である。

夕方にもなれば盛大に盆踊りが行われる。毎年の、新宿っ子たちのイベントのひとつでもあるのだが、新宿区民になって三年目というのにまだ一度もこのお祭りに参加したことがなかった。

この地元の神社で、沙龍の厄払いと、千春の怪我の平癒祈願と、あとは商売繁盛などもごちゃっとまとめてやっておこう、という少々欲張りな話である。

「盆踊りなら、浴衣のほうがよかったんでない？」

なぜかスーツ姿の沙龍が鳥居の端っこに立ってぶつぶつ言っている。

木佐も、久しぶりにネクタイを締めていた。

「あくまでも、メインは厄払いと祈願なんだからな。神仏に対する礼儀ってもん

があるだろう」
「キサさん、結構、形式美の人だよねー」
などと、揶揄される。
「形式美」の本当の意味を分かって使っているわけではないのだろうが、沙龍の日本語も三年経ってだいぶマシになった。
出会った当初は、会話に中国語の単語がまじることがよくあったのだ。
中国語はさっぱり分からないので、木佐も、最初は沙龍が何を言いたいのか、理解する努力をした。と、いうほど実は努力もしていないのだが、要するに、これはこう言いたいのだな、とすぐに気付けるような、勘のよさが備わっているのが木佐小次郎なのである。
「浴衣、着たかったのか？　去年、着たとき、動きにくいって嫌がってたくせに」
「そんなこと言ったっけ？」
木佐が言っているのは、沙龍が当時付き合っていた彼氏に「浴衣を着て一緒に花火大会に行こう」と言われたときのことだ。彼氏は浴衣を一式買ってくれたの

だが、いざ、それを着てみると、とても初心者には難しく、ひとりでは着れなかったので、最終的に木佐に手伝ってもらったのである。

ちなみに、着て一分で「腹が苦しい」と言っていた。「これじゃイカ焼きとか食えないじゃないか」とも。

そうこうしているうちに、千春も、夏用のスーツ姿でやってきた。片手ではネクタイをするのも難しかっただろうが、ちゃんと結べている。

午後になったばかりの時間帯で、まず、沙龍がひとりで厄払いをしてもらった。

宮司らしき人が、大幣（おおぬさ）と呼ばれる、紙垂（しで）のたくさんついた棒を左右に振るのだが、それがモップに見えて、沙龍はちょっと笑いそうになった。

その感想はあながち間違っていない。モップの房（ふさ）が汚れを取るように、特殊な折り方をした紙垂が『穢（けが）れ』を持っていってくれる、という考えらしい。

沙龍の厄払いが終わると、千春の平癒と、木佐の商売繁盛の祈願も順にやってもらった。時間は全部で三十分もかかっていない。

費用は全て「経費」ということで木佐が出してくれた。こういうところは太っ

腹である。
既に昼過ぎから、鳥居の外では屋台がチラホラ出現しはじめている。これがなければ、沙龍は来なかっただろう。「厄払いィ？　別にどこも悪くないってば」と、最初はぶつぶつ言っていたのだ。
沙龍は早速、やきそばの屋台を見つけて、財布を取り出していた。
「春ちゃんの分も買ってくるよ。やきそばでいい？」
「あ、はい。お願いします」
「キサさんは？」
「僕はいい。あっちの焼き鳥を何本か買ってくる」
他にもたこ焼きや缶ビールを買い込み、階段に座って遅い昼食にした。
三人ともスーツ姿なので、会社帰りの新人みたいな図になっている。
千春は右手が使えないので、沙龍があれこれ世話をしてやった。缶ビールを開けたり、たこ焼きを食べさせたり。弟がいるので、こういうことをするのは意外に慣れているのだ。また、千春も異性だからといって遠慮するところがないので、傍目には仲のよい兄妹に見えなくもない。

「なんか、楽しいですね」
フフっと千春が笑った。
「そぉ？　春ちゃん、お祭り来たことないの？」
通りはだいぶ賑やかになっていた。浴衣姿の男女や、盆踊りのスタッフたちが行き交っている。
警官が笛を鳴らしながら、交通整理も始まった。
「お参りはよくしてましたけど、こういうお祭りはなかったですね」
「お祭りの屋台こそが、ジンジャの、えーと？　ゴダイゴなのになー」
「醍醐味」
木佐がボソッと訂正する。
その一瞬のやりとりの意味が、千春には分からなかった。だいぶ経ってから「ああ、そういうことか」と理解する。
兄妹のような関係は、本当はこちらなのである。
「自分は養父を亡くしてからはずっとひとりでしたから」
「……そっか」

千春は、表面上は誰とでもコミュニケーションできるのだが、たとえば夏祭りに一緒に出かけるような友だちは居なかったようだ。たぶん「できなかった」のではなく、「作らなかった」のではないか、と沙龍は思っている。

文字通り、ひとりで生きてきたのだ。それも、かなり淡々と。

もともとの性分として、人恋しいという感覚が薄いのは確かだろうが、それでも、寂しくなかったのだろうか、と沙龍は思う。

どんな人間にも理解者は必要だし、心の底では自分を肯定してくれる心地のよい存在を希求するものである。

沙龍にとって、それは木佐小次郎である。おそらく、木佐にとってもそれは同じだろう。

では、鈴木千春にとっては？　彼をこの世に結び付けているものはなんだろう。

口数少ないながらに話すことといえば、養父のことしかないので、言わずもがなである。

つまり、まだ、養父に代わる存在を見つけていない。そして、彼はいまだに、

大事な存在を失ったという衝撃の中に居るのかもしれない――、と沙龍には思えるのだ。

どこかの屋台のラジカセから、童謡のような音楽が流れていた。

境内には、やぐらが設置されており、その周囲を機材を持ったスタッフがうろうろし始めている。

沙龍は最後に残っていたイカ焼きをパクっとくわえたまま、固まってしまった。イカ焼きが硬かったわけでも、不味かったわけでもない。

『むーらのちんじゅのかーみさまのー』

ラジカセから聞こえてくる音楽が、沙龍の動きを止めたのだ。いや、正確には『歌詞』が、である。

固まっている沙龍に、木佐がどうしたんだ？　という目を向けると、

「この歌」

「『村祭』だと思うが？」

「っていうの？　タイトルが？」
「ああ、確か、文部省唱歌で……」
「歌詞、分かる？」
「一番なら、分かる。村の鎮守の神様の……」
「うん、それそれ。チンジュってさ……、なんなの？」
「なに、と言われてもな」
日本語の意味を外国人に聞かれてもうまく説明できるものではない。
考えあぐねて、缶ビールを持ったままふたりの話を聞いていた千春に視線を合わせる。
千春はなにか思いついたらしく、携帯電話を取り出していた。
ｉモードで辞書サイトにつなげる気か、とすぐ分かった。木佐もよく出先では使っている。去年開始されたこのサービスは、興信所の所員たちの仕事をだいぶやりやすくしてくれた。
「文字通りでいいなら『鎮めて』『守る』って意味だけど」
と、千春が目当ての情報にたどりつくまでに、木佐が説明する。

「鎮めるってことは、荒ぶるなにかがあるってことだよね？」
ほぼ外国人である沙龍は、たまに、こういう穿ったことを言う。
「荒ぶるものってなに？　神なの？　それとも、神が荒ぶるものを鎮めるって意味？」
「……」
さすがに、答えられなくなった木佐は、千春を見た。
バトンタッチで、今度は千春が携帯電話の小さな画面を見ながら、教えてくれた。
「馨さんの聞いている意味で答えるなら、荒ぶるものを鎮めるのが神なら、荒ぶるものもまた神、ということになりますね」
「……うん？」
「もともと、鎮守という言葉は、軍隊を駐在させてその土地を守るという意味ですが、『鎮守神』として使う場合も同じく、その土地を鎮めて守る、という意味以上のものはないみたいですよ」
「じゃあ、荒ぶるものってのは？」

「土着の神でしょう。それを鎮める上位の神が『鎮守の神様』となるみたいです。まぁ、今は習合……、というか、同一視されてるんでしょうね」
「ふむ……」
千春の携帯を奪って、すみずみまで閲覧していた木佐も頷いている。
「つまり、鎮守神はよそ者ってことか。……で、なんで『鎮守の神様』が気になったんだ？」
木佐が、イカ焼きを頬張り、咀嚼している沙龍に聞く。
沙龍の中では、もう、解決したようだ。
「前にさ、日本の緑の景色を見たことがあるかも、って話をしたことあったでしょ？　あれって、なぜか『チンジュ』って言葉とワンセットになってるんだよね。チンジュのモリ、チンジュのカミ……、意味は分からないのに、音として脳みその縁（へり）にこびりついてる感じなの」
「ああ、それも、チラッと聞いた記憶があるな」
「私は、その緑の風景も、『チンジュ』って言葉も、父方の、甲斐家のことと関係あるのかな、ってなんとなく思ってたんだけど、そうじゃなくて、お母さんの

ほうかもしれないって、岡山の弁護士先生に会ったときに思ったんだよ」
「まぁ、可能性としてはありだろうが……。また、なんで」
「うん、その弁護士先生に、岡山の写真を見せてもらったのね。そしたら、『あ、ここ知ってる』って思った風景が何枚かあったんだ」
だいぶ胡散臭い話である。
それは、沙龍の思い込みかもしれないのだ。
「フム……、それで？」
「だから、行って、確かめてこようかと思って。私、夏休み中だから、いいよね？」
「……」
ダメだ、とは言えない。
そんな権利はない。
しかし、木佐は、そう言いたくなる衝動を覚えたし、また、なぜそう思ったのか、自分でも理解できずに黙ってしまった。
ようやく言ったのは、

「……体は、大丈夫なのか？」
その一言だった。
が、沙龍は眉間にしわを寄せる。
「なんの話？」
「いや……、問題ないなら、いいんだが……」
「……」
「……」
今度は、ふたりして黙る。
千春は目だけで交互にふたりを見て、木佐が沙龍の体を心配しているくせに、ちょっと前までは、売れっ子の芸能人のような過密スケジュールを言い渡していた理由に、やっと思いあたった。
木佐は、「疲れるからイヤだ」「しんどいからムリ」という言葉を引き出そうとしていたのだ。
しかし、沙龍はなかなかそうは言わない。ぶつぶつ言いながら出張も行くし、赤字ながらも仕事はこなす。逆効果だったわけである。

「自分が、一緒に行きましょうか？」
千春がそう言うと、ふたりとも、別々の理由で怪訝な顔をする。
その視線を受けて、
「所長は東京を離れるわけにはいかないでしょう。右手の使えない自分が居ても、本当に電話番くらいしかできないし。でも、馨さんの話し相手なら、多少は役に立てますから」
と、説明した。
「話し相手？　お守りってこと？」
沙龍の声はやや非難めいている。
「えーと、そういう意味じゃなくて……。自分は地方都市はたくさん行きましたから、案内役っていうか。岡山も何度か行ってますし」
にこにこと言う。これが出ると、千春は無敵だ。
「そうだな……」
木佐が、ぽそり、とこぼした。
「それがいいかもしれない。鈴木、馨を頼む」

「え、ええ……？」
そんなことを言い出す木佐に、沙龍のほうが驚いている。
「鈴木は、正月もほとんど休んでないからな。一ヶ月くらい遊んできていいぞ」
「はい。じゃあ、遠慮なく」
千春が正月休みを取らなかったのは、一緒に過ごす家族も友人も居ないからなのだが、有給を取ってくれない社員というのはそれはそれで雇用者側も困るのだ。
このとき、男ふたりの暗黙の了解事項に、沙龍は気付いていない。
自分が『守られる側』だとは思っていないからである。

6　いざ、倉敷

江田弁護士が甲斐馨を探し当てたのは、ほとんど奇跡に近かった。偶然か、それとも、神の采配か。

クライアントである神谷藤四郎から「顔も分からない孫を探し出したい」と言われたときは、冗談かと思った。

なにせ、名前とだいたいの年齢しか分からないし、その『甲斐馨』という名前ですら名乗っているかどうかも分からない、という。

生死も不明だし、致命的なのは、地球上のどこに居るか分からない、という点だ。外国かもしれない、というのである。

そんな状態で人ひとりを見つけ出すのはほとんど不可能ですが、日本国内だけなら探してみましょう、としぶしぶ請け負ったのが今年の四月である。

こんな無茶な依頼でも、江田家は、代々、神谷家の臣下の家柄という関係上、断れないのだ。

しかし、運はあったようだ。
六月になって、東京の宇佐美という男から怪しい連絡があったときは、昔の人脈を駆使して、逆にこの男に探りを入れる羽目になった。
そして、どうやら敵ではなく、どころか、甲斐馨を知っているらしい、と確信する。宇佐美も、また、江田がなんの目的で甲斐馨を探しているのか、探りを入れていたのだろう。
やがて、宇佐美からは『東新宿探偵社』という事務所のことを教えてもらった。
甲斐馨はそこで所員をしているという。現在、十九歳。私立新宿高校を卒業しているが、以前はどうやら海外に居たらしい、ということも分かった。
（百合ちゃんはやっぱり、大陸に渡っていたのか……）
後ろの席でシートを倒し、スヤスヤ眠っている甲斐馨を見た。
新幹線の車内はほどよく冷房が効いていて、確かに午後の眠気を誘う。
最初に箱根で会ったとき、この日本人離れした童顔から、神谷百合子の面影は見つけるのが難しかったが、こうして寝顔を見てみると、顎のラインや口元が確

かに似ているかもしれない。
百合子に似れば、たいそうな美人になれたろうに、と少々気の毒に思いつつも、これはこれで、ちっちゃな珍獣のようで可愛いのかもしれない、とそろそろ還暦に近い江田は思う。
不思議なベージュ色の髪も、地毛だという。渋谷を歩いている金髪の女の子たちとはだいぶ違ったタイプだ。
江田は、百合子のことは小さい頃から知っていたが、駆け落ち相手である甲斐弥太郎のことはまったく知らない。見たこともないのだ。
なにせ、甲斐弥太郎が倉敷に現れてから、一月もせずにふたりはいなくなってしまったのだ。まるで神隠しにあったかのように。神谷藤四郎が娘の失踪直後に「娘がかどわかされた！」と騒いだのも無理はないだろう。
しかし、よくよく話を聞いてみると、かどわかしではなく、正真正銘の駆け落ちで、百合子自身の書置きもちゃんとあったのだ。
それを父親の頑固さで、「あの行きずりの男に騙されたか、強制的に書かされたに違いない」などと主張し、騒ぎを大きくしたのも藤四郎である。

周囲の人々は最初こそ藤四郎の話を信じ、同情もしたが、次第に「百合子さんは、偏屈頑固親父に愛想をつかして自ら出て行ったのでは」などと噂しはじめるようになった。

それが一九七九年、今から二十一年前のことだ。

江田も、当時のことはよく覚えている。二十歳になったばかりの百合子は、地元の短大を卒業して就職しようとしていたところを、父親の藤四郎に反対され、断念し、家でくすぶっているところだった。

藤四郎は、道場に通ってくる子弟のひとりと結婚してほしかったようだが、百合子は結婚願望もなく、あまりその話には積極的ではなかった。

そこに、甲斐弥太郎という男がふらりと倉敷に現れる。

その経緯は、江田は知らない。弥太郎が百合子とどうやって出会い、恋に落ち、駆け落ちする羽目になったのかも、聞いていない。それは、藤四郎でさえよく分かっていないのだ。

「ご隠居は詳しく語らないんですが、なんらかの事情があって、甲斐弥太郎さんをしばらく家に泊めていたみたいですね」

箱根の富士屋ホテルのラウンジで、焼きたてパンを頬張る沙龍に、江田はそう説明した。
江田はスマートな紳士で、常に英国製のスーツを着ている。こういった老舗のホテルの雰囲気に決して負けていなかった。
いまは倉敷市に弁護士事務所を構えているが、以前は東京で裁判官をやっていたという。
「その神谷藤四郎サンは、どうやって孫の存在を知ったんですか？　駆け落ちした娘から便りでもあった、と？」
箱根のこのホテルを指定したのは沙龍である。ジョン・レノンも泊まった有名なホテルで自家製の焼きたてパンが美味しい処、として知っていた。
手紙をもらった翌日、倉敷の事務所に電話をしてみたのだ。そうしたら「会ってお話ができませんか？」と言われ、なら東京まで来てもらうのも悪いから箱根にしよう、と言ったのも沙龍なのである。
東京まで来られて、木佐に知られるのがなんとなく嫌だったのだ。もちろん、すぐにバレたわけだが――。

「わたしが聞いていたのは、百合子さんはひとり娘を産んだはずだ、という話だけですので……。じかにご隠居に会ったときに聞いてみてください」

箱根では、百合子や藤四郎の写真などを見せられ、ぜひ一度、神谷藤四郎に会ってやって欲しい、と言われた。恐らく、あなたのお祖父さんですから、と。

沙龍はあっさり「いいよ」と言った。じゃあ、二、三日ここで待ってて、旅支度をしてくるから、と。

その二日後、待ち合わせの小田原駅に現れた沙龍は暗い瞳をした青年と一緒だった。

たったひとりで会ったことのない祖父に会わなければならないのだから、心細かったのだろう、と江田は思ったが、どうも、ふたりを見ていると、そういう感じではない。青年はお目付け役か、と思った。

眠っている沙龍の隣で、千春は静かに本を読んでいる。読書家の木佐に借りてきた本だ。新幹線の中で暇なので文庫を何冊か貸してくださいと言ったら、部屋から適当に持っていっていいよと言われ、適当に持ってきた。テンポのよい時代小説で、結局、小田原から新倉敷までの間、ずっとその本を読んでいた。

新倉敷の駅に着いてみると、お迎えの車が来ていた。
黒塗りのセダンの前で、運転手の若い男が江田を出迎えている。弁護士事務所のスタッフだろうか。
江田が、沙龍と千春に後部座席を示すと、千春が一歩引いてから言った。
「あ、自分はそのご隠居のお宅にお邪魔するわけにもいきませんので、ホテルに予約を取ってあります。お構いなく」
「え……？」
ここで別れるなら、なんでついてきたのか。
沙龍は不審な顔をしてみせたが、千春は営業用のにこにこ顔で「さ、行ってらっしゃい」などと言っている。
見かねた江田弁護士は、
「大丈夫ですよ。広いお屋敷ですし、先方にはお客はふたりだって伝えてありますから」
新幹線の中で連絡したのだろう。さすがに機動力がある。
しかし、千春は譲らなかった。

「いえ、今日は生き別れの祖父孫が対面するのでしょう？　自分がお邪魔するわけにはいきません。もし、馨さんが向こうに一泊するようなことになるなら、翌日、自分のほうからご挨拶に行きますよ」
「……」
若いのに、しっかりしてるな、と江田弁護士は思った。
確かに、親戚でもなんでもない千春が同席するのは、不自然ではある。
「えー……」
沙龍は不満そうだ。やはりひとりでは嫌なのだろうか。
「なにかあったら連絡してください、ここから歩いて一分くらいのビジネスホテルに居ますから。携帯、持ってますよね？」
そう言ってやると、やっと頷いた。
「うん、分かった。行ってくるよ」
新倉敷の駅は、驚くほどこじんまりしていた。新横浜などと比べると、とても同じ新幹線の駅とは思えない。ついこの前行った、秋田の鉄道の駅とあまり変わらないほどだ。

戒厳令でも敷かれたのか、と思うくらい、人が居ない。
新宿の人混みがデフォルトになっている沙龍にとって、この閑散とした風景は、逆に物珍しかった。
地方ってこういうことなんだな、と思う。沙龍はいままで、両極端しか知らなかったのだ。生まれ故郷は馬しか移動手段のないような村で、その後、連れて行かれた上海は煌びやかな眠らない街だった。中庸というものを知らなかったのである。
若い運転手に軽く挨拶し、後部座席に乗り込む。江田弁護士は助手席に座った。
「ここからは、三十分弱かかります。楽にしていてくださいね」
紳士の口調で江田が言う。
神谷家は、美観地区の近所だということだが、沙龍は地理がまだよく分かっていない。が、地図を買って確認する必要もない気がしていた。
今日、神谷藤四郎に会って、しばらく話をしたら、すぐ帰るつもりでいるのだ。遺産の話があるらしいが、それは要らない、と断るつもりでいる。

一泊する流れになっても、神谷家に泊まるのは気が引ける。もしそうなったら、丁寧に断って、千春の居る新倉敷の駅前に戻ろう。そう決めた。

なんだかんだ言って、千春が居るのは心強いのだ。仕事上での苦楽を共にしているのだから、やはり、安心感はある。

車窓は、ごく控えめな普通の町並みを写していた。背の低い建物と、ところどころの緑。

そういえば、少し、甲府の町並みに似ている。三年ほど前に、来日してすぐ行った町である。倉敷も、甲府も、城下町という意味では、共通する部分はあるだろう。

「緊張なさってます？」

「まぁ、少し」

と、正直に言った。

「というより、戸惑っている、というほうが強いんですが」

「え……？」

「だって、私、その神谷さんの本当の孫かどうか、分からないんですよ？」

江田が見せてくれた百合子の写真をパソコンに取り込んで、サンフランシスコに出張中の碧媛（へきえん）にメールで確認してもらったが、確かに本人だといっていた。

しかし、母親の正体が分かったところで、自分が本当にその母の娘なのか、確信できるような人は居ないし、証明できるような書類はなにもないのだ。

「それは間違いないと思いますから、大丈夫ですよ。なんだったら、ＤＮＡ鑑定してみればいいですし」

「うーん……」

遺産がらみなら、鑑定でもしてみせないと、却って先方が不安だろうが、沙龍は遺産は要らないのである。

なら、なぜ来たのか、といえば、やはり血縁というものに会ってみたかったからだ。もちろん、例の写真の景色も気になっている。

自分と血のつながりがあるのは、この世で偃月ただひとりだけだと思っていた。それが、見知らぬ祖父が居るというのだ。

そして、恐らく、その神谷藤四郎は、日本での甲斐弥太郎を知る貴重なひとりだろう。いま会っておかないと後悔する、と思った。

大通りを外れてほどなくして、停車した。緑が多い。住宅街なのだろうが、東京の狭苦しい住宅街とはまったく違っていた。
（うわ、でっかい家……）
セダンを降りると、時代劇に出てくるような立派な門が目の前にあった。
その先には、石畳が続いており、左右には背の低い木々が植えられている。
日本に来てから、こんなに広い敷地を持った個人宅は見たことがなかった。
「どうぞ」
江田が半歩下がって、沙龍を先に案内しようとする。
「ここが、神谷百合子さんの育った家、ですか？」
「え、ええ。生まれ育った家、ですね」
江田が一瞬妙な顔をした。自分の母親をフルネームでさん付けするのがおかしかったのだろう。
それも無理はない。沙龍は両親の顔を知らないのだ。とりわけ、母親のことは本当になにも知らなかった。百合子の旧姓すら知らなかったのだ。
時代劇では『北町奉行所』という木の看板がかかげられているところに、『神

谷』という古い表札があった。これはいつから掛けられているのだろう。百年前からだ、といわれてもおかしくはない感じがした。

江田からもらった写真の中の黒髪の少女が、この門から出てくるところを想像した。彼女が、ほぼ二十年間過ごした家だ。

「お邪魔しまーす」

パリッと気持ちを切り替えて、門をくぐる。

母屋の向こう側に道場らしき建物も見えた。居合道場だろう。神谷藤四郎は師範なのだそうだ。

以前、木佐に連れていってもらった東京の居合道場と同じような造りだが、広さはだいぶ違う。

岡山は、日本のどこよりも剣道が盛んなのだそうだ。江田から色々と教えてもらった。宮本武蔵のおかげだとか、または、長船派が名刀をたくさん世に送り出した影響だとか。

その剣道の盛んな町で、代々、岡山藩主の剣術指南役を務めていた神谷家の当主がいまだに近所の人から「先生」と呼ばれているのも、お国柄なのだろう。

「えっ？　先生、ご不在なんですか？」
中年の女性が玄関に出てきて、藤四郎の不在を告げると、江田は青くなった。
「だって、今日、馨さんをお連れするって、連絡したじゃないですか！」
「ええ、私からはちゃんとお伝えしましたよ？　でも、散歩に行ってくるとおっしゃって、出て行ったきり……」
ふたりは、しばらく絶句して顔を見合わせている。
なにかおかしいな、と沙龍は思った。
じゃあ、新倉敷のホテルに戻ります、と言ったのだが、必死になってふたりで引き止めるのが、いよいよ怪しい。
どうやら、その『先生』が曲者なんだな、というのは分かる。
孫に会いたくなくて、逃げたのか……？
自分から探せといったのに……？
考えてもしょうがないので、とりあえずは、母屋にあがらせてもらうことにした。

7　祖父ト邂逅ス

カステラだの、饅頭だの、苦手な甘いおやつがたくさん出てきたが、沙龍はお茶だけでいいと言って、事実、緑茶にしか口をつけなかった。

それを遠慮していると思ったらしい。江田弁護士も家政婦の女性も、あれこれと気を使って勧めてくる。苦笑いで断るしかなかった。

そうして数時間は過ぎただろうか。

もうそろそろ夕飯時、という時間である。

待ち疲れた江田は、

「先生が戻ってきたらすぐ連絡してください」

と、女性に言い残して、帰ってしまった。

ほかの仕事もあるだろうし、いつまでも帰ってこない不良老人をここで一緒に待っているわけにもいかないのだろう。

ひとり取り残された沙龍も、千春のところに戻ろうとしたのだが、家政婦の女

性に「後生ですから！」と泣きそうになって止められた。
そして、広い客間で、ぽつんとひとりで食事をする羽目になってしまった。
豪華な刺身の盛り合わせが出てきて、それはそれで美味しかったのだが、こんなシチュエーションで黙々と食べても美味しさは半減である。
家政婦はもうひとり若い女性が居て、ふたりで屋敷の家事をしているようだ。
年輩のほうがスガさん、若いほうはミオちゃんと呼ばれていた。
食事を作ったのは、板前の男性だという。こちらは常駐しているわけではないようだが、普段の神谷藤四郎の生活ぶりが知れようというものだ。
（お手伝いさんが居て、専属コックも居て、門弟もぞろぞろ居て……。神谷百合子は、こんなお屋敷のお嬢さんだったわけか）
なに不自由のない暮らしだ。
それなのに、なぜ、行きずりの男と駆け落ちなどしたのだろう。
お屋敷での暮らしを捨て、行き着いた先は、文明をことごとく排除したような、名もなき中国の山村である。
あの閉鎖的な村は、よそものの百合子には決して居心地もよくなかっただろう

し、電気の暮らしを知っている者には、厳しい毎日だっただろうと思う。
それでも、碧媛から聞いた話では、あの夫婦はふたりとも非常に穏やかで、村民とも仲良くやっていた、というのだ。仮面夫婦だったにもかかわらず、仲のよい兄妹のようで、幸せそうでもあった、と。
謎だらけである。
いったい、どういう出会いで、どういう関係で、そうなったのだろう。それが知りたくて、二十畳はありそうな広い客間でひとり、こんな味気ない食事をしているのかもしれなかった。
（神谷藤四郎は、きっと、なにか知っているに違いない）
沙龍はそう思う。
しかし、結局『先生』は帰ってこなかったのだ。
なのに、誰も騒がないし、探そうともしない。つまり、こんなことはよくあることなのだろう。
結局、このお屋敷に泊まることになってしまった。
案内された部屋は八畳間で、庭に面した一番いい部屋だという。既に、殿様が

寝るような厚みのある布団が敷かれていた。
さらに、スガさんは寝巻きも出してくれたし、歯ブラシやタオルなども、旅館のようにほぼ全部揃えてくれている。最低限の旅支度はしてきたのだが、手ぶらで来てもよかったのではないかと思えるほどの、至れり尽くせりのもてなしである。
家政婦ふたりは小さな離れに寝泊りをしているそうで、なにかあれば内線で呼んでください、と言っていたが、ということは、この母屋は今夜は自分ひとりなのか――。おばけが出たらどうしよう、と思いつつも、霊感がないから居ても気付かないので大丈夫、と思うことにした。
檜風呂からあがって、部屋に用意されている小さな冷蔵庫を開けたら、ジュースとミネラル・ウォーターしか入っていなかった。ビールがよかったが、贅沢は言うまい。エビアンをもらって、飲み干す。
ほかにすることもないので、十時には布団に入って、千春としばらくショートメールのやり取りをした。
『成り行きで、神谷家に泊まることになっちゃった。しかし、じいさまは現れず

……。嫌な予感がするよ』
『よく家出する人なんでしょうか？　とりあえず、明日にならないと動けませんね。朝、連絡ください』
『らじゃ。おやすみ』
『あ、所長に連絡しました？』
『してないけど、しなくて大丈夫』
『そうですか。おやすみなさい』

早朝五時という時間である。
既に東の空は白んでいた。
沙龍が目を覚ましたのは条件反射といっていい。知らない場所で、物音が起きたら目を覚ますようになっている。そう訓練されたのだ。
物音だけではない。沙龍の体は小さな「気配」にも反応するようになっている。その「気配」の正体がなにかといえば、聴覚以外では、視覚や、触覚で知覚

できるもの、となる。つまり、動くもの、その形や色、温度や、空気の流れといったものだ。

達人になると、自分の発する気配を消すことができるという。それは、呼吸がコントロールできるかどうかということだ。人の呼吸は、一番、気配の素となる。それを制御することができれば、ほぼ気配も消すことができるというのである。

敵は呼吸を整える術は心得ていた。が、刀を振り下ろす音まで消すことはできない。

沙龍が目を覚ましたのは、ヒュッという音がしたからだ。

空気を鋭く切る音である。

ここで気付かなければアウトである。

咄嗟に、体を半回転させ、その攻撃を避けた。

ドスッと殿様布団になにかが突き刺さる音がしたが、かまわず、もう一回転ほどさせて、薄い障子戸を体ごとぶち破り、縁側まで転び出た。

「きえええええええええぇぇぇぇぇーーーーいっ!!」

奇声と共に、白刃が沙龍を襲う。
避けた刃先が、庭との間の鎧戸を切り裂く。勢いあまって、沙龍は裸足のまま、土の地面に降り立った。
（なっ、なんなの……!?）
何が起きたか分からず、とにかく半身を起こし、身構える。
「……フム」
縁側に立ってこちらを見下ろしているのは、白装束をまとった爺様だった。
白い胴着に、白い袴をはいている。
今までに会った誰とも似ていない。彫りの深い、学校の校庭に飾ってある彫像のような顔だ。
年齢は六十は超えているだろう。いや、七十に近いかもしれない。髪は健在で、ところどころ白くなっているが、綺麗に散髪されている。洋装も似合いそうだ。
その爺様が、無遠慮な目つきで、沙龍をじろじろ見ている。
右手に下げた抜き身の日本刀に着目した。

あれで斬られたら、まず間違いなく昇天する。この爺様の腕なら、人体も真っ二つにできるだろう。
「身のこなしは素早いな」
爺様が呟く。
「あ、あの～？」
鋭い一振りで襲ってきたくせに殺気がまるでないので、戸惑った。
「のこのこと現れおったか、神谷家の面汚しめ。せめて、ワシが成敗してやろう！　そこになおれ！」
「は、ハイ……？」
と言われて、大人しく斬られるつもりはない。
「寝込みを襲うなんて、随分、卑怯な真似をするじゃないか、じーさん」
だいぶ状況も分かり、頭も冴えてきたので、言ってみた。
「フ……、大陸育ちめ。日本人の心のばいぶる、『忠臣蔵』を知らんとみゆる。夜討ち朝駆けは、之、立派な兵法也！　ゆくぞ！」
ザシュ……！

と、今まで沙龍の居た場所にあった、植木の葉っぱがハラリと落ちる。
東京の柔術道場で、無刀取りの技をいくつか教えてもらったのが、こんな場面で役に立つとは思わなかった。
が、避けてばかりでは、この戦いは永遠に終わらない。
といって、こちらから攻撃するわけにもいかない。
「おのれ、逃げるでない！　切れ味は天下無双といわれた、この『備前長船秀光』をその身に受ける光栄を知れ！」
「あう～」
朝っぱらから、こんなイカれた爺様と遊んでいる自分がおかしかったが、いつまでもおかしがっているわけにもいかない。
「やめとけ、じーさん。怪我をするぞ」
「フ、知らぬとは哀れなもの。この人間国宝を相手に『怪我をする』だと？　笑止！　甲斐弥太郎の技を受け継いだか知らんが、そのような外道の技、我が刀術でもって完膚無きまでに打ち砕いてくれるっ！」
「あの～、なんか、ところどころ難しくて、なに言ってるか、よく分かりません

……」
庭木の枝や葉がパラパラと落ちる中、広い庭先で、トムとジェリーのような追いかけっこをしていたのだが、そこに、
「先生、いい加減にして下さいよ。朝ご飯が冷めてしまいます」
家政婦のスガさんが縁側に現れて、日常の延長のように言った。
白装束の爺様は、ピタリと動きを止め、
「おお、そうか。すまん。お前も、着替えて居間へ来い、孫よ」
この変わり身である。
「……」
しばし呆気に取られた顔で、藤四郎の後ろ姿を見送っていると、年輩のスガさんが取り成してくれた。
「すみません、お嬢さん。恐い思いをなされたでしょう？」
「いや～、なんていうか……」
アハハ、と苦しい笑いで誤魔化す。
「ああゆうお方なんです、ウチの先生。弟子入り希望の人とかにも、よくやって

まして。度胸試しっていうんですか？　別にボケてるわけじゃないので、安心して下さいな」

まぁ、そうだろうな。目がまともだったし。と、沙龍は思った。

しかし、なるほど、神谷百合子が父親の変人ぶりが嫌になって出て行った説は消さないで置いておこう、とも思ったのだ。

『じいさま、登場。なんか、すごいへんな人だった。しばらく様子を見る』

8　美観地区にあったもの

贅沢におかずがたくさん並べられた朝食は、一流旅館かと見まごう。
足の低いテーブルの上座に藤四郎が座っており、右側には見知らぬ青年がきちんと正座していた。まだ高校生くらいに見える。白い胴着に、黒い袴をはいていた。朝稽古に来ていた門弟のひとりらしい。彼も一緒に朝食をとるようだ。
沙龍は、テーブルの左側、青年の正面に座るように言われた。
藤四郎が、沙龍のことを孫だと紹介すると、
「ああ、百合子さんの？」
と、青年は子犬のような目をして言っていた。
直接知っているわけではないのだろうが、神谷百合子はこの一帯では有名人だったようである。それも、江田弁護士から聞いた話だ。
百合子は、当時の門弟や倉敷の若者たちにとっての『マドンナ』だったというのだ。確かに、写真で見る限り、清楚な美人である。こういった田舎で高嶺の花

になるのはよく分かる。
が、碧媛から聞いた話では、イメージが少し違うのだ。
箸より重いものを持ったことのないお嬢様だったにもかかわらず、原始的な生活を楽しんでいたらしいし、現地の言葉もすぐ覚え、機転もあった。
沙龍の持っているイメージでは、神谷百合子は結構なりふり構わない、タフな女なのだ。
「いただきます」
湯気の立っている味噌汁を、最初に味わってみる。
木佐が作る薄味の料理に慣れているので、やや濃いめに感じたが、美味しかった。
「ところで孫よ、お前、名前は何といったか？」
藤四郎が思い出したように聞く。
これは知っているくせに聞いているのだな、と思った。
「馨です」
「百合子がつけたにしては〝せんす〟のかけらもない名前じゃのー。もしかし

て、バカオヤジの方か？」
「さあ、名前の由来までは……。私は両親には会ってないので」
自分を産んですぐに亡くなった百合子のことを覚えていないのは仕方がないにしても、父親のほうは二歳まではそばに居たはずなのだ。なのに、なにも思い出せることがない。
といっても、人の記憶は三歳からというから、やはりこれも仕方ないのかもしれない。
「……フム」
そのまま、暫く沈黙が流れる。
朝食を終える頃になって、
「お前の技は、バカオヤジとはだいぶ違うようじゃな」
と、これまた思い出したように言った。
それはそうだ。甲斐弥太郎からは何も習ってはいない。沙龍が身につけているのは、武当派と呼ばれる中国拳法なのである。しかし、それも、上海や東京での生活を経て、我流になりつつあった。

藤四郎は、門弟の青年としばらく話をして、昼からは師範代に任せるからそう伝えておいてくれ、などと言っていた。

ふたりの話の内容から察するに、青年の年の離れた兄が師範代を務めているらしい。

この門弟の青年はやはり高校生で、相馬祐介と名乗った。愛想も元気もいい、好青年である。夏休みなので、ほぼ毎日道場に通ってきているらしい。彼にとっては、学校の部活みたいなものなのだろう。

こういう若者たちが出入りするから、この屋敷にはお手伝いさんたちが必要なのだ。

朝食を終えた藤四郎が、改めて言った。

「昼から江田が来る。話はそのときだ。それから、これを――」

と、床の間に置いてあった一振りの日本刀を沙龍に差し出す。

今朝、藤四郎が振り回していたものと拵えが似ている。というより、そのものだろう。

「……？」

どうしていいか分からないが、差し出された以上、受け取るしかない。
所作などは分からないが、両手で受け取った。ずっしりと重い。
「やる」
と、一言いわれた。
「……」
確か、こういった銘入りの真剣は一千万円くらいするのではなかったか。
いや、もっとかもしれない。
「備前長船秀光という。国宝ではないが、それに近い。最上大業物だ。心して持っておれ」
「えええっ!?」
反応したのは、相馬祐介である。
沙龍はこの刀の価値が分からないのだが、彼には分かるようだ。
「秀光の太刀って……、こ、個人蔵ですか？」
「ウム、昨日、貰ってきた」
なるほど、この刀を仕入れに、昨日、留守にしたのか。

いくらしたのだろう。聞くのが怖い。
「なに、村上のボンが持っていたものだ。二百年前に、あやつの家がお取り潰しになりそうだったのを、うちの先々代のさらに先代が池田の殿様に取り成してやったことがあったはずだから、これでチャラにしてくださいって言いおったぞ」
「……」
沙龍には藤四郎がなにを言っているのかよく分からないが、お金についての心配はしなくてもよさそうだ。
もとより、遺産がどうのと言っているくらいだから、金は有り余っているのだろう。
しかし……。
「どうして、これを私に？」
単純に、それが気になる。
藤四郎は、茶を飲み、一呼吸入れてから、
「守り刀、という言葉を知っとるか、外国育ちよ」

それだけ言って、あとは説明してくれなかった。
あとで誰かに聞こう。千春より、木佐のほうがいいかもしれない。

弁護士が来るまでは自由にしておれ、と藤四郎が言うので、朝食後は、スガさんに百合子の部屋を見せてもらった。出て行ったときのままにしてあるらしい。
なんともノスタルジックな話だ。
こじんまりとした六畳間で、年頃の女性の部屋というよりは、無趣味の中年男性の部屋のようだ。機能的で簡素な部屋である。家具といえば、箪笥と文机と本棚だけで、ポスターなども一切貼っていない。
沙龍は『マドンナ』としての百合子より、むしろ自分の抱いているイメージのほうが正しいのではないか、と思えた。
「百合子さんって、どんな人でした？　スガさんは当時からこの家に？」
本棚に並んでいる、本の背表紙をチェックしながら聞いた。
「ええ。百合子お嬢さんが、まだ赤ん坊の頃からね」

如才ない感じの女性だ。
でしゃばりすぎず、控えめすぎず。
「そうですねぇ。ちょっと捉えどころのない御方ではあったんですが、普通の育ちのよいお嬢さんですよ。争いごとが嫌いでねぇ。日本刀も怖いって言って、道場には滅多に近寄らなかったんですよ。あそこでは、刃の引いていない真剣を使ってますから」
普通の人はそうだろう、と思う。
自分だって、最初に柳葉刀を渡されたときは、放り出したのだ。
「捉えどころがないっていうのは？」
「中学か、高校の頃、巫女さんのお仕事をしてたんですよ。もちろん、アルバイトなんですけど。先方の神社さんにとても気に入られて。そのせいもあって、ちょっと神がかりな、不思議な雰囲気がありましてね。まぁ、贔屓目かもしれないんですけど」
「へー……」
新たな事実が出てきた。

巫女バイトの話は東京でもよく聞く。やるほうも、見るほうも、なぜか人気の仕事だ。
先日行った花園神社でも、高校生のような巫女さんがお守りを売っていた。あれも、アルバイトなのだろう。
あまり立て続けに聞くのも、事情聴取みたいで憚られるので、これで最後にしようと思った。
「スガさんは、甲斐弥太郎っていう人のこと、覚えてます？」
「ええと……、まぁ、覚えてはいますよ。でも、先生がね……あれでしょう？悪い人ではなかったと思うんですけど、私の口からは、ねぇ……」
この反応も、当然だろう。
この家では甲斐弥太郎については、おおっぴらには話せないようだ。
その後、昼までだいぶ時間もあることだし、ひとりで近所を散歩することにした。相馬祐介が案内しますよと言ったが、やんわりと断る。
お手伝いのミオちゃんに頼んで、水筒と市内の地図を用意してもらった。沙龍とそう年の変わらない、口数の少ない女性なのだが、感じのよい笑顔を向けてく

れる。
「迷ったら、そこらへんの人に『神谷家の者』と言えば、たいてい、送り届けてくれると思いますから」
そう言って送り出してくれた。
神谷の名前はたいした力を持つらしい。
『教えてくれる』ではなく、『送り届けてくれる』なのだ。城を抜け出したお姫様扱いではないか。
「じゃ、いってきます」
門のところで、やはり門弟らしき人とすれ違った。
軽く会釈をするだけにして、通り過ぎる。向こうは「誰だろう？」という顔をしていたが、特に呼び止められるようなことはない。
歩いて、美観地区というところに行ってみることにした。
そこが、倉敷市では一番のメジャースポットだと思ったからである。お隣の岡山市だと「一番」は岡山城かな、と地図を見ながらアタリをつけている。
新しい町に来たら「一番人が集まる場所」を探して行ってみるのは、沙龍の無

意識になっていた。意識的に探すこともあるが、少なくとも、いまは無意識である。

平日の朝早い住宅街は静かである。通りに出てみると、自家用車が数台走っていた。バスは見かけない。路線ではないのだろう。

沙龍は、人通りのない道を歩きながら、神谷百合子のことを考えていた。

いままで、実の母のことを積極的に知ろうとはしなかった。知りたいと思わなかったわけではない。しかし、小さいころは養母がほとんど実母のようなものだったし、なにやら特殊な事情のある両親のことは、どうせ調べてもなにも分からないだろうと諦めていたのだ。

改めて、十九歳のいま、理屈で考えようとすると、神谷百合子は「なにもかもが謎の人」となる。

駆け落ちまでした最愛の人に、自分の死後、すぐに不倫された、可哀想な人――、と思っていた時期もあったが、仮面夫婦と聞いてからはそれもまったく見当違いだと分かった。

甲斐弥太郎と熱烈な恋に落ちて、駆け落ちしたわけではないのだ。それは碧媛

からも再三聞いたし、事実、あのふたりが仮面夫婦だったからこそ、子供を作るために――作らせるために――香林らがいろいろと苦労したのである。

（中国にある、たったひとつの龍穴のそばで『黄龍の保持者』の後継者を作るという使命感だけがあった、ってこと……？）

結局、そこしかない。

甲斐弥太郎はその使命のために、二百年もの間、二十代の姿のまま彷徨い、伴侶を探していたのだろうか。

神谷百合子はただの協力者なのか、それとも、彼女自身にもなにか使命感のようなものがあったのか――。

神の啓示のような？

いや、巫女バイトをしていたからといって、いくらなんでもそれは短絡的だ。

（うーん……）

考えても分かるまい。

やはり、甲斐弥太郎に会ったことのある神谷藤四郎に聞くしかない。

『バカオヤジ』を連発し、名前を言うのも嫌なくらいに、甲斐弥太郎のことを

毛嫌いしているであろう、あの偏屈老人に……？
（む、難しいかもしれん……）
汗もだいぶでてきたので、水筒に入れてもらったスポーツ飲料水を飲む。周囲を保冷剤でくるんでくれているので、中身はまだ冷たかった。
それなりに暑いのだが、東京の蒸し暑さとは少し違っていた。あの不快感がない。
岡山はだいぶ南なので、さぞ暑かろうと思っていたのだが、ただ暑いだけである。新宿などは、汚れた空気に、クーラーの室外機がさらに不快な熱風を撒き散らすせいで、どろどろとした暑さになるのだが、岡山にはそれがない。
少し賑やかな通りに出た。そろそろ美観地区である。
（やっぱり、甲府の町とちょっと似てるなー）
倉敷はかつて天領だったのも、甲府と同じだ。
十七世紀の天領だった時代、物資の集まる場所に倉庫群が建てられた。それらの建物が中心となって、現在、美観地区として残っている。
倉庫だけでなく、個人の屋敷もいくつか重要文化財として保存されていた。

（わー、綺麗ー）
川沿いに並んだ白壁の建物が見えてきた。遠い異国に紛れ込んでしまったかのような錯覚を覚える。
まだ朝の八時という時間なのだが、観光客らしき老夫婦が倉敷川沿いの道路を散策していた。「見事だねぇ」などと言いながら、写真を撮ったりしている。
沙龍も、大原邸のあたりを携帯電話のカメラに撮って、木佐に送った。
『ビカン地区というところに来てる。風景が綺麗！』
写真は少しブレたかもしれない。携帯電話内臓のカメラなどあまり性能はよくないので仕方ない。
ここは、あの老夫婦のように本格的なカメラで撮るべきかもしれない。しかし、カメラがない以上、この美しい景色は脳内にしまっておこう、と思った。
写真というものは、現実の一部を写しはするが、すべてを写してはいない。
今の自分と同じ、十九歳の神谷百合子の写真も、これはこれで真実の姿だったのだろうが、作った笑顔の彼女は、どこか虚ろにも見える。
「……っ？」

沙龍は『倉敷館』の前で、顔をしかめつつ立ち止まった。
まさか、と思う。
有り得ない、と。
なぜここに？　とも――。
「……」
しばらく、呆然と佇んでいた。
かろうじて、年数を計算する冷静さはあったが、それでもやはり「有り得ない」と思った。
「あの……」
そこに、さっきすれ違った老夫婦が声をかけてきた。
「写真を撮っていただけますか？」
「あ、はい……」
渡されたカメラで、『倉敷館』をバックに並ぶふたりの写真を撮った。
念のために、三回ほどシャッターを切ったが、沙龍がその写真の出来を確認することは永遠にないだろう。

「ありがとうございます」
白い半そでブラウスの夫人がにっこりと笑顔で言う。
「不客气（ブークェーチ）」（どういたしまして）
思わず、中国語が出てしまった。
もちろん、『あれ』のせいだ。
あの、有り得ないメッセージ――。

9　遺産のゆくえ、ピーちゃんのゆくえ

東新宿探偵社は朝の九時に始業する。

所員たちには深夜仕事もあるので、フレックスでいいと言っているが、所長の木佐は毎朝九時に留守番電話の解除をすることを日課にしていた。

その後、パソコンを起動し、夕方までガリガリ仕事をするのが木佐の日常だ。

しかし、今朝はコーヒーを淹れて、新聞でも読むことにする。こんな風にのんびりできるのも久しぶりなのだ。

上半期の決算は終わったし、ジャーナリストからの報酬も、振込み確認した。新規の仕事は断っているので、いま残っているのはインコ探しだけである。

三ネコたちは日中はだらけきって昼寝している。とくに、三匹の中でも一番マイペースなクニツナは、いまも「へそてん」（※へそを天井に向けて大の字に寝る様）状態で廊下で寝ていた。板張りがヒンヤリとしているので気持ちいいのだろう。

携帯電話のほうに、沙龍からのメールが入っていることに気付いたのは十時過ぎである。
既に新聞もすみからすみまで全部読み終わって、営業用のチラシの新しいバージョンも作り終わったところだ。
メールは八時過ぎの着信になっている。その時間に既に観光地に居るとはずいぶん早起きだな、と木佐は思った。
添付されている写真には、有名な倉敷の美観地区にある大原邸が写っていた。
祖父には会えたのかどうか、遺産の話し合いはどうなったのか、肝心の部分には一切触れていないが、ということは、特に問題もなく済んだのだろう。
急ぎの仕事もないので、電話してみた。
『オハヨー』
いつもの沙龍である。
「美観地区に居るのか。綺麗だな。僕も一度行ってみたい」
『うん、そろそろ戻るけどねー。いまはひとりでお茶してる』
「お祖父さんの件は、大丈夫だったのか？」

『大丈夫だよ。今朝は殺されかけたけど』
「なんだって……？」
電話向こうで沙龍はコロコロ笑っている。
冗談か、と思った。
『あ、そうだ。キサさん。「守り刀」ってなに？』
「……守り刀？　昔、女性や子供が持っていた短刀のことだと思うけど？　邪気や災厄を払うためのお守りがわりに、親とか目上の人が持たせるんだよ」
『短刀？　お守り？　じゃあ、実用性はないってこと？』
「いや、そんなことはないよ。たいてい銘入りだし」
『ふーん……』
「それがどうしたんだ？」
『うん……、私、じいちゃんから、太刀をもらったんだよね。ビゼンオサフネなんとか、って言ってたけど……』
それまで椅子の背に体をあずけていた木佐が、ガバッと姿勢を正した。
「なんだって!?　本物か!?　長船の、誰だって!?」

長船派の名のある刀工の太刀ならば、三千万円はくだらない。
いったい、どんな道楽者だ、と木佐は思った。
そんな国宝級の太刀を、出会ったばかりの孫にポンと渡すのか？
『名前は忘れちゃったけど、本物じゃないかなー？　まぁ、それはどうでもいいんだけどさ』
「よくない！」
同じ値段でも、孫の誕生日にポンとディアブロ（注1）をプレゼントするのとはわけが違う。
現存する古刀（注2）に価値があるのは、もう、二度と同じクオリティーのものが作れないからだ。技術的に、ではなく、経済的に不可能なのである。
そのあたりについては、そのうち木佐小次郎が延々と蘊蓄を語ってくれるであろうが、沙龍側から見れば、刀などよく斬れて丈夫であればいい、という視点しかないのは言わずもがなであった。
『いや、まぁ、いまはね。話が進まないでしょ』
「その長船はいま手元にあるのか？　拵えはどうなってる？　銘は見たのか？」

『いや、手元にないし、そういうのは私が見ても分かんないから』
沙龍は、フゥ、とため息をついている。
木佐が日本刀マニアなのは知っていたが、ここまで熱狂するとは思わなかった。
恐るべし、ビゼンオサフネ。
『そんでね？　じーちゃんが、そのオサフネをくれたときに「守り刀って知ってるか？」って言ったんだ。どういう意味だと思う？』
木佐が落ち着いた頃合を見計らって言った。
「まぁ、素直に考えれば、その長船が馨を守ってくれるようにって意味で渡したんだと思うけど」
『んー、でも、普通は短刀なんでしょ？』
「そこにはあまり意味はないんじゃないか？　長かろうが、短かろうが、刀は刀だ」
『うーん……』
沙龍はなにか別の意図があるような気がしている。

藤四郎が、文字通り『守り刀』を渡したかったのなら、あんな大きな太刀でなくともよかったはずである。
本来の、短刀で十分なのだ。
『あ、そうそう。今日の午後にね、江田弁護士と一緒にじーちゃんの話を聞くことになってる。それが終わればホテルにでも場所を移して、例の写真の場所とかも探したいから、数日は居ることにするよ』
そう言って電話を切った。
「長船か……」
木佐は誰もいない事務所で、呟いていた。
独り言など滅多に言わないのだが、今日ばかりは興奮を隠しきれない。
仕事どころではなくなって、もう一度、コーヒーを淹れに台所に立った。
「長船か……！」
クニツナが片目を開け、木佐を胡乱に見つめていた。

神谷邸のランチはうな重だった。これは、市内のお店から取り寄せたようだ。
江田弁護士も既に来ていて、一緒に食べたのだが、毎日こんな豪勢な食事をしているのだろうか。ふたりの老人の血糖値やコレステロール値が気になるところである。
食後、おもむろに書類を取り出す江田弁護士は、さくさくと遺産関係の手続きを進めるつもりでいる。
そこに、沙龍が待ったをかけた。
「いや、でも、私、本当にじーちゃんの孫かどうか分からないわけだし……」
その懸念事項を口にする。
しかし、
「それは心配するな。ＤＮＡ鑑定するまでもない」
藤四郎がきっぱり言った。
「それ、どういう意味？　私、甲斐弥太郎に似てるってこと？」
ズバリ聞いてみたが、藤四郎は表情ひとつ変えず、
「いや、そうではない。ワシには分かる。それだけだ」

「って、どういう……」
わけが分からない。
なにをもってして、そう判断するのか。
肝心なことはなにも説明してくれないのだ。
「それから、私、遺産は要りません。江田弁護士がクライアントに会ってくれ、というので、じーちゃんに会いにきただけです」
「……」
「……」
老人ふたりはなんと反応してよいやら迷っている。
江田は、藤四郎に、なんとか言ってください、と視線を送るものの、藤四郎は彫像のような顔で押し黙っている。
仕方なく、口を開いた。
「えーと、でもね？　馨さん。お金は邪魔になるものじゃないし、神谷先生の血縁は貴女しか居ないわけだから、先生が亡くなると、土地家屋なんかは全部国に持っていかれちゃうんですよ。まぁ、おふたりがそれでいいというなら、わたし

の口出すことじゃないんですけど、ここが国有地になっちゃうとね、色々厄介なこともありますし……」
「厄介なことって？」
「えー、それは、まぁ、色々ですよ、色々」
素人相手だと思って、誤魔化しにかかってる。
江田弁護士の立場からすれば、こういう金に無頓着な輩が一番厄介である。
「いや、よくはない。ワシはよくないぞ、江田」
藤四郎がおごそかに言った。
「忠継公（※池田忠継。初代岡山藩主）の頃より幾百年、代々、神谷のご先祖様が残してくれたこの土地を、幕府にかっさらわれてなるものか。ええい、国有地などもってのほか！　そう思わぬか、我が孫よ！　だいたい、幕末の頃など、やつらが最後まで態度を決めかねてグズグズしておったせいで、日本が迷走したのではないか！　あの腰抜けどもが！　我が岡山藩に栄光あれーーーっ！」
タダツグ？　バクフ？
沙龍にはチンプンカンプンの話なのだが、藤四郎は自説を展開していくと、ど

んどんエキサイトするタイプらしい。
キーキー叫びながら、岡山藩ラブの演説が始まっている。郷土愛が激しいらしい。
「いや、ちょっと待ってよ、じーちゃん」
「なんだっ？」
「国に取られたくないんだったら、別の人に遺せばいいだけじゃ？　確か、遺言で、血縁者じゃなくても遺産は遺せるんでしょ？」
「ええ、まぁ、そうなんですけど……」
江田弁護士は早く帰りたそうである。
「たわけっ！　赤の他人にこの神谷家の土地家屋を渡してしまっては、ワシがご先祖様に顔向けできないではないか！　この、罰当たりがっ！」
こちらはエキサイトしたまま。
最終的には、こんなことは慣れっこなのか、江田弁護士が藤四郎をなだめすかし、
「まぁまぁ、すぐに答えの出る話でもないですから、幸い時間もありますし、も

う少しおふたりでじっくり話し合ってみて、ですね、実務的な話は、それがまとまってから、ということで……」

うやむやのまま解散になった。

要するに、弁護士は逃げたのである。

午後いちに、奥田夫人から、インコの『ピーちゃん』の件で、催促というか、様子見というか、経過報告をせよ、という電話連絡があった。

このご夫人は、絵に描いたような有閑マダムで、文字通り閑(ひま)なので、たいした用もないのに電話をかけてきては、相手が誰であろうと一時間くらいはくっちゃべる。

常連の上客なので無下にもできず、毎回、貧乏くじを引いた哀れなスタッフが延々と長話に付き合わされるのだ。

木佐も、電話口であの甲高い声を聞いた途端、長話の覚悟をしたが、いつから居たのか、マサムネとクニツナが二匹揃って、ハエかなにかを必死に追いかけて

いるのをなんとなく眺めながら、ふと閃いてしまった。
『ですからねぇ？　アタクシも色々と知り合いに聞いてまわっているんですけども、すぐ三軒先のおうちで保護されてた、なんて例もあって、うちのピーちゃんも、綺麗な黄色のインコでしょう？　ですからねぇ？』
「すみません、どうもその『ピーちゃん』の件で、有力情報が入ったので、探してきます！」
木佐はそう叫んで、強引に電話を切ってしまった。
あとでフォローはしておこう。
なにせ、本当に見つけられるかもしれないのだ。もし、ピーちゃんを発見できれば、これくらいの非礼は許されるはずである。
「マサムネ！　クニツナ！　キク！」
木佐が勢いのままに三ネコを呼ぶと、今まで狩りをしていた二匹はもとより、台所の床で寝ていたらしいキクもすっ飛んでやって来た。
三匹とも「なにごとですか？」という顔をしている。
しかし、目はキラキラしていた。だらけきって昼寝をしている家猫とは明らか

に違う。
この家に居候するようになって、この三匹が『仕事』をしたことはない。
主人である沙龍が、三ネコが妖（あやかし）であることをもう忘れているのか、彼らはキャットフードと一ヶ月に一回市販の茶碗蒸しを食べるだけの役立たずの家猫になっているのだが、本来は神の眷族なのである。
「小さな鳥を一羽、探し出してもらいたい。範囲はそんなに広くない。せいぜいこの区内だ。きみたちは、京都の街で、人間ひとり探し出せるのだから、できるだろう？」
「ナーン……？」
リーダー格の白猫、マサムネが小首をかしげて主人を見上げる。
厳密に言えば、木佐は彼らの主人ではないのだが、代理権くらいは持っているだろうと思えた。なにせ、猫缶を開けるのも、三回に一回くらいは木佐がやっている。
マサムネの言わんとすることが分かったので、沙龍が作った『インコ探してます』のビラと、ぼろぼろの小さなぬいぐるみを持ってきて、三匹の前に置いた。

ビラには『ピーちゃん』のカラー写真が印刷されている。
「標的はそのインコ。名前は『ピーちゃん』で雄の二歳。そのぬいぐるみは、彼のオモチャらしい」
嗅覚で探し出すのかどうかは不明だが、手持ちのカードは全部与えておかねばなるまい。
三ネコは、顔を見合わせ、同時に頷いたように見えた。
そして、パッと散っていった。
（よし、大丈夫そうだな）
木佐は自分も簡易鳥かごと虫取り網を持って、外に出て行った。
使い魔としての彼らは優秀である。
前に、沙龍は何度か居場所を突き止められたことがある。その一連の事件があったとき、味方に引きずり込んだのだ。
（夕方までに終える！）
最終の飛行機は七時台だったから、十分間に合うだろう。
「長船か……！」

木佐の心は躍っていた。

（注１）ランボルギーニ・ディアブロ……お値段はだいたい二千万～三千万円くらい。

（注２）古刀……室町時代後半までにつくられたもの。新刀はそれ以降から江戸中期まで。新々刀は、それ以降から一八七六年（明治九年）の廃刀令まで。現代刀は、それ以降から現代までに作られたものを指す。

10　リュウオウザンノボレ

「じーちゃん、実は新倉敷まで友達が来てるんだけど、ここに呼んでいい？」
その話を切り出したのは、江田弁護士が帰ってからしばらくしてのことだった。
藤四郎は、キーキー喚いたことなどけろりと忘れたような顔で「いいぞ」と言った。
屋敷の裏方スタッフはそろそろ夕飯の用意にかかろうという時刻である。
藤四郎も、お茶を飲みながら、夕方のニュース番組を見ているところだった。
「そういえば、当初、客はふたり、と言っていたな？　そのひとりか？」
「うん、新幹線で一緒に来たんだけど、なんか、初日は遠慮したみたい。自分は親族でもなんでもないからって」
「フム……、謙虚じゃのう」
そういうことで、スガさんに相談するとすぐにハイヤーの手配をしてくれて、

大原美術館あたりでブラブラしていた千春を神谷邸に連れてきてくれた。
千春は、学生のようなラフな格好で現れた。
立派な門と、お屋敷を見て驚いていたが、顔には出していない。
「はじめまして。鈴木千春といいます。お世話になります！」
藤四郎の前で千春が化けた。
滅茶苦茶愛想がいい。
これは営業用である。
普段のやや猫背で暗い瞳をした千春ではなく、しゃっきりと背筋が伸びていて、体全体から明るいオーラが輝いていた。
なんだ、こいつ、魔法使いか、と沙龍でさえ思う。
「門弟がうようよしている家なのでな。ひとり、ふたり増えたところで変わらん。ゆっくりしていけ」
藤四郎も、鷹揚である。
一昔前の学校の校長先生みたいだな、と沙龍は思った。
というよりは、理事長か。

「よかった、春ちゃん来てくれて。孤軍奮闘してたからさ」
沙龍は、千春に宛てがわれた部屋までついていって、居座っていた。
このお屋敷にはこういった客間があと何部屋あるのだろう。十人くらいは余裕で泊まれそうだ。
「本当に？」
笑って言っている。
あまり信じていない口ぶりだ。
「本当だって。ヘンなじーさんなんだもん」
「まぁ、確かに、前時代的な感じはしましたねー……」
千春は荷物の中から、なぜか一枚の大きな地図を取り出して、それを座卓に広げていた。沙龍が今朝、ミオちゃんにもらった地図より大きい。
岡山県の全図だった。既にところどころ青いペンでなにかが書き込まれている。
「なにが始まるの？」
沙龍も覗き込む。

「実は、馨さんから預かっていたこの写真」
と、どこからともなく、千春の左手に写真が現れる。
毎度、どこに持っていたのだ、と突っ込みたくなる。
しかし、あれ？　と沙龍は二重に目を見張った。
「該当場所はどこだろうって探してたんですよ」
「え、そうだったの？」
新幹線の中で見せた写真だ。江田からもらった写真のなかでも、一番強く既視感を覚えた一枚である。もともとは神谷藤四郎のアルバムにあった写真だという。同じものを焼き増ししたらしい。
山を背景に、小学生くらいの神谷百合子が写っているが、人よりも風景を撮ったものだと思われる。
その写真を撮った場所は「確か蒜山（ひるぜん）のあたり」と藤四郎は言っていたらしいが、江田は「これ、わたしも一緒に行ったキャンプのときの写真じゃないですかね。だとしたら、蒜山じゃなかったように思いますが」などと言っていた。要するに不明なのだ。

千春は、この写真を見て、なにか思うところがあったらしい。
しげしげと眺めたあと、
「馨さんに影響されてるだけかもしれないんですけど、自分も、この風景、なんか見覚えがある気がするんですよね……」
そう言っていた。
そして、「ちょっと持っていていいですか？」と言うので、そのまま預けていたのだ。
「というか、春ちゃん、左手でもマジックできるんだ？」
沙龍がそこに気付いた。
「ええ、最近ちょっと左でも違和感なくできるように、練習してます」
「いま、ぜんぜん違和感なかったよ？」
「もともと、ある程度は訓練してましたからね。でも、まだまだ右には及びませんよ」
「へー……。それで、該当場所ってのは」
「ええ。昨日の夜も繁華街に行って、色んな人に聞いてみたんですが」

「うぉ、仕事、早いね！」
思わず、唸った。
さすが、わが東新宿探偵社のエースである。
昨夜、沙龍が大きな広間でぽつんとひとり、お刺身を食べていたとき、千春は地元のバーテンダーにでも慣れた会話を仕掛けていたのだろう。
「それで、いくらか目ぼしい情報があったんですけど……」
そこで、ごそごそとカバンの中から一冊の大学ノートを取り出し、地図の上に置いた。
千春が愛用している手帳がわりのノートで、仕事のメモから思いついたマジックまで、とりとめもなくいろんなことが書き込まれている。
表紙には黒いマジックペンで「ネタ帳　鈴木千春」と書いてあった。こういうところは、小学生のまま、年を取っていないのではないかと思う。
それとも「自分の持ち物にはちゃんと名前を書いておきなさい」という孤児院で教わったことを、大人になってもきちんと実践しているだけなのかもしれない。

「……」
沙龍は、なんとはなしに、その手書きの文字を見ていた。
女の子が書くような丸っこい字だ。
「春……」
そして、無機質に呟く。
千春の『春』の字が、脳内の隅々まで放射線状に広がり、色んな引き出しにつながっていった。
「あ、はい？　なんです？」
「春――」
もう一度、言う。
今度は、はっきりと読み上げるように、その文字の部分を指差して。
「……？」
千春は自分のことを呼ばれたと思ったのだが、どうも違うらしい。
「上海に『小春（シャオチュン）』っていう人が居てさ。いろいろ私の面倒を見てくれた人なんだけど。日本語だと『小さな春』って書くのね」

唐突に話し出す。
「これは偶然かな。私を助けてくれる人は、大体、『東』に関係している」
「……ハイ？」
千春はわけが分からない。
「ああ、ごめん。分かんないよね。中国の陰陽五行説ではね、東と春と木と…
…、あと青とか。全部同義語なの」
「なんか、面白そうな話ですね？　ちょっと聞いたことあります。それ、風水とかも関係しますよね？」
「うん。風水は五行説が土台になってるからね」
日本では思い出したころに何度かブームになり、いつしか消えていくのが風水である。
その風水も、歴史は相当古い。古代まで遡るのだ。
「それで、人生の肝心なところで助けてくれる人は、だいたい、東に関係してるなーって。キサさんが本当は『黒田』なのに『木佐』を名乗ったのも、マッキーも本当は『土御門』なのに『松木』家に養子に行ったのも、もしかしたらまった

く無関係じゃないのかなって……」
「ああ、そういえばおふたりとも『木』が入ってますね」
いちばん簡単なのは四神青龍の話をすればいいのだが、董天のことを話すことはできない。
千春には自分の特殊能力のことはなにも言っていないからだ。
「そう、そんで、極めつけは、春ちゃん」
と、千春を指差す。「鈴木」の「木」と、「千春」の「春」――。
「え？　自分は、関係ないですよ。たぶん。ただの、偶然じゃ……？」
「いや、重なる偶然は、偶然じゃないよ。だってさ……」
なにかを説明しようとしたところで、沙龍の携帯電話が鳴った。
見ると、画面は『鬼所長（携帯）』となっている。
「はい、もしもし？　どしたの？」
『今、羽田空港だ。一時間二十分後に岡山空港に着く。迎えにきてくれ』
相変わらず、無駄な言葉をこれでもかとそぎ落とした話しぶりだ。
「は、はぁ!?」

沙龍は、千春と顔を見合わせていた。

「あ、あのさ、じーちゃん、もうひとり、友達が来るっていうんだけど、ここに連れてきていい？」

沙龍がそう聞くと、藤四郎はさっきと同じ調子で言った。

「何人増えても構わんぞ。……お前、愛されとるのう」

「いや～、たぶん、そういう理由じゃないと思うけど……」

分かっている。

オサフネの名前を出してから木佐が豹変したのだ。

決して沙龍のことを心配して、岡山に来るわけではあるまい。

たよりのスガさんにもうひとりの来訪を告げると、さっそくまたハイヤーを呼んでくれて、千春がそれに乗って、空港まで迎えに行くことになった。

沙龍は神谷邸に残った。一応、メインゲストなので、千春が残るよりはいいだろう、という判断である。

木佐は、千春と同じように時代劇に出てきそうな門構えにまず驚いたが、納得もしたのだ。長船をポン、の家、である。
玄関先に出迎えにきた沙龍がなにか言う前に、
「仕事は終わらせてきた」
と、開口一番に言っていた。
四時には奥田邸に『ピーちゃん』を届けに行って、五時過ぎには既に羽田空港に居たらしい。そして、最終のひとつ前の便に乗ったのだ。
そうして、神谷邸の八時の夕餉はちゃっかり一緒にいただいている。
まったく、恐るべき執念である。
木佐は無愛想ではあるものの、初対面の人には卒なく対応できるほうだった。
まして、今回は『孫にポンと国宝級の太刀をあげちゃう人』を見に来たのだ。
無愛想どころか、千春の二重人格ぶりが霞むくらいの愛想のよさで、藤四郎に挨拶していた。

夕食後、三人で千春の部屋に集まっている。
地図を広げたままだし、話も途中になっていたからだ。
「えーと、キサさんには、ピーちゃんをどうやって見つけたの、とか、春ちゃんには、例の写真の場所はどこだったの、とか、いろいろ聞きたいことはあるんだけど、まず、私の話からしていい？」
「どうぞ」
夕飯時に藤四郎にすすめられた『御前酒』という日本酒が美味しくて、部屋に持ち込んで三人で飲んでいる。
おつまみも、今夜来ていた板前さんに作ってもらった。
「どうぞ」
木佐はカラスミを堪能していて、あまり沙龍の話を聞いていない。
こんな高級なものは、木佐邸の食卓には滅多にのらないのだ。
「その前に……。私たちは、春ちゃんには話していないことがあって、それについて、ちょっと触れることになるかもしれないけど、意味がよく分からないことがあっても、まぁ、とりあえず、いまは話を聞いてもらって、ですね、あとでな

にか聞きたいことがあれば、答えられる範囲で答えるよってことで、ＯＫ？」
沙龍は千春ひとりに言ったつもりだが、木佐が顔を上げた。
鈴木に話すつもりなのか、目はそう言っている。
うん、話しても大丈夫、と沙龍は同じく目で答える。
木佐も、頷いていた。
「えーと、よく分からないですけど、いいですよ。実は自分も、おふたりにはまだ話してないことがありますが、それも追々話しますね」
「うん、分かった」
と、了解を得て、いざ、沙龍が話しはじめたのは、自分が育った村の連絡方法について、だった。
それは、木佐も初めて聞く話だ。
「ちょっとね、特殊な村なんだよ。歴史を遡れば漢王朝のころまでいっちゃうらしいんだけど。その村に、文明がまだ発達してない頃からの、特殊な連絡方法が残ってるのね。
私たちはいまだにそれを使うことがあって、まぁ、今はインターネットがある

から、メールのほうが早いんだけど、メールアドレスを知らなかったり、電気がなかったりしたときは、確実に連絡が取れるこの方法のほうが都合よかったりするわけよ。

で、その方法はっていうと、簡単に言っちゃえば、そこに住んでる人にメッセージを預かってもらう、っていう原始的な方法なんだけど、実は……、『人』じゃないんだよね」

そこで、沙龍は、いったん言葉を切って、薩摩切子のグラスを持ち上げた。綺麗な青色が入った、ガラス細工である。神谷家では、冷酒をこれで飲むらしい。

「人じゃない？　動物なのか？」

同じく、レンガ色の薩摩切子で『御前酒』を飲む木佐が聞いた。

「いや……。信じてくれるかどうかは分からないけど、『地霊（ちれい）』なんだ」

「ちれい……？」

夕飯のときから飲んでいるので、木佐は既に酔眼である。

千春も、少し赤い顔をしていた。

「土地神って言い方もするかな。いわゆる土着の神のこと。

人がたくさん集まる場所には、その人の数だけ『氣』が集まるから、地霊が常に起きている状態になるんだよね。

『氣』ってのは、簡単に言うと生体エネルギーって言えばいいのかな。私も大姐（ターチェ）の受け売りの知識しかないんだけど。

地霊はその人間のエネルギーが大好きなんだって。

いや、ファンタジーの話じゃないよ。

それで、この地霊っていうのが、その土地々々によって性質は様々なんだけど、龍脈の影響下にあるところでは、大地の神様連合のトップである黄龍のお願いを聞いてくれるのね。もちろん、力関係で、ってことなんだけど。

で、李家ってのは、唯一、黄龍の身内として認められてるから、よその土地の地霊も、協力してくれるの。その一族のメッセージなら預かってくれるんだ。

といっても、地霊も気まぐれだし、忘れっぽいからさ。ずっと預かっててくれるわけじゃなくて、期限つきなのね。だいたい二、三年くらいで忘れちゃう」

「……」

「……」

木佐も千春も、感心したような顔で、大人しく聞いている。そういえば、と木佐が思い出したのは、以前、京都旅行をしたときのことだ。沙龍の弟、偃月がそんなことを言っていた気がする。その街で一番人の集まる場所――。そこが、メッセージの発信と受信の場所になるのだろう。

「そこで、なんだけど！」

トン、と薩摩切子を座卓において、沙龍がここからが本番だ、というパフォーマンスをした。

「いまはもう、一族は私と、弟と、義姉しか居ないから、この三人以外、この連絡方法を使う人は居ないんだ。なのに、今日、美観地区で、いきなりメッセージを受け取ったの。しかも、明確に、私宛てだった」

「つまり、差出人は、偃月君でも、碧媛さんでもない、と？」

「そう。さらに、妙なことに発信から二十年くらい経ってた。こんなの、普通は有り得ないんだよ。どんなに長くてもせいぜい三年なんだから」

「……で、誰からのどういうメッセージだったんだ？」

「発信人、甲斐弥太郎。内容は『リュウオウザンノボレ』――」

「……」
木佐は、酔った頭で、その内容が意味するところを考えようとしたが、脳があまり働いてくれない。
「えーと、甲斐弥太郎って、馨さんのお父さん、ですよね？」
「うん」
「『りゅうおうざん』かー。これも、偶然なのかな……」
千春が、妙なことを言っている。
「え？　なんの話？」
「その説明もあるので、じゃ、次は自分が話しますね」
そう言って、広げたままの地図を見た。

11　我らは青年探偵団

千春が広げている地図を見たときから、木佐も沙龍も嫌な予感はしていたのだ。

青いペンで三角印と数字がたくさん書き込まれている。

「自分が昨夜キャバレーで聞き込みしたとき、この写真を見たホステスさんが『これ、龍王山じゃない？』って言うんですよね。どこにある山？　って聞いたら、確か、岡山市内だったと思うって言うので、ｉモードで調べてみたんです。そしたら『りゅうおうざん』がいくつもヒットしちゃって」

「ん？　どういうこと？」

「同名の山がたくさんあるんですよ。岡山市内だけでも三つ、岡山県内では……、えーと、ぜんぶで二十四です」

「に、にじゅうよん？　なんでそんないっぱい？」

「ちょっと異常でしょう？　しかも、岡山だけじゃなくて、瀬戸内の別の県にも

『りゅうおうざん』がたくさんあるんです。広島、香川、山口などに、合計二十八あります。日本全国だと、ほかにも長野や大阪にぽつんと『りゅうおうざん』はあるんですけど、瀬戸内にこれだけ集中しているのはちょっと異常ですね」

「瀬戸内という場所になにか意味があるのか？　龍王って、八大竜王のことだろう？」

「さすが所長。もう答えも出ちゃいましたね」

「……？」

沙龍は首をひねった。

自分が知っているのは四海龍王であって、八人も居ない。

どうやら、日本の竜王は、中国の龍王とだいぶ違う存在らしい、というのは以前も気付いたことだ。

「えーと……、これは今朝になってから本屋も使って調べたことなんですけど、瀬戸内の『りゅうおうざん』は、所長の仰る通り『八大竜王』のことで、仏法の守護者なんですね。水神なので、雨乞いの神様でもあるそうです。ですから、竜王を山頂に祀り、昔はそこで雨乞いの儀式をしていたそうです」

市販の地図にも載っていない『りゅうおうざん』もたくさん見つかったらしい。
それを三角印で書き込んだようだ。数字は標高である。すべて三桁で、千メートルを超える山はない。低いものは百メートル台で、高くても六百メートルどまりである。
「『りゅう』の字はふつうの竜だったり、芥川の龍だったり、読み方も『りゅうおうざん』だったり、『りゅうおうやま』だったりするんですけど、まぁ、全部同じ役割の山とみなしていいでしょう」
「ふーん……。雨乞いかー。でも、なんで瀬戸内だけなんだろうね？　日本全国にあってもよさそうじゃん？」
「自分もそれが気になって、気候のことも少し調べたんですが、瀬戸内海は、中国山地と四国山地に挟まれているので、夏の間は雨がほとんど降らないんだそうです」
「あ、そうなのか！」
「岡山はいわれているように『晴れの国』なんですよ。全国的に見ても降水日数

が少ないんです」
それにしても、千春は短時間でよくこれだけ調べたものである。
さすがは東新宿探偵社のエース、と木佐も沙龍と同じことを思った。
「そのホステスさんが言っている『龍王山』が結局どれのことかは分からなかったんですが、もし本当にこの写真の場所が龍王山だとしたら……」
千春が上目遣いにゆっくり二人を見る。
「だとしたら……？」
ごくり、と沙龍が喉をならして繰り返す。
「その場所を特定するためには……」
木佐もその先を告げたくはないようだ。
「ええ、特定するためには……」
二十四の山を、すべて実地検証しなければならない、ということである。
「……」
「……」
「……」

思わず、みな、黙った。
空になった薩摩切子に『御前酒』を注いだり、おつまみのカラスミや、味噌大根をつまんだりしている。
「リュウオウザンノボレ」
沙龍が例のメッセージをアンニュイに繰り返す。
「どういう意味なんだろう、これ。まさか、この写真の場所を特定したければ、龍王山に登れってことじゃないよね……？」
そんなはずはない。
写真を見たことと、メッセージを受信したというふたつの出来事に、関連性はないのだ。ただ、タイミングが重なっただけである。
「二十四の山すべてに？」
木佐が眠そうな顔で言う。
「それは嫌だ……」
「まぁ、低いんですけどね、どの山も……。百メートル台になると、急な丘くらいでしょう」

千春はまだいけそうだ。
結構、杯はすすんでいるのだが、アルコールには強いらしい。
「でもさー、『龍王山じゃない？』って言ったのはそのホステスさんだけなんでしょ？　ひとりの証言を信用するのもなー……」
「いやー、それが……」
千春が言いにくそうに説明する。
ほかにも数人――少なくとも五人以上――が、写真を見て、「小さいころに行った竜王山に似てるなー」とか、「あ、これ、龍王山だと思う」などと言ったという。
もちろん、彼らが言っているのはすべて別々の山だ。小学校の遠足で登ったという真庭市の龍王山だったり、家族でハイキングに行ったという備前市のものだったり。
要するに、山の景色など、どれもあまり変わらないということだろうか。
「……」
沙龍は、最後に残っていたカラスミを失敬した。

そして、問題の写真を見る。
ここに写っているもので、山と神谷百合子以外のものといえば、端っこに見切れている自動販売機と、小さな石造りの鳥居だろうか。
山道の途中の、休憩所のような場所に見える。
「ニイタカヤマノボレ」
今度は、木佐が平坦な声でなにやら呟いた。
「……な、なに？　それ」
「日本軍の暗号だよ。真珠湾攻撃の日にちを指定するのに使われた」
また、マニアックな話題を出してきたものである。
ニイタカヤマとは台湾の新高山のことである。日本統治時代の名称だ。
今は玉山（ぎょくざん）（ユイシャン）という。
標高三九五二メートル。富士山より高い。
「う、うん。それで……？」
「そういう暗号なのかもって思ったんだが、どうなんだ？」
「私に聞かれてもなー……。確かに、甲斐弥太郎は斎藤新助として戦争に行った

のかもしれないけど……。学徒出陣で借り出された人が、そこまで軍人っぽいことするかなぁ……？」

情報が足りなすぎる。

どういう人物か知っていれば、謎のメッセージの意味も分かるだろうが、沙龍には甲斐弥太郎像というものがなにも見えてこないのだ。

さらに不可解なことに、彼はこのメッセージを、その時点ではまだこの世に居ない人間に宛てて発信しているのだ。まるで博打ではないか、と思う。

「暗号ではないと思うんだよね。だって、連絡方法自体が暗号の役割を果たしているんだから、内容は文字通り解釈していいんじゃないかなー」

「……」

反応がないので見てみると、木佐は壁を背にしたまま眠ってしまったようだ。

それを見て、千春が布団を敷きはじめる。

木佐の部屋も用意してもらったのだが、移動させるのも面倒なので、ここに寝てもらうつもりのようだ。

こういうとき、たいてい、一番最初に沈没するのは木佐である。

「私もこっちで寝ようかな」
沙龍が畳に寝転んで言った。
「広いから構いませんけど……」
千春は、押入れを開けて布団を確認していた。
「いいんですか？　男所帯に」
「いや、むしろ、危険なのは春ちゃんのほ……、いや、それはいいとして。なんか、こういう古いお屋敷で一人で寝るのは、ちょっと、ほら……、色々、棲みついてそうだし」
「馨さんは、そういうの気にしない人かと思ってましたけど？」
「まぁ、気にしなければ大丈夫だけどさ……、せっかく、みんな居るんだし……、一人で寝るの寂しいもん」
「……」
思わず、微笑んでしまう。
それは千春が初めて見た、沙龍の歳相応の言動だったからだ。
「春ちゃん、真ん中ね、念のため。キサさんは庭側。私が入り口側に寝るから」

と、なぜか並び順を指定する。
特に疑問も持たずにその通りにしたのだが、翌朝になって、沙龍がそう言った理由がよく分かった。

「きえええええええええぇぇぇぇーーーーいっ!!」
沙龍にとってはこの奇声も二日目なのでどうってことはないが、木佐は飛び起きて身構えた。その反応は早い。
酒が入った翌日の朝なのだから、普段より動きは鈍いはずなのだが、この非常事態にそれは言ってられない。
ただ、木佐が臨戦態勢を取れたのは、入り口付近に寝ていた沙龍が、侵入者に足を引っ掛けて転ばしたせいで、その数秒がなければ、床の間に置いてあった沙龍の『備前長船秀光』を引っつかんで抜く暇はなかったはずだ。
「か、神谷先生？」
やっと、謎の敵の正体に気付いた木佐が、叫ぶ。

千春も目を覚ましたが、動けずにいる。沙龍が、起きなくていいよ、と腹の上に足をのせているからだ。祖父をすっ転ばした足で、である。

今朝の神谷藤四郎は、昨日と同じく白装束を身にまとっていたが、持っていたのは木刀だった。

力量も分からぬ客相手に、真剣で度胸試しをするわけにはいかないという、ひとかけの理性がかろうじて残っていたのかもしれない。

「ほう、こちらも素早いのう……」

しかも、木佐の構えは明らかに素人ではない。

流派は違うが、藤四郎には木佐が剣術を修めているのが分かっただろう。恐らくはその腕前も。

「じーちゃん、打ち合いしたければ道場でやってよ……」

眠そうな沙龍が、半分寝ながら言っている。

まだ朝日が昇ったばかりの時間なのだ。年寄りにはよくても、若者にはつらい。二度寝くらいさせてほしいものである。

「……自分も、まだ寝ます……」

千春もむにゃむにゃ言っている。
「……」
木佐だけ、目が冴えてしまった。
ゆうべは結構早い時間に沈没したし、基本的に早寝早起きの毎日なのだ。
藤四郎が、フム、と部屋を見渡し、
「二、三名が朝稽古に来とるが、小次郎君も来るかね？」
「はい、ぜひ！」
身支度整えて、一緒に道場に行くことにした。

沙龍と千春が起き出したのは七時過ぎだが、それでも早い時間であることに変わりはない。
朝稽古に来ていた門下生たちは既に帰ったという。さっきまで、相馬祐介も居たようだ。
お茶を飲みながら日本刀談義をしているふたりは放っておいて、豪華な朝ごは

んを食べることにした。
「わ、おかず、たくさん……」
千春もそんなことを言っている。
「そういえば、春ちゃん、いつも朝はなに食べてんの？」
沙龍は、木佐が作ってくれる味噌汁とアジの干物などが朝の定番だ。
が、仕事で朝帰りもあるし、昼から起き出してそのまま現場に行くこともあるので、食べたり、食べなかったり、かなりランダムである。
「抜くこと多いですよ。たまに、出勤途中にサンドイッチ買ったりしますけど」
「それも健康に悪そう……。まぁ、我々所員は、現場仕事が基本だからなー」
「そうですねぇ、牛乳とあんパンっていう、張り込み中の刑事みたいな」
「まぁ、よく考えてみれば、探偵だし、私たち。ドラマの中では刑事も探偵もそんなに変わんないよね。実態はだいぶ違うけど」
「そうですねぇ」
などとのんびり話しているが、沙龍は、そうだ、自分たちは『探偵』ではないか、と思った。

ホームズや金田一や明智小五郎と同じ職業なのだ。
いままで、ブラックな中小企業のかわいそうな社員かなんかだと思っていたが、自分は探偵なのである！
「そうだよ。我々は探偵社と冠するところの社員ではないですか！　春ちゃん！『探偵』と名乗ってもいいわけですよ！」
「……どうした、いきなり」
木佐が座卓の端っこから声をかけた。日本刀談義は終わったようだ。
「そして、探偵の、あれ、えーと、なんだっけ、そう、アイデンティティーといえば、一見、不可能そうな事件を見事に解決することじゃないですか！」
「う、うん……？」
ガバッと立ち上がった沙龍を、千春は見てはいけないものを見るような目つきで見上げている。
「ということで、二十四は三で割れば大したことないっ！　ひとり、八山！　低い山なら、一日ふたつみっつ、登れそうだし！　我ら探偵団が力を合わせれば三日くらいで終わる！」

「……」

やっぱり登るの？　という千春の残念そうな顔。

木佐は諦めたような表情をしている。なんの話じゃ？　という藤四郎の不可解な顔には「まぁ、仕事の話で……」と言葉を濁すだけにした。

12　山登りで日は暮れる

例の写真はもう二枚焼き増ししてもらって、三人ともが一枚づつ持ち歩けるようにした。

問題となるのは、移動方法である。「りゅうおうざん」は、ほぼ岡山県全域に散らばっているので、電車では時間もかかるし、効率が悪い。

スガさんは涼しい顔で「ハイヤー呼びましょうか？」などと言っているが、自動車では入れないような山奥に入っていかねばならないし、そんな無駄金は使えない。

沙龍は、レンタルのバイクはどうだろう、と言い出した。

「え、馨さん、二輪免許持ってんですか？」

千春が意外そうに言う。

「なに言ってんの、春ちゃん。去年の夏に『なにかあったときのために、免許は二輪も四輪も取っておくように』ってどこかの鬼所長に、無理矢理、免許合宿行

かされたじゃん」
「おい……」
「あー、その頃、たぶん、自分はまだ所員になってませんよ」
「そうだったっけ？」
「フム、鈴木は二輪乗れないのか……。まぁ、どっちにしても、その腕じゃ無理だろうが」
「すいません、今度、免許は取っておきます」
ならば、と、エリア分けを工夫して、千春の担当分は比較的近場で済むようにした。
山登りといったって、なにもピッケルとザイルで登るわけではない。平均標高二百メートルほどの低い山々だ。腕を吊った千春にでも登れるはずである。
「倉敷市と岡山市なら電車とバスで十分のようですね」
あーだこーだ顔を突き合わせて打ち合わせをしているところへ、藤四郎がやって来た。
「遺産の話を……」

とのことだが、
「じーちゃん、その話、あとでいい？　やることがあるから！」
すげなく追い返される。
年寄りを邪険にしおって、とぶつぶつ言うも、座卓の上に無造作に置かれている写真に目が止まって、拾い上げた。
「江田に渡した写真か」
「だいたい、じーちゃんがこの写真の場所を覚えていれば、こんなしちめんどーな仕事しなくてもよかったんだよ？」
理不尽な責任転嫁のようにも聞こえる。
言ってしまって、沙龍もちょっと反省した。初対面同然の人間（いくら偏屈な奇人変人とはいえ）に言う言葉ではない。
「とはいってもーー、だいぶ昔の話だし、この頃は、百合子のことは連れ合いにまかせっきりだったからのう」
藤四郎は気にしていないようだ。
写真をまじまじと眺めている。

「連れ合いって、おばあちゃんのこと？　この写真のころはまだ生きてたんだ？」
確か、だいぶ前に亡くなったと聞いた。三十代の若さで病死したらしい。
神谷家は父子家庭だったのである。
「うむ。確か、小学校のいつだったかの夏休みに、百合子を遊びに連れていったときの写真じゃろう。蒜山に牧場があってのう。何度か行っておったから、たぶん、そこじゃろうと思ったのだが……」
「じーちゃんは行かなかったの？」
「うーむ、よく覚えてないのだ」
「もー、はっきりしないなー。で、その山の風景に見覚えはないの？　本当にないの？」
「ないな」
あっさり言う。
やはり、山登りはしなければならないらしい。
「ああ、楽しい夏休みは、山登りで終わるのか……」

「しかし、なぜ、その写真の場所を探さなければならないんじゃ？」
いきなり、核心をつく質問だ。
沙龍は、その問いに対する明確な答えを持っているのだが、木佐の手前、
「えー、だって、この既視感が気になるから」で押し通している。
「……それは、まぁ、追々話すよ」
昨夜の千春みたいな物言いになってしまった。
そういえば、千春の『おふたりにはまだ話してないこと』とは、いったいなんなのだろう。結局、昨夜は話してくれなかった。
昼過ぎから、それぞれの担当エリアに散っていった。
千春は主に倉敷市を中心とした近隣で、沙龍が浅口市、井原市などの西側一帯、木佐が備前市を中心とした東側一帯である。
（リュウオウザンノボレ）
奇しくも、甲斐弥太郎に言われたことをそのままやろうとしている。
果たしてそこになにがあるのか、なにもないのか、行ってみなければ分からない。

が、沙龍は知らず知らずにそこに一縷の望みをかけていた。

秋田出張の際、実は帰りがけに仙台に寄ってきた。

これぱかりは木佐にはまだバレていないはずである。

なにせ、仙台では木佐の父親である黒田倫太郎に会っていたからだ。二人の関係を考えると、慎重にならざるを得ない。江田弁護士のときのような、名刺をどこにしまったか忘れる、などという間抜けはしていないはずである。

木佐は、父親のことを一方的に嫌っている。というより、軽蔑している、といってもいい。

妻子を省みずに、若い愛人を方々に作り、挙句、勝手に家を出て行った男、と認識しているからだ。それは、間違ってはいない。

しかし、沙龍は実際、数年前に倫太郎に会ったとき、それほどのマイナス感情は抱かなかった。もちろん、自分が倫太郎の娘だったら嫌だろうし、木佐の気持ちは十分に分かるのだが、細かいことは気にしないタイプの倫太郎は、赤の他人

として接する場合は特に毛嫌いするような人物でもないのだ。
去年、木佐の祖父、黒田作之助が亡くなったとき、木佐も沙龍も京都まで行って、お焼香してきた。
黒田倫太郎も現れたのだが、木佐は挨拶もしなかった。沙龍だけが倫太郎と少し立ち話をした。
そのとき、
「まだしばらく仙台に居るから、近くまで来たら遊びにきてくれ」
と言っていたので、馬鹿正直にその言葉通り「近く」（秋田の奥地にある秘境の温泉と仙台が近いかどうかは人による）まで行った際、途中下車して寄ってみたのである。
「なんかこう、社交辞令を真に受けて本当に遊びに来るヤツって初めて見たワ」
と、倫太郎は笑いながら言っていたが、彼もまた、沙龍のことは嫌っていない。
ロクに目も合わせてくれない息子の親友というだけあって、いろいろと頼りにもしている。

が、沙龍が今回、仙台に寄ったのは、倫太郎と世間話をするためでも、牛タンカレーを食べるためでもない。
以前、倫太郎が思わず口にした名前のことを、確かめるために来たのである。
「ルシアって誰？」
沙龍はズバリそう聞いた。
「……？　フィリピン・パブのおねーちゃんの名前だったと思うが？」
「いや、違うよ。絶対」
「……んー？　しかし、外国のおねーちゃんの名前なんて、それくらいしかないだろうー？」
日焼けした顔にテンガロンハットという、相変わらずイカれた風体の倫太郎は、最後まですっとぼけ通した。
沙龍がなぜ忘れていたその名が気になったかといえば、一ヶ月ほど前に渋谷で自分を呼び止めた占い師に、同じ名前を告げられたからだ。
「あなたの前世の名前ですね。ルシア……いや、クリス……、いや、やっぱりルシアかな？　贅沢なドレスを着ていた時代のね」

妙な占い師だった。
英国紳士風のタキシードを着た老人で、顔立ちは色んな血が混ざっているように見えた。
そのときは、木佐も一緒に居て、木佐のほうが興味深そうにその話を聞いていた。
もしかしたら、倫太郎は、自分の前世を知っているのかもしれない、と思ったのはそのときだ。
しかし、倫太郎がすっとぼけ通したせいで、仙台では結局なにも新しい情報は得られなかったのだ。
その日は、お土産の笹かまぼこを持たせてもらって別れたが、こんなものを家に持って帰るわけにはいかないので、帰りの新幹線の中で全部たいらげたのである。
そして、東北から戻ってきた日、奥田邸での打ち合わせのあとは、渋谷の街を徘徊して、例の占い師を探した。
が、数時間歩き回っても、見つけることはできなかった。

界隈で手相占いや易を行っている者たちに聞いてまわっても、誰も覚えていないし、そもそもタキシードを着て占いをやっている者などここら辺では見たことはない、という。あの老人は実在の人間なんだろうか？　そんな風にも思った。この世のものならぬ存在なのか、それとも、単なる詐欺師なのか――。いや、あのとき、金銭のやり取りはなかった。詐欺師ではないはずだ。

少しでも自分のルーツを知りたい、と思うようになったのは、毎夜の十キロ完走ができなくなったからである。

最初は単なる体調不良のせいだと思った。月一のせいか、軽い風邪がなおってないのか、いずれにせよ、すぐ回復するだろう、と。

だが、体調はなかなか上向きにならない。目に見えて下降しているわけではないのだが、完走できないので、やがてジョギングもしなくなった。

こっそり病院に行って血液検査をしてもらったら、「ちょっと疲れてるようですね」とだけ言われた。別に疲れるようなことはなにもしていないのに。

そこで、思い当たったのが、自分の両親が若くして病死したという話だ。

百合子に関しては、産後の肥立ちが悪かったという見方もあるが、弥太郎は明

らかに疾患を持っていたと思われる。
ならば、その同じ病が自分にもやって来たに違いない、と悟った。

初日なので、一番低い山から行こう、と思った。
井原市と笠原市の境にある一六〇メートルの竜王山を目指す。
倉敷市内でレンタルしたバイクはオフロードの一二五ｃｃにしたが、ただでさえオフロードバイクは車高があるので、足のつくものを探してもらうのに時間がかかった。
百四十五センチしかない身長が恨めしい。
「ポケバイにします？」
などと、店員には冗談で言われ、ムッとしたが、その脇を、木佐は二五〇ｃｃのヤマハで、さっさと駆け抜けて行ってしまった。
ダブルでムッとしている。
だが、まぁ、仕事でもないのに、こうして付き合ってくれるのだから、感謝し

なくてはなるまい。
たとえ、木佐の下心が、神谷邸の蔵に眠っている銘入りのどれかにあるのだとしても！

13　沙龍の推理

初日は三人とも収穫はなかったが、本格的に始動するのは明日からなので、今日はウォーミングアップみたいなものである。

たいして疲れてもいないが、一仕事終えたあとのビールと団欒はなにものにも変えがたい。

が、その楽しいはずの夕飯時に藤四郎が遺産の話を始めてしまった。

赤の他人に相続させる気はさらさらないので、なんとしても受け取れ、という一方的な話である。

「なぜじゃ！　お前とて、そんな薄給で休みなく働かされて、いまにも潰れそうな小さい会社など辞めて、悠々自適に花嫁修業でもしたほうがいいじゃろうが!?」

「いや、あの、神谷先生……」

「おい、花嫁修業っていつの時代だよ、じーちゃん」

ずっとこの調子なのである。
「……」
もうこれは平行線だな、と千春は思ったが、特に口出しはせず、いつも通り、黙々と食事をすることにした。
クロダイの刺身がとても美味しい。
瀬戸内の海産物はどこよりも美味いと、養父は言っていた。以前、その養父と一緒に岡山に来たときは、楽屋でバラ寿司を食べた記憶がある。
木佐邸の食事もいつも素晴らしく美味しいが、やはり海産物はなかなか出てこない。ここで充分堪能しておこう。
「だから、お金は、ささやかな貯金もあるし、働ける体もあるし、別に困ってないから、要らないって言ってんの！」
「だから、それでは、転がり込んでくる遺産を断る理由としては弱い、と言っておろうが！　清貧か！　清貧きどってんのか！　その若さで！　嫌味じゃのう！」
「あのねぇ、人間、個人で億兆単位の金なんか持っても、余計なトラブルと死体

と仕事が増えるだけで、いいことなんかひとつもないんだよ？」
そこで、急に場がシンとなってしまった。
なにか単語を聞き間違えただろうか、と千春などは思った。それとも、沙龍が日本語を間違えたのか。
木佐は軽く「あーあ」という顔をしたが、藤四郎と千春は、そう言い切った沙龍を見つめ、その沙龍がいまかぶりついている〝ままかり〟を食べ終わったら
「あ、映画の話ね」と言ってくれるのを待った。
「……」
「……」
が、特にそういう解説もなく、沙龍は「とにかく、ご飯中にこの話はナシ！」と、一方的に遺産の話を終わらせた。
その後は、晩酌も進んで、特に険悪な雰囲気にはならずに済んだ。
食後、木佐が広い檜風呂で足を伸ばしてくつろいでいると、ビニール袋でギプスの右腕をすっぽり包んだ千春が洗い場に入って来た。
「すいません、ご一緒します」

「手伝おうか？」
「いえ、大丈夫ですよ」
そう言って、片手で器用に体を洗い始める。
なるほど、確かにこれでは助けは要らない。
「しかし、君も結構無防備だな」
木佐が湯船から声をかけた。
「え？」
「僕の指向を知って、一緒に風呂に入るって、かなり冒険な気がするんだが」
千春は髪を洗っているので、よく聞こえていないだろうと思ったのだが、
「そうですかね？　まぁ、同時に、所長の性格とか、好きなタイプも知ってますから」
しっかり聞こえていたらしい。
蛇口を止めて微笑んでみせる。
「……」
無性愛者というのは、自分がそういった性的衝動を持たない分、他人もそうだ

と思いがちなのだろうか。
しかし、なんだかちょっと癪に障る。
「……〝好きなタイプ〟？」
そんなのは、統一されていないと自分では思っている。
確かに、木佐が付き合うタイプは、美少年タイプから、エリートサラリーマン風まで、わりと幅広い。
が、千春には一貫性が見えているようだ。
「ええ。自分はだいぶ外れてますね」
よくも悪くも、木佐は自我や自尊心の強いタイプが好きなのだ。というよりも、その強い自尊心を寝所でべりべりに剥がすのが好きなのである。かなり屈折しているといえる。
千春はもともとの性質と、孤児という事情もあって、地味に、目立たずに生きてきたのだ。木佐のそっちの相手にはなり得ないのである。
「どうして分かる……？」
「自分のは、ただの修業で得た洞察力ですよ。でも、馨さんは、そういうの、本

能的に分かるタイプみたいですね」
「……？　まぁ、あれは野生動物みたいなもんだからな」
「その野生的な勘と、特殊な生まれのせいで、あの人は色んなものを見る羽目になったんでしょうね」
「……」
肯定も否定もしなかった。
千春がそう判断したのなら、それは彼にとっての真実になる。
「しかし、遺産は要らないって、すごいですよね。いくら東京とは地価が違うっていっても、ここの土地家屋なら相当の額になりそうなのに」
「山もいくつか持ってるみたいだぞ」
「勿体無い……」
というのがやはり庶民の本音である。

二日目、三日目もたいした収穫はなかった。

木佐の担当分は三日目の今日で終わって、結論は「該当場所なし」である。
千春と沙龍はまだノルマが残っている。
「マーフィーの法則になかったっけ？　〝探しものは最初には絶対見つからない〟」
そんな法則はない。沙龍が勝手に作っているだけだが、千春には分からない話ではなかった。
最初に見つかるものなら、探す必要はないのである。
布団を三枚敷いて、今日も川の字に寝る。
「修学旅行みたいだね」
と、修学旅行に行っていない沙龍が言っている。
「キサさんも、春ちゃんも、高校で行ったの？」
「高二のとき、北海道に。そうか、馨、行ってないんだよな」
「自分も高二のとき。公立高校でしたから、京都奈良の定番コースでしたね」
「そっかー。修学旅行って、高二で行くのが普通なのね。もっと早く気付いてれば、それに間に合うように来日したのにな」

「でも、高校の修学旅行って、結構、つまんないぞ？　廻る場所も杓子定規な感じで」
「そうなの？　でも、キサさんと一緒だったら、私はどこ行っても充分楽しいよ」
「……」
沙龍はこういう殺し文句を平気で言う。日本で育った日本人にはなかなか出てこない台詞だろう。
そのたびに木佐は黙って耐えるわけだが、最近は千春がそれを見てひそかに笑っている。
「あとひとつかー」
沙龍は既に布団に入って、ポケット地図を見ている。携帯用に買ったものだ。
明日行くべき笠岡市のページには、例の写真をはさんでいる。
「この鳥居さ……、やっぱり、山頂に祀ってる祠（ほこら）に通じる鳥居なのかな」
写真の中の小さな鳥居のことである。
それは左側に写っていた。

「そういえば、自分がこの三日で調べた『りゅうおうざん』には、山頂に祠があるものと、ないものがありましたね。立派なお寺だったり、稲荷だったり、って場合もありましたけど」
「そうなんだよね。必ずしも全部の『りゅうおうざん』で雨乞いが行われてたわけじゃないのかな……」
沙龍の呟きには、座卓で書きものをしている木佐が答えた。
自分のノルマが終わったので、軽くまとめておくつもりらしい。
「もしくは、相当昔のことなので、人工物が残っていないだけかもな。雨乞いが集落単位で行われていたとすると、祠は基礎工事をきちんとせずに建てたものも多かったはずだ。だとしたら、遺構は残らないだろう」
「そっか。雨乞いの儀式をいつの時代にやってたか、によるのか」
「平安時代には日常的にやっていたという話を聞いたことはあるが、それ以降はよく分からないんだよな。江戸時代にもその習慣が続いていたのかどうかは調べてみないと」
「ふーん……」

沙龍はもう眠そうである。
疲れているのかもしれない。
「甲斐弥太郎がノボレと言っていた『リュウオウザン』はたぶんひとつだけだと思うんだよね……。それは、やっぱこの写真の場所なのかなー……」
ほとんどひとり言である。
思考をそのまま音声にして垂れ流しているだけだ。
「だいたいさー、なんで、その時点で居ない自分の子供に謎のメッセージを……。まるで、私がいつか岡山に行くことを知っていたみたいな……。それに、そもそも、なんで、京都から岡山まで……」
そのとき、沙龍は急に閃きかけた。
「あ！」と叫んで、ガバッと半身を起こした。
「〝なぜ、甲斐弥太郎は岡山に来たのか？〟」
「神谷百合子に会うため？」
あまり考えずに言った木佐の言葉は、半分は当たっている気がする。
しかし、

「それはたぶん、副次的だったんじゃないかな」
「副次的？　つまり、メインの目的があったってことか？」
「うん、あったんだと思う」
「弥太郎さんは、なにかを探しに来たんじゃないですかね。例えば……、彼にとっての大事な情報、とか」
今度は、千春が横から言った。
「……」
ちょっと考え込む。
いまの千春の物言いにもなにか引っかかるが、それ以上に、沙龍は閃きかけたこの断片を逃したくない。
「岡山には『りゅうおうざん』がたくさんある。だから、甲斐弥太郎は岡山に来たんじゃ……？」
「どういう意味だ？」
「彼の足取りがさ……。甲斐弥太郎は、京都の黒田家を訪ねたあと、そんなに時間を置かずに岡山に来てるんだよ。そして、その後、すぐ中国へ渡った。恐ら

く、彼にとっての、最終目的地である『真の龍穴』へ……」
頭の中の、霧が、晴れた。
パァッと、そこに扇風機を当てたみたいに。
「そっか、分かった……！　岡山で、その『真の龍穴』の場所を、知ったんだ！
それまで、知らなかったんだよ、彼は！」
「……？」
木佐は完全にペンを置いて、顔を上げた。
「あの場所は、李家の人たちが二千年間秘匿していた場所なんだから、日本生まれ日本育ちの甲斐弥太郎が知っているわけはない。もしかしたら、日中戦争の際、彼はわざと行方不明になって、戦死したことにして、大陸中を探し回ったのかもしれない……。しかし、やっぱり、見つけることはできなかった。そして、失意のまま、帰国した……。だけど、『黄龍の保持者』として、なんとしても、その最終目的地を知る必要があった……。そして、その可能性が、唯一、日本の岡山にあった。なぜなら、岡山には『りゅうおうざん』があるから！」
「『りゅうおうざん』が、どうして、いや、どうやって、その龍穴の場所を教え

てくれるっていうんだ？」
木佐が不可解な顔のまま聞いてきたが、沙龍は自分の考えに没頭して、ひとり言を続けている。
「ああ、そうか、美観地区で、あのメッセージが二十年保管されていた理由も分かった！　龍王が絡んだ案件だったからだ。地霊が特別任務だと判断したんだよ」
「馨……、僕にも分かるように説明してくれ」
そう言われて、やっと木佐を見る。
「甲斐弥太郎は、『りゅうおうざん』という大きな装置を利用して、『龍王』を喚んだんだよ。本物の龍王を。八大竜王ではなく、恐らく、四海龍王の誰かを――」
「四海龍王……？」
「うん、中国には八人も居ない。四人なの。四つの海にそれぞれ龍王が居る。その、龍族の頂点である龍王なら『真の龍穴』の場所も知っているはず――」
「しかし、なぜ龍王なんだ？　黄龍本体に聞けばいい話じゃないのか」

「キサさん、京都で見たでしょ。あの神獣は、質問に答えてくれるようには出来てないよ」
「……」
「それで、龍王に直接聞いたんだ。『真の龍穴』の場所を。その座標を――」
「……」
木佐は「大丈夫か？」という顔をしているが、千春は特に驚いてはいなかった。

14　龍王宮

翌日、それぞれに残っている山があるので、沙龍と千春は早い時間に出て行った。

木佐は神谷邸待機である。藤四郎に、所蔵の刀を見せてもらうことになっていた。

沙龍の知らぬところで、このふたりはすっかり年齢を超えた友人になってしまっている。木佐の日本刀に対するマニアぶりは、かなり度を超えているので、藤四郎も長年蓄えた知識の披露しがいがあるだろう。

「あの長船秀光は素晴らしいです。二代（注1）ですね。生きている間に最上大業物を拝める機会があるとは思いませんでした」

「うむうむっ。バカ孫はちっとも価値が分かっとらんようだが、小次郎君はさすがじゃのうー」

「しかし、敢えて、本流や長義系にしなかったのには、なにか理由があるんです

か？」
「ふふ。気になるか？」
「ええ、まぁ……」
「秀光はのう、長船一族のハミ出し者だったという。それは刀にも現れておる。本来の長船物はのう、みな優等生なのじゃ。つまり、そこそこ斬れて、丈夫で、美しい。しかし、秀光は、斬れ味だけをとことん追求した、狂人には持たせてはならぬ、一歩間違えば妖刀になる刀よ。決して優等生ではないな」
「……妖刀、ですか」
「アレには丁度よいじゃろう？」
ふふん、と笑って藤四郎は言った。
「……」
これは、ある意味、ものすごい自信だ、と木佐は思う。
つまり、神谷藤四郎は一見しただけで沙龍の性質は分かった、と言い、さらに自分の孫が狂人になるはずはない、と言い切っているのである。
確かに、合理主義的なところは、藤四郎の指摘する通りだ。

木佐が日本刀の美を語ると、沙龍はいつも不可解な顔をする。道具は用を足せばいいのである。そこに美しさを求めることを無駄とは言わないが、自分は好まない、と。

それに対する木佐の反論は、刀匠の魂と技の融合した結果が美になるのであって、美を第一に求めているわけではない、というものだ。

どちらも、正しい。

白壁の蔵の両開きの入り口には古風な錠前がついていたが、古いのは見かけだけだという。中は電子式の錠になっているらしい。

ピッという小さな音がして、ロックが解除される。

蔵の中は、意外にも綺麗に整頓されていた。

空調も取り付けられ、きちんと温度と湿度も管理されているようだ。

「先々代が刀集めが趣味だったみたいで、重文に指定されているものも何本かあったはずじゃ。いくつかの美術館が展示するから貸してくれ、ってうるさく言ってきよるんじゃが、契約がどうとか、心底面倒でのうー」

「……」

この祖父孫は、まぎれもなく血のつながりがあるな、と、木佐は思った。
「たかが、一本の太刀の貸し借りに百ページもありそうな契約書とか持ってくるもんで、もううんざりして、ぜんぶ断ることにしたワ」
「なるほど……。そういう個人所有者が居るから、一般人はなかなかお目にかかれないわけですね」
軽口を言うと、藤四郎も笑っていた。
「まぁ、小次郎君くらいに価値の分かる愛好家になら、いつでも見せるぞい」
「それは有難いんですが、神谷先生。なにぶん、僕も東京での仕事がありますから、そんなにしょっちゅうこちらにお邪魔するわけにもいかないでしょう。それで……」
「うむ」
「できたら、僕にもなんかください」
あまりにもストレートな言い方である。
もちろん、九割くらいは冗談で言ったのである。
しかし、藤四郎は大真面目な顔をして、

「小次郎君には、華やかな一文字派のほうが合いそうじゃな。しかし、うちにあったかのう……」
と、蔵の奥を探し始める。
え!?　と思ったが、遅かった。
「お、助宗（すけむね）があるな。ウム、これはウチにはうまく使える者がおらんから、丁度いいじゃろう」
見た目はごく普通の黒塗りの鞘である。若干、反りが深そうだ。
助宗は、有名な『菊一文字』の作者、一文字則宗（のりむね）の息子とされる。
「え、助宗ですって？　これを……？　僕に……？」
目がチカチカして、気が遠くなりそうだが、なんとか気力を奮い立たせて、この銘刀と対面しなければならない。
「ウム、持ってゆけ」
「……あ、ありがとうございます！」
言ってみるもんだ、と思った。
大一文字と呼ばれた、八百年前の刀工がこの世に残したものである。

果たして、自分に使いこなせるかどうか――。
木佐がおごそかな気分になっていると、
「あ、ちょっと、お願いがあるんじゃがのう、小次郎君」
藤四郎が、ついでのように言った。
「……はい？」
そう。
タダより高い買い物はないのだ。いつの時代も。

沙龍が笠岡市の竜王山に着く前に、千春から『我、発見せり』の一報が入った。
バイクを県道の脇に寄せ、メールを確認する。
（よし。よくやった、春ちゃん！）
ついでに、ミオちゃんがお弁当と一緒に渡してくれた水筒の水を一口。陽射しが眩しくて、目を細める。

急いで、来た道を引き返すことにした。

自分の視界の景色と、写真を見比べて、千春が感慨深いため息を漏らした。

景色がピタリと重なっている。

「ここですね……、やっとたどり着きましたよ」

誰かに話しかけているようにも見える。

倉敷市内の児島というところにある、標高二〇九メートルの龍王山である。

海が近い。すぐ近くに瀬戸大橋が見える。

市内の山を後回しにしたのは、やはり「遠くのものから片付けたい」という心理からだろう。

しかし、それが裏目に出てしまった。

最初にここに来ていれば、みんなを三日も引きずり回さずに済んだのに。

どうして『彼女』は教えてくれなかったのだろう？　知っていたはずなのに。

「……なるほど、確かに楽しかったですよ？」

千春がこの修学旅行のような、もしくは、仕事の延長のような旅を意外にも楽しんでいるようなので、教えそびれた、ということらしい。
本当だろうか。
気まぐれな地霊のいうことなど、あまりアテにはできない。
一度、麓まで降りて、ふたりを待った。
その後、木佐は門下生の若者に借りたというスクーターで三十分もかからずに来たし、沙龍も一時間くらいで合流した。
「山頂に、立派な鳥居がありました。写真に写ってる鳥居はそれですね」
千春の顔がにこやかだ。
岡山に来てからは、ずっとこの営業用になっている気がする。
「そっか。やったね！」
かなり頂上のほうまで、狭いながらも舗装された道路があったので、その迂回コースを行くことにした。
沙龍がバイクの後部座席に千春を乗せた。
「しっかりつかまっててね」

山頂まではものの数分なのだが、途中で千春が止めた。写真を撮った場所がここだという。
「自動販売機はなくなってるんですけど、稜線の具合と、小さく見える鳥居の一部が同じです」
「ああ、本当だ……」
沙龍がバイクから降りて、山のほうを見上げる。
既視感は、いちばん最初に写真を見たときのほうが大きかったが、実際にこの場所に来てみると、別の感慨が湧き上がってくる。郷愁ではない。
（なんだろう、これ……）
苦しいような、切ないような。
（誰かの、痛み……？）
それだけではない。
色んなものが混ざり合って、結果的にこの夏の熱気になっている気もした。
『晴れの国』と、千春は言っていた。
ここは、日本の中でも、少し特殊な土地なのではないか。

そんな風にも思える。
「鈴木は、もしかして、写真の場所がここだって、知ってたんじゃないか？」
木佐はスクーターのシートに座ったまま頬杖ついて千春を見上げている。
「どうしてそう思うんです？」
「そうだな。この言葉を使うのはためらわれるが……、『なんとなく』かな」
「……すべて、山頂で、説明しますよ」
と、儚げな笑顔を向けて言う。
そこからは、徒歩で行くことにした。急な坂になっていたからである。
灯篭の並ぶ狭い道を進むと、階段があり、それを登りきった先に石の鳥居が鎮座していた。
その立派な鳥居の上部にある、扁額（へんがく）の言葉をみなが思わず口にしていた。
「龍王宮――」
龍王山の山頂に祀られた、龍王宮が、そこにあったのだ。
しかし、三人がその鳥居をくぐって、先に進むと、祠や拝殿のようなものはなく、墓石のような大きな石が設置されているだけだった。

『龍王宮』と、石の表面に彫られてある。
千春が、その墓碑のような字を見ながら、小さな声で話し始めた。
「実は、松木さんほどじゃないんですけど、自分も少し霊感があって」
確かに、それは初めて聞く話だった。
「それを前提として聞いていただきたいんですが」
「うん」
「自分も、小さい頃、ここに来たことがあったんです。あまり記憶にはないんですが、たぶん、あのとき、迷い込んだのが、この山だったんじゃないかと」
「あのとき？」
「ええ。養父の巡業について、色んな地方都市を廻った、って話しましたよね？倉敷市にも来たことがあったんですが、楽屋でひとりの自分を気の毒に思ったのか、スタッフの人が外に遊びに連れていってくれたことがあったんですよ。小学校に入る前だったから、六歳くらいかな」
そのとき、そのスタッフとはぐれて、迷い込んだのがこの龍王山だったらしい。

瀬戸大橋の景色は確かに見覚えがある気がするが、千春の記憶はだいぶ曖昧だ。
「でも、あの石の鳥居は覚えてました」
「鈴木が六歳っていうと、十五年くらい前か」
既に、神谷百合子も甲斐弥太郎も倉敷からは姿を消している頃だ。
「それで、話は飛ぶんですが、岡山に来る前に、花園神社に行きましたよね。あのとき、境内に小さな摂社があったの覚えてますか？」
「摂社？　ってなに？」
沙龍が聞いた。
「神社の中にある、小さな神社のことです。元の神社とは違う神様を祀ってあって、それを、摂社とか末社っていうんです。母屋に対する離れみたいなものですね。花園神社の中にも、芸能浅間神社っていう摂社があって。文字通り、芸能の神様なんです。自分は、養父が芸事の神社にはよくお参りしていた関係上、その手の神様には親和性があるみたいなんです。で、頼まれたんですよね。その神様に。実質は『命令』なんですけど」

「た、頼まれたって、なにを……？」
「ざっくり言えば、馨さんの旅に協力しろってことです。ただ、詳しくは、倉敷の土地神に聞けっていうので、岡山までついてくることにしたんです。もちろん、所長の意を汲んで、っていう意味もありましたけど」
「え？　どういう意味？」
と、沙龍が振り返ったが、木佐は不機嫌な顔を貼り付けたまま、なにも言わなかった。
「まぁ、それは追々。それで、実際、倉敷に来てみれば、やけに接触してくる地霊が居るんです。ああ、芸能の神様が言っていた、倉敷の土地神はこれのことかってすぐ分かったんですけど、この地霊がですね……」
千春が言葉を切って、しばらく迷っていた。
というより、実際には相談していたのだろう。
「……要するに、神谷家ゆかりの地霊なので、いろいろと実情を知っているそうなんですよ。甲斐弥太郎さんのこととかも」
「ええっ!?」

なんてこった。
こんな近くに、事情を知る存在が居たとは。
「じゃ、じゃあさ、甲斐弥太郎がどうして岡山に来たのかとか、神谷百合子はなんで駆け落ちしたのか、とかも、全部知ってるの？」
「……知ってるそうです」
間をあけて、答える。
沙龍も木佐も霊感はないので、その地霊の存在を感じることはできない。全面的に千春の言っていることを信じるしかない。
李家の連絡方法で、霊感のない沙龍でもメッセージを受け取ることができるのは、地霊のほうの力に依存するからである。
「なぜ岡山に来たのか、って部分については、馨さんが昨夜言ってたことでほぼ合ってるそうです」
「そうなのか……。やっぱり……。しかし、すごいな、春ちゃん」
「自分がすごいんじゃないですよ。この地霊さんは、ふだん、この神域に居るので、里でウロウロしているほかの地霊とはちょっと格が違うみたいです」

フフ、と笑っていた。
「へぇ……」
「ほかにも、聞きたいことがあれば、答えられる範囲で答えるって言ってますよ？」
「そんなの、いっぱいあるよ！」
そう。聞きたいことは色々ある。
神谷百合子は、なぜお屋敷での暮らしを捨てて、甲斐弥太郎についていったのか。
なぜ仮面夫婦だったのか。
斎藤新助とは誰なのか。本当に甲斐弥太郎のもうひとつの名前なのか。
そして、なぜ「リュウオウザンノボレ」というメッセージを残したのか。
しかし、一番聞きたいことは別のことだ。このふたりの前では聞くのが憚られる。
「たとえば、私が、その地霊さんとふたりきりで話すことはできるの？」
「それは……、それこそ龍王の力でも借りなければ無理でしょうね」

「そうなのか……」
ガックリ肩を落とす。
しかし、こんな千載一遇のチャンスに、見得や体面など、気にしていられない。
ぐっと思い直して、聞くことにした。
「一番聞きたいことから聞いていい？　甲斐弥太郎は私が二歳になる前に病死したと聞いた。彼は、どういう病気を患っていたの？」
「……それは、甲斐一族の宿命だったらしい、と言ってます」
「宿命？　らしい？　はっきりしないんだね……。具体的には、どういう病気なの？　治療法はあるの？」
「……症状は、日に日に衰弱していくだけ。治療法はあるのかないのか分からない、と言ってます。少なくとも、弥太郎さんは病院に通ったりはしていなかったようです」
「そう……」
ため息が出た。

ここまで来て、肝心のことは、結局、なにも分からないではないか。
「質問を変える。甲斐弥太郎は、なぜ、大陸に渡って、後継者を作ろうとしたの？　もしかしたら、子供を作らなければ、長生きもできたんじゃない？」
「……なぜあなたがそれを聞くのか、と聞いてます」
苛立ちを感じた。
もちろん千春に、ではなく、その地霊に。
「〝なぜ〟？　私の立場では聞いちゃいけない、とでも？　別に、作ってくれなくてもよかった、とは言ってないでしょ」
声が荒くなる。
「馨」
木佐が後ろから短く声をかけた。
少し興奮していたのを、戒めてくれたのだ。
「ん、ごめん……」
「……わたしは、神谷家ゆかりの地霊なので、甲斐弥太郎の本心は分からないが、神谷百合子のほうなら分かる、と言ってます」

「うん、それで？」
「……百合子には、ある因業があって、弥太郎の望みを叶えてあげなければならないと思っていたそうです」
「意味が、よく分からない」
「……それ以上の説明はできないそうです」
だめだ、こちらも結局、肝心なことはなにも分からない。
なんだか、脱力してしまった。
「あの夫婦は、どういう関係だったの？　普通の恋愛感情なんかなかったのに、なんで駆け落ちしたの？　義務感なの？」
「いちばん近いのは『友情』だと言ってます」
「……友情？」
嘲笑するように吐き捨てた。
「あなたと、その後ろの彼と同じような関係だ、と言ってます」
「……」
思わず、振り向く。

そこには、木佐の無表情の顔があった。
自分と木佐の関係と同じ？
どういう意味だろう。
いや、言葉通りの意味なのか。
「すみません、ここからは自分の言葉ですが。どうも、甲斐弥太郎さんは自分と同じ、無性愛者だったみたいですね」
「へ……？」
思わぬ言葉に、間の抜けた声が出た。
と同時に、千春が石碑の影に座り込んでしまった。
「春ちゃん……!?」
「ごめんなさい。少し、疲れました」
地霊とのコンタクトには相当エネルギーを使うらしい。自分はもともと器が小さいので、あまり長くはできないのだと弱弱しく言う。
慌てて、休んでもらうことにした。
丁度いい時間だったので、そのままお昼にしよう、と提案する。

沙龍が大食漢であることを知ったミオちゃんが、大きなおにぎりを六個も作ってくれていたので、半分を木佐にあげた。
千春のお弁当にはおにぎりが三つ入っている。が、なぜか、おかずはこちらのほうが豪華だった。
母性本能の強い女性限定キラーの千春が、ミオちゃんの心を捕らえてしまったのかもしれない。
じわじわと、真昼の太陽が燃えている。
ここからは瀬戸内海の小さな島々が一望できた。晴れ渡った水色の空の下に、深い青の海が広がっている。
「……」
木佐はずっと無表情のまま、口も重い。
沙龍があんなことを聞く以上、彼女自身の体にも、既に病の兆しがあるのだろう。
それを考えると、食べ物の味がしなかった。
「ごめんね、春ちゃん。怪我してるのに無理をさせたね」

沙龍はいつも通りに戻っている。
「大丈夫ですよ。怪我も疲労も、時間をかければ回復しますから」
「……」
〝日に日に衰弱していくだけ〟という、さっきの地霊の言葉が思い出された。
このまま、なんの解決策も見つけられぬまま、自分の体は日に日に弱っていくのだろうか。
いや、きっと、なにか手立てがあるはずだ。
甲斐弥太郎は己の死を受け入れたようだが、甲斐馨は引く道など知らない。
生きている限り、この心臓が動く限り、あがくしかないのだ。
「うん、大丈夫だよ、キサさん。私は諦めないから」
木佐は無表情のまま、頷いていた。

（注1）長船秀光は四人居る。斬れ味が天下無双といわれたのは二代（一三七五～七九年ごろ）で、作中に出てくるのも二代作（という設定）。

15　相馬さんちの事情

神谷邸滞在、七日目。

山登り仕事は終わったが、遺産の話はなにも終わっていない。

藤四郎と顔を合わせればその話をされるので、沙龍は逃げることにした。朝ご飯は台所でおにぎりを頬張るだけにして、屋敷を抜け出す。

玄関先で、スクーターに乗った相馬祐介の姿が見えた。今まさに、エンジンをかけようという頃合だ。目が合った。

「あれ？　お出かけですか？」

「よし、出かけよう、祐ちゃん！」

スクーターの後部座席に勝手に収まって、発進を促す。

この少年がスガさんやミオちゃんから「祐ちゃん」と呼ばれて可愛がられているのは知っている。

赤ん坊の頃からこの家に出入りしているそうなので、ほとんど親戚扱いなのだ

ろう。実際、彼の叔父か叔母が、神谷家とは遠い親戚らしい。
「ど、どうしたんです？」
「いや、ちょっと散歩に行こうかと思って。適当な所まで連れてってチョーダイ！」
「はぁ……」
少年は少し考える風を装い、
「美観地区、行きました？」
「うん、行った」
「デミカツ丼、食べました？」
「いや、食べてない！　なんだその聞くだけでも美味しそうな食べ物は！」
「じゃあ、安い店知ってるんで、行きましょう！」
高校生は元気である。
まだ朝の八時前という時間で、彼も神谷邸で朝食を食べたばかりなのだが、まだ余裕で一食くらいは入るらしい。
「あ、でも、この時間だとまだやってないなぁ……。店開くの、十時くらいだっ

たと思うんで、それまでウチにでも来ます？」
「うん」
スクーターで十分ほど走る間に、いくつかの事実が判明する。少年の口から出るのは、「小次郎さん、強いですね！」ということ。「昨日も、小次郎さんにこのスクーター、お貸ししたんですよ！」ということ。さらに、「小次郎さんって、かっこいいですよね！」ということだった。
（やばい……んじゃないか……？　これは……）
と、一抹の不安を覚える。
少年が真性の同性愛者で、こう見えて遊び人なら一向に構わないのだが（九十九パーセントそれはないと思うが）、もしそうでない場合に、木佐の餌食になって、ひと夏のアバンチュールをしたあと、あっさり捨てられ、心に傷を負う羽目になったらどうしよう、などと要らぬ心配もしてしまう。
もっとも、木佐もそこまで節操のないことはしないと思うのだが。……たぶん。
「小次郎さんって、馨さんの、彼氏なんですか？」

「いや、違います」
「じゃあ、彼氏は鈴木さんのほう？」
「いや、それも違います」
「ふーん……？」
青春を謳歌してそうな高校生の話題としてはとても正しいが、沙龍は少々このやり取りに辟易している。
木佐と居ると、まして、一緒に住んでいると言うと、百パーセント恋人同士だと思われる。否定しても、ほぼ信じてもらえない。
なにか深い事情があって、口では否定しなければならないんだろう、という深読みまでされる。
（まぁ、それも、しょうがないよなー）
自分だって、甲斐弥太郎と百合子の友情という関係も、にわかには信じがたい、と思っているのだ。
ただ、弥太郎は無性愛者だったと聞いて、それもありかもしれない、と腑に落ちた部分もあった。

千春いわく、無性愛者は「子孫を残すことに執着しない、あるいは望まない人間」らしい。

とすれば、弥太郎には、葛藤があったに違いない。子供を作ることを望まない自分と、作らなければならないという義務の間で揺れて、数百年を生きてきたのではないか――。

なんだか、それを考えると、とても昏い気分になる。

当然だ。

どんなに割り切ってはいても、自分は義務で仕方なく作られた子供だった――、という事実を突きつけられるのは、気分のいいものではない。

沙龍が実の両親と距離を取ろうとするのは、そういう昏い事実がどうしても出てきてしまうからだ。

だから、いままで積極的に知ろうとはしなかったのである。

しかし、自分の体を蝕み始めたものの正体を突き止めるためには、甲斐家のことを調べるしかない。

「女の子乗せるの、久しぶりー！」

少年がまた大声で話し出す。
「いや、本当は違反だから！　自分から乗り込んでおいてなんだけど！」
少年に被せられたヘルメットは、少々汗臭かったが、ハーフメットなのでまだ救いようがある。
本人はノーヘルで風を正面から受けていた。
愛想がいいだけではなく、なかなかの紳士である。
「ふたり乗り、見つかったら罰金と減点だよね。大丈夫？」
「あー、大丈夫ですよ。ここらへん、私道だから」
「え？　そうなの？　全部？」
「うん。確か、さっきの山道までが神谷先生の私有地で、ここらは地主の藤井さんの土地だったはず」
「そうなんだ」
「あ、あそこです。オレんち」
前方に見えてきた平屋のことを言っているのだろう。
神谷邸ほどではないが、相馬家も立派な家だった。敷地も、新宿の奥田邸くら

いはある。
　スクーターを降りながら祐ちゃんが言った。
「神谷先生の孫を連れてきた、って言ったら、みんな驚くかなー。あ、うちの父は、百合子さんの大ファンで、若かりし頃、神谷先生に『お嬢さんと結婚させてください』って言ったらしいんですよー」
「え、じゃあ、私がここに来ちゃまずかったんでない？」
「あ、大丈夫大丈夫。十代の頃の話らしいですし、恨みつらみ系はぜんぜんないから」
「そ、そうなの？」
　祐ちゃんがそう言っても、当の本人はドロドロしているかもしれないではないか。などと思ったものの、実際、出勤前の父親に出くわすと、少年の言に納得もした。
「父さん、神谷先生んとこのお孫さん！」
　と、沙龍を紹介する。
「え、百合子さんの!?　ああ、初めまして、祐介の父です。東京からいらっ

しゃったんですよね？　いやはや、こんな遠いところまではるばるようこそ」
息子をそのまま老けさせたような、愛想のいい父親だった。
体格もほとんど同じである。
「あ、はい。初めまして、甲斐馨です」
「そうか、神谷姓ではないんですよね。で、こちらにはいつまで滞在されるんで？　倉敷が気に入られたら、神谷先生のところにね、もう一緒に住んじゃうといいですよ！　って、昨日も、息子と話してたんですよ。いや、ほら、先生もね、もう七十だし、いろいろと心細いと思うんですよね。その点、お孫さんが一緒なら……」
父親の話が延々と続きそうなところで、
「お父さん、仕事、遅れますよ」
後ろから、声がかかった。
開いたままの玄関の奥に、もうひとり、男性が居る。
初めて見る顔だ。いや、神谷邸で一度すれ違ったかもしれない。
祐ちゃんより頭ひとつ分背が高くて、顔立ちも違う。ずいぶん顎の尖った顔だ

な、と沙龍は思った。
「あ、ホントだ。すみません、えーと、馨さん、じゃ、また！　ごゆっくりしていってくださいね」
父親は、早足で車庫のほうに向かう。
車でこの時間に出勤か、と沙龍は東京との違いを嫌でも思った。
自分は自宅が職場なので、満員電車で出勤という地獄を経験せずに済んでいるのだが、千春は毎日ギュウギュウの山手線で通勤している。それでも、近いからまだいいほうだ。
「祐介、早くお客さんに上がってもらって。いつまでも玄関先で失礼だぞ」
顎の尖った青年が言う。
「はーい。あ、兄の高広です」
祐ちゃんが紹介してくれた。
彼が歳の離れた兄で、神谷流の師範代か、と、やっと思い出す。
「初めまして」
軽く頭をさげた。

男性も会釈だけして、父親の運転するセダンに乗り込んだ。一緒に出勤するようだ。

素っ気無い印象だったが、祐介と父親が愛想がいいだけの話かもしれない。利害関係のない初対面の日本人はあんなものだろう。

家に上がらせてもらうと、やはり愛想のいい母親に妙に歓迎されて、冷たい麦茶を出してもらった。

これは、神谷という名前の力だろう、と沙龍は思う。

「すみません、朝早くにお邪魔して」

「そんなの、お気になさらないで。ウチは、神谷先生のところには、兄弟揃ってお世話になってますから！　祐介のほうなんか、毎朝上がりこんで、朝食まで頂いているそうで……。高広さんがいつも心配してるんですよ、あの子はちょっと無遠慮すぎないかって」

「夏休みの間だけだってー！　先生だって賑やかなほうがいいって言ってるし。ヒロ兄ィも母さんも心配しすぎなんだよなー」

祐ちゃんは若者らしい反論をする。

神谷邸では胴着に袴で、それなりにキリッとした武道少年に見えるが、やはり家に帰れば普通の高校生なのだ。

「大人の世界には本音と建前があるのよ、馬鹿ねぇ。高広さんが高校生の頃はもっと思慮深かった気がするのだけど……」

母親の、ふたりの息子に対する呼称の違いが気になる。

それも道理で、高広は先妻の子だという話を、あとで祐ちゃんからこっそり聞いた。兄弟があまり似ていないのもそれで説明がつく。

祐ちゃんは気にしていないようだが、高広のほうは義母や異母弟とは少し距離を置いたところがあるらしい。

しばらく、庭の柴犬と遊ばせてもらったりしてから、例の『デミカツ丼』を食べに出かけることにした。

さすがに今度は公道を走らなければならないので、タンデムはやめた。

バスがあるそうなので、停留所まで仲良く歩く。

「馨さんたちは東京で働いてるんでしょ？　やっぱ今の景気って、キビシーの？」

祐ちゃんがだいぶくだけた口調で聞いてきた。
「うーん、私は経営者じゃないから。そういう景気に左右されるようなやつは、キサさんがいろいろやってる」
「そっか、小次郎さんって、大学生で会社の経営もやってるんでしょ？　すごいよなー、それで、あんなかっこよくて、すっごい強くてさ！」
「ソ、ソダネ」
酔っ払ってたまに腹踊りしたりするけどね、と言いたいのをこらえる。
「オレも高二だから進路をそろそろ決めなきゃいけないんだけど、特にやりたいこともないんだよね。地元の大学に行けって、家族には言われてるんだけど」
「居合は？　朝稽古にちゃんと通ってるくらいだから、好きなんじゃないの？」
「まぁ、夏休み中だけはね、真面目にやろうと思って。普段は、学校の部活があるから、毎日は来れないんだ」
部活は剣道をやっているという。
それでは、遊ぶ暇はあまりないだろう。
「お兄さん、師範代なんでしょ？　祐ちゃんも後々、指導する側にまわってくれ

れば、じーちゃんは喜ぶと思うよー？」
「や、ムリムリ、オレなんて。ヒロ兄ィは、弟のオレが言うのもなんだけど、ちょっと特別だって！　いまは仕事があるから、あまり道場のほうに時間は割けないみたいだけど、剣術馬鹿っていうか、昔はホント、一心不乱に打ち込んでたからなー」
「ふーん……」
さっきチラッと見た限り、あまり剣術馬鹿には見えなかったが、と思った。
まぁ、馬鹿にも色々あるのだろう。
祐ちゃんが連れていってくれたお店は、倉敷市内の小さな洋食屋さんだった。
岡山名物の『デミカツ丼』は、要するに、デミグラスソースのたっぷりかかったカツ丼である。食べ盛りの沙龍には満足な味と量だった。
「すごい美味しかったー！」
「でしょでしょー？　馨さんさ、まだこっちに居るなら、いつでも案内するから、遠慮なく言ってね」
太陽のように笑う。

どこも屈折してないこの感じが沙龍にはとても新鮮である。
「うん、ありがと、祐ちゃん」
高校生の若さのパワーに当てられたせいか、なぜ散歩に出たのかということなどコロッと忘れて、なにも考えずに神谷邸に帰ってしまったのは痛恨の極みであった。

16　一本勝負

「ただい……まっ!?」
言い終わらないうちに、両側から何者かに腕をガシッと掴まれた。
玄関で待ちぶせしていたとしか思えない。
「な、なに……!?」
「ハイ、こっちですー」
左側からミオちゃんの声。
「すみません、本意じゃないんですけど……、逆らえなくて……」
右側からは千春の申し訳なさそうな声。
「ええ？　なに？　どういうこと？　なにが始まるの？」
半ば引きずられるようにして、そのふたりに道場のほうに連れていかれた。
千春は左手だけだし、ミオちゃんも大した力で掴んでいるわけではないので、逃げようと思えば逃げられたのだが、逃げたところで行く場所もなかった。観念

するしかない。どうせ、遺産の話だ。
しかし、このとき無理矢理にでも逃げればよかった、と十分後には後悔する羽目になる。
初めて踏み入れる道場には、毅然とした彫像のような藤四郎が待っており、その傍らには、さっき相馬家で見た顎の尖った顔が控えていた。
（あれ……？　この人……）
相馬高広である。
仕事に行ったのではなかったのか。
「さて、では、小次郎君、よろしく頼む」
「……は、ハイ？」
見れば、木佐が数メートル先に立っている。胴着と袴を身につけていた。
手にしているのは、恐らく、藤四郎から貰ったという太刀だろう。二尺三寸の一文字助宗。
「どうぞ」
と、沙龍の前に、太刀を差し出したのは相馬高広だった。

これは長船秀光だ。確か、共同部屋と化した千春の部屋に無造作に置いておいたはずだが――。

「……」

秀光を受け取るそぶりは見せず、藤四郎をじっと見た。説明してください、という視線である。

仕方ないな、という表情で、藤四郎が口を開く。

「馨よ、お前が小次郎君に勝てば遺産は全部やろう。東京に戻るのも自由じゃ。しかし、負ければ此処に残ってワシの後を継いでもらう。もちろん、その場合も遺産相続はしてもらう」

「……ハ、はいィ？」

その内容を把握するのに十秒はかかった。

「それって、買っても負けても、遺産は受け取れコノヤロー、ってことじゃん。なにそれ。そんな勝負やってられっか！」

「お前に選択肢はないのじゃ。なぜなら、ここはワシのホームグラウンドッ！ビバ、岡山！　東京の理屈は通じんのだよ！　つべこべ言わずに秀光を取れ！」

「いやいや……、ちょっと待ってよ、じーちゃん、んな、アホな……」
こんなキチガイジジイは無視して帰ろうとしたのだが、チラッと出口のほうを見ると、ちゃっかり千春とミオが塞いでいる。
あの素人ふたりを殴打でもして強行突破するのは、さすがに良心が咎める。
「勝負は一本のみ。審査はワシと高広が務める」
「いやいや、ちょっと待ってって……」
「時間は無制限。引き分けは無し」
「だから、待てというのに！」
沙龍は、目の前の相馬高広を手で制して、藤四郎に詰め寄ろうとした。が、
「子供じゃないんだから、駄々をこねるなよ」
正面から木佐が冷ややかに言い放つ。
「ちなみに、僕は神谷先生に賛成だ。退職金は多めに出してやるから、馨はこっちに残るといい」
「……っ!?　本気で言ってんのっ!?」
その言葉は、裏切りに等しい。

『どんなことになろうとも、馨をクビにだけはしない』と言った木佐が、どの口でまったく正反対のことを言っているのか。
「本気も本気、大真面目だ。ここの綺麗な空気で療養がてら、甲斐家の手がかりを探したほうがよっぽど効率的だろう」
「……」
理論では木佐には勝てないのだ。
それは分かっている。
木佐が言うことはいつも正しい。正しすぎて泣けてくるくらいだ。
「それが嫌なら僕を負かすしかないんだ。秀光を取れ」
「……」
木佐の声が二百パーセント本気だったので、もう自棄気味に、師範代の差し出す太刀を取ろうとした。
と、そこに、
「言い忘れたが」
藤四郎がすっとぼけた風に言う。

「……なに？」
とても嫌な予感がする。
「ワシの後を継ぐということは、この神谷流を継ぐということ。しかし、神谷流の『か』の字も知らんお前に名だけ継がせても外聞が悪いので、師範代に婿入りしてもらおうと思う」
「ムコイリ……？」
「神谷先生、馨は帰国子女なので、その日本語は分かっていないと思います」
「フン、外国育ちめ。つまり、小次郎君に負けたら、お前は師範代と結婚する、ということじゃ」
「……ハイ？」
「ちなみに、師範代はいま高広ひとりしかおらん。苦労せずにイケメンの婿まで手に入る、ビーッグチャンス！　このウェーブに乗らない手はないぞ」
「ハァ!?　なについでにお得なクーポンおつけしときますねー、みたいなこと言ってんの!?　お得かどうかは消費者が決めるんじゃ、ボケェ！」
「なんじゃと!?　倉敷のヒュー・グラントと呼ばれているこやつの、どこが気に

入らん!?」
「いえ、呼ばれてません、先生……」
「ちなみに、ワシは倉敷のジェラール・フィリップと呼ばれて久しい！」
「そんなん、聞いとらんわ！　顔の綺麗な男は好みじゃないって何度も言ってるだろーがあああっ！」
「そんなん、初めて聞いたわー、ボケェえええ！」
どんどん低次元の争いになりつつあるが、シャウトのシンクロの仕方といい、これは血のなせる技としか思えない。
「くぉら、そこの師範代！　お前もなんか言わんか！」
沙龍に言葉を向けられた師範代は、「早く終わんないかな」という表情で、淡々と答える。
「自分は神谷先生のお孫さんなら誰であろうと構いませんよ。まぁ、これがキツネの嫁さんだったら、ちょっと悩みますが。それでも、神谷先生がそうせよと仰るなら、断る余地はないですね」
「アーホーかー！　キツネだろうがタヌキだろうが、そこは全力で断れよ！　し

かも、なんだその微妙に失礼な物言いは！」
高広の手から、秀光を引ったくるようにして奪うと、千春のほうに放り投げた。
千春は、器用にそれを左手でキャッチする。
「私は遺産は要らないし、後を継ぐつもりもない！　結婚するのも嫌だ！　勝っても負けても私に不利っていう、こんな勝負は無効だ！　江田弁護士を呼んでこいっての！」
「無駄じゃ。江田はワシの言うことしか聞かん」
「……うがっ！」
「遺産もらうのはいやだ。結婚するのはいやだ。いやだいやだで、この世知辛い渡世、生きていけると思うなぁあああっ！」
キーキー喚く藤四郎と沙龍をしばらく放置し、ふたりともの息が切れたあたりで、
「諦めろよ、往生際が悪いな」
木佐がため息をつきながら言った。

（キサさんも、どういうつもりなのさ！）
ギッと睨む。
自分たちが真剣でやりあったら、怪我人が出るのではないか、と、沙龍は言いたいのだ。
しかし、木佐はそんなヘマはしないつもりでいる。自信があるのだ。自分に有利なこの場、小さい頃から慣れ親しんだ、手足のように扱える真剣。沙龍に負けるはずはない、と思っている。
（確かに、同じ条件で同じ武器で斬り合いをするなら、キサさんのほうが有利に決まってる……）
ふと視線を感じて千春を見ると、不安そうな顔を隠しきれていないが、なにか言いたげに瞳が揺れていた。
なんだろう。
それに気付かない振りをして、千春のそばまで歩いて行く。
自然な動作で秀光を受け取って、その場で少し確認するように柄の部分を触ったり、眺めたりする。

が、結局、秀光は千春の手に戻したのだ。
「やっぱり、これは使わない」
「……いいのか？　丸腰で小次郎君の相手が出来るのか？」
藤四郎が後ろから声をかけた。
「私が一番得意なのは、無手なんだよ。……あ、ミオちゃん、輪ゴム持ってる？」
千春の隣でやはり不安そうな顔をしているミオに聞くと、慌ててエプロンのポケットをごそごそと探して、いくつか出てきたものを渡してくれた。それで髪を結ぶ。
本来の立ち位置に戻った。
そして、ちょっと気が変わった、とでも言うように、
「じーちゃん、勝負は、相手の動きを封じた時点で勝ちでいいのか？」
「ウム」
「分かった。この勝負、受けてやる」
スッと武当拳の構えを取る。

木佐もそれを見て、目を細め、腰を落とした。
「じーちゃん、合図を頼む」
頷いた藤四郎がスッと右手をあげた。
「時間無制限の一本勝負、……始め！」
数秒睨み合った。
木佐は舌打ちしたい気分だ。
沙龍が最初に立っていた場所なら、かろうじて木佐の抜刀からの一撃が届く距離だったのに、いまは少し遠くなってしまった。
立ち位置を変えるために、沙龍はわざと千春のところまで移動したのだろう。
それに気付くのが遅れた。
「……」
届かないなら、間合いを詰めて、近付くしかない。
が、そう簡単に距離を縮めさせてくれるはずもない。
腰に差した一文字助宗は二尺三寸（約七十センチ）。これを抜き放ち、相手の懐まで届かせるためには、踏み込みのときかなり無理をしなければならない。

沙龍は視線を木佐に向けたまま、藤四郎に話しかけた。
「じーちゃん、分かってるとは思うが、私のは我流の実践技だ。本来、こういう場で、披露するような類のものじゃないんだよね」
「ウム。ならば、小次郎君を殺る気でやれ」
「それができないから、いろいろ苦労してんじゃん……」
と、力を抜くような仕草をする。木佐に貼り付けていた視線も、一瞬、藤四郎に向けた。
その油断を見逃さず、木佐がわずかに踏み込んだ。
ただ、それすら、沙龍の計算だったとすれば――。
沙龍は、自分の呼吸に敵を引きずり込んだだけである。
「……っ!?」
木佐は柄にかけた右手をそれ以上動かすことはできなかった。気付いたときには、沙龍が正面に立っていて、眉間を人差し指で軽く突かれていた。銃を真似たその指から放たれた輪ゴムがパシッと木佐の眉間を撃つ。
「痛……っ？」

「はい、終わり」
千春は思わず微笑んで、拍手していた。
「……な、なにが起こったんです？」
ミオにはいまの沙龍の動きは見えていない。
「……」
「……」
藤四郎も、高広も、半分口を開けたまま、呆然と動けないでいる。
「じーちゃん？」
沙龍が判定を促した。
「ウウム……。馨の反則勝ち、じゃな」
「でも、勝ちは勝ちでしょ」
「ウウム……」
沙龍のこの瞬間移動並みの速さについては、本人は「そう見えるだけ」と後に言っていたが、元々の速さもなければできない技である。
呼吸と、視線と、わずかな体の動きで相手の虚をつき、時間を感じさせない動

作に仕立て上げるのだ。
その考え方は、日本の武道の精神とはかけ離れている。むしろ、マジックに通じるものがあった。相手の気を逸らし、腕時計すら本人の気付かぬうちに外して奪ってしまう。そんなマジックの技に似ている。
千春は、沙龍と視線を合わせたあのとき、「なにか仕掛けをしないと所長には勝てませんよ」と言ったのだ。それを、沙龍もまた理解した。だから、時間稼ぎと、立ち位置をずらすために、千春のそばまで歩いていったのである。
藤四郎の言う通り、確かにこれは「反則」だ。
大いなる反則勝ち。
「僕の負けだ。馨が結構策士だってこと、忘れてたよ」
フフッ、と木佐の顔から笑みがこぼれた。
悔しがってはいないようだ。
「すみません、神谷先生。後継ぎの件は諦めてください。まぁ、どっちにしろ、馨には無理ですよ」
沙龍の信念と、日本の武道が掲げる美学は、永遠に重ならないのだ。

それは、今の勝負を見ても明らかだろう。
「ウウム……」
藤四郎はだいぶ悔しがっていた。

17　わたしを離さないで

神谷邸滞在、八日目。

山登り仕事も終わったし、遺産の話も決着がついたので、あとは心置きなく夏休みを満喫すればいいだけの話である。

みんなでどこかに遊びに行こう、と提案した沙龍に、木佐が「じゃあ海にでも行くか」と言ったのは、道場での仕返しの意味も多少あった。

多数決ですぐに決定し、話の流れで、祐介少年やミオちゃんも一緒に行くことになった。

「あ、でも、千春さんはその腕じゃ泳げませんね……」

ミオちゃんが気遣わしげに言う。

「大丈夫ですよ。みなさんの荷物番をしながら昼寝でもしてますから」

そこでにっこり営業用スマイルを見せるところがあざとい。

「わ、わたしも一緒に荷物番するよ……」

沙龍が青くなって言っているが、木佐に部屋の隅まで蹴り飛ばされた。
そして、ふたりでこそこそ話す。
「キミは、一少女の恋を応援しようという気はないのかね」
「な、なんなの、その口ぶり。い、いいじゃん、春ちゃんはどうせその気ないんだし、私は水着持ってきてないし」
水着など買ったことはないのだ。
高校のときは学校指定のスクール水着を持っていたが、水泳の授業は高三のカリキュラムにはなかったので、結局、いちども使うことはなかった。おかげで、周囲にはカナヅチであることがバレずに済んだ。
「水着、ね……」
木佐が、勝ち誇ったような顔をしている。
「な、なに……？」
ポン、と沙龍に渡されたのはデパートの紙包みだった。
「夏のボーナス、現物支給」
本気か冗談か、そんなことを言っている。

「ハイ……？」
開けてみると、嫌な予感通り、水着が入っていた。
セパレートタイプだが、色気は控えめだ。カジュアルっぽさが前面に押し出されたような水着で、もしかしたら子供用なのではないかと疑う。
ただ、センスは悪くはない。木佐が選んだのだろうか。
しかし、いったい、いつ買ったのだろう。
「……百歩譲って着てもいいけど、海には入らないからね」
焼きもろこしでも食べて過ごそう。このときはそう思ったのだ。
「それでいいよ」
木佐も、案外、あっさり了承する。
しかし、当然ながら、そんなものは行ってしまえばどうとでもなる、と木佐は思っているのだ。実際、どうとでもなったわけだが――。
翌日、大きなバスケットにみんなのお弁当を詰めながらミオちゃんは浮き浮きしている。
それを手伝いに朝早く神谷邸に現れた祐ちゃんも、なぜか浮き浮きしている。

沙龍はひとり浮かない顔をしていた。

白い砂浜、青い海、そして、燃える太陽――。

舞台装置はすべて揃っている。

だが、ここで始まるのはひと夏の恋ではなく、地獄のサバイバル耐久レッスンである。さきほどから、沙美海岸には、この世のものとは思えぬ絶叫が響いていた。

「ぎゃあああああ、春ちゃん、助けてぇえええええ！　キサさんに殺されるううううッ！」

「って言われても……」

木佐に引きずられていく沙龍を、手を振って見送るしかない。

「溺れないためのノウハウを教えてやるって言ってるんだ。まったく、往生際が悪いな」

「そんなこと言って、絶対、足のつかないところで手を離すんだ！　そうに決

まってる！　春ちゃあああん！　見てないで、助けろおおおッ！」
「がんばってー」
この裏切りものぉーーーっ！　と叫ぶ声は、そのうち、波にのまれた。
「……馨さんって、泳げないんですか？」
準備体操をしている祐介が聞いてきた。
「自分も知らなかったんですが、そうみたいですね」
「へぇ。内陸育ちなのかな」
「……」
なるほど、と千春は思った。
祐介の言に、ではない。
沙龍が泳げないのは、どうやら、本人の関知しないところに理由があるようだ。
ならば、ここでいくら木佐がスパルタに教え込んでも無駄だろう。
「……まるで、人魚姫のようだな」
そんな感想が漏れる。

「え？　いま、なんて？」
「いえ……、なんでもないです」
自分がひどくロマンチストのように思えて、苦笑した。
あの童話を最初に読んだのはいつの頃だっただろう。孤児院の小さな図書室に何冊か子供向けの本があって、そこに人魚の表紙の絵本があったのは覚えている。
人間の王子に恋をした人魚姫の物語。
彼女は、声を失い、二本の足を得るも、結局、一世一代の恋は成就しない。
姉たちのせっかくの献身も無にして、最後、人魚姫は海の泡となって消えてしまう――。
誰も救われない、悲しい結末である。
そんな悲恋の主人公と、沙龍が、重なるところはなにひとつないのだが、かつては自由に水中で活動できる能力を持っていたのに、あることの代償としてその能力を失った、という点は同じだ、と思えた。
千春はそのあたりを詮索するつもりはなかった。

気まぐれな地霊の言うことなので、そもそも本当かどうかも怪しい。
ただ、「泳げないこと」は、それほどのハンデではないように思える。
カナヅチの人間はたくさん居るし、なにより、沙龍のそばには常に水神の化身のような木佐小次郎が居るのだ。あのふたりは水のように切っても切れない縁で結ばれているのだから、心配は要らないだろう。
……と、思っていたのだが。十メートル先で行われている特訓を目の当たりにして、千春は少し思い直した。
「ぎゃあああ、やめてえええ、ホントに泳げないんだってば！　死ぬの！　水に入ったら死ぬ病気なの！」
沙龍が、木佐の頭のあたりまでよじ登って、空気を確保する。その様は、パニックになっている猫のようだ。
既に、足の立たない場所まで連れて行かれているのだ。ここで、手を離したら確実に溺れ死ぬ。
ちなみに、木佐はまだ立っていられる高さである。
「落ち着け、泳ぐ必要はないんだ。口と鼻さえ水の上に出ていれば、決して溺れ

ることはない」
「そうは言っても、ズブズブ沈むんだよ！　なぜか、沈むの！　何度やってもダメだったんだもん！」
「……？　もしかして、泳ぎを習ったことあるのか？」
「あるよ！　上海では何回かやってみたんだよ。でも、結局、浮くことすらできなかったんだって！」
「……そうか」
沙龍は木佐にしがみついているので、傍目には波乗りでもしながらイチャイチャしている恋人同士に見えなくもない。
しかし、沙龍の表情は相当こわばっているし、いまにも泣きそうである。
「だから、離さないでね。絶対、離さないでね。沈むから！」
「……」
木佐はなにかを考えている。
いや、考える振りをしてよからぬことを計画している、といったほうがいい。
「まぁ、そう心配するな」

「う、うん？」
「人間の身体は浮くようにできている」
「いや、だから……」
「それに、溺死寸前になったら引き上げてやるさ」
「な……」
沙龍の小さな体を引き剥がして、ポイッと海中に放り込む。
「ぎゃあああああごぶがぼっ」
波打ち際でその様子を見ていた千春が、静かに言った。
「すいません、祐介さん、コレ、持っていってあげてくれませんか？」
さっき一生懸命膨らませた浮き輪である。
せいぜい、自分にできるのはそれくらいだろう。

翌日は、新倉敷の駅に木佐小次郎の姿がある。
事務所が気になると言って、ひとりで東京に戻ることにしたのだ。

結局、貰うものは貰ったのでとっととずらかろう――、ということなのかもしれない。
見送りには沙龍だけが来ていた。
相変わらず閑散とした駅である。そろそろお盆だからなのか、人がほとんど居ない。
「あのさ、一昨日、キサさんが道場で言ったこと……」
改札の手前まで来て、沙龍はやっとその話をすることができた。
「ああ、あれは、本気で言ったんじゃない。気にするな」
どの発言のことか、木佐も分かっているようだ。
岡山で療養したほうがいい、と言ったあの言葉だ。
「……そう、かな。本音に聞こえたけど……」
「……まぁ、半分はな」
手にした、綺麗な紫色の刀袋を見上げて、ため息をつく。
これには、藤四郎に貰った一文字助宗が入っている。
守り刀というのは、これのことをいうのではないだろうか。木佐はそんな風に

感じている。
もしくは、この一文字助宗を託された自分自身のことを。
「私、やっぱり、こっちに残ったほうがいいのかな？」
沙龍がこんな物言いをしたのは初めてだった。
苛立ちを感じる。だから、突き放すように言った。
「それは、馨が決めることだ」
「うん、そうなんだけど……」
「……」
「……」
そろそろ、ホームに移動しなければならない。
木佐が腕時計を見て言った。
「東京に帰ってくるつもりなら、ひとつ、約束してくれないか」
「ん……？」
「なるべくでいいから、僕に隠し事はしないでくれ。心配をかけたくないっていう気持ちは分かる。でも、馨がなにも話してくれないと、僕は余計に心配して、

胃に穴が開く」
「開いたの!?」
「いや、いまにも開きそうって話だ」
「あ、そう……」
なんだ、脅かすなよ、と沙龍は思った。
が、もしかしたら本当に開く寸前なのかもしれない。
(心配させて、心配して……、なんか、おかしい)
自分たちは、心配のし合いをしているだけではないか。
その状態が心地よいのと、鬱陶しいのと、いまは半々になっている。
「あ、そうだ。松木さんに一日一回ネコたちの様子を見に行ってもらってる。
馨からもお礼しておいてくれ」
「うん、メールしとく」
「じゃ、先に戻ってるからな」
「私は八月いっぱいまでこっちに居ることにする。じーちゃんに聞き出さなきゃいけないことがあるから」

それが終われば東京に戻る、という言葉は省略する。
木佐は軽く刀袋を振って、行ってしまった。
そうだ。
あとひとつ、やることをやるまでは、帰れないのだ。

18　斎藤姓の理由

お盆の期間に入ると、また一段と暑くなった。

朝からセミの大合唱が聞こえる。

しかし、やはり暑さに不快感がない。これは緑のせいか、と沙龍は気付いた。周囲の木々が暑さを吸い取ってくれているように感じる。

昨日、木佐が東京に帰ってしまったので、さすがに千春の部屋で寝るわけにもいかなくなり、自分の部屋に戻った。それから一晩経った朝である。

そういえば、このお屋敷で、ひとりで静かに起きるのは初めてである。初日は藤四郎の朝駆けがあったし、それ以降はずっと千春の部屋で修学旅行状態だったのだ。

沙龍は庭に続くよろい戸を開けて、遠景の緑を見ている。

右側に見えている稜線は、この前行った『龍王山』ではないだろうか。

いま気付いたが、神谷邸から見える距離なのだ。

さすがに、山頂の石碑はここからは見えないが、この風景は確実に両親ともども見たはずである。

「……」

結局、岡山に二十四ある「りゅうおうざん」のうち、甲斐弥太郎が用があったのは、倉敷市内のひとつだけ。

山頂に『龍王宮』のある、あの龍王山である。

（なぜ、あそこだったんだろう？　『龍王宮』のある、あの山でなければ『龍王』は喚べなかった、ということなのかな……）

では、沙龍がずっと感じていた既視感の正体は？

甲斐弥太郎の記憶なのか？

それとも、神谷百合子の？

結局、その答えは半分も出ていない。

（でも、前進はした、かな……）

沙龍はそう思っている。

少なくとも、甲斐弥太郎が岡山に来た目的は分かったし、母親の顔も分かった

のだ。
もう少し藤四郎の癖が分かれば、彼からはなにか引き出せることがあるかもしれない。

今日は迎え火をする日ということで、朝からスガさんがいつもより少し忙しく動いている。
ご先祖様を大事にする神谷藤四郎は、居間で精霊馬（しょうりょううま）を作っていた。
「なにこれー？」
そこに、沙龍が現れ、興味深そうに割り箸が刺さったナスを見つめている。
「なんじゃ、お前、お盆にこういうのを見たことも作ったこともないのか」
「ないよ。〝外国育ち〟だもん」
「そうじゃったのう……」
千春も現れて、いつの間にか沙龍の隣に座ってキュウリを手にしている。
ふたりとも、物珍しい工作を見る子供のようだ。

「千春君も初めて見るのか」
「テレビとかで見たことはあるんですけど。実物は初めて見ました」
「いまどきの若者はお盆もやらんのか。ご先祖様が嘆いておるぞ」
「じーちゃん」
沙龍が短く窘(たしな)める。
藤四郎には伝えていなかった自分のミスなのだが、孤児の千春にそれを言っても響きはしない。
「春ちゃんは孤児院育ちなんだよ」
「そうなんです。自分は両親が誰かも分からないので、ご先祖様もお迎えしようがないんですよね」
千春は慣れているので、軽く受け流した。
「……そうか、すまんのう。じゃあ、一緒に作ってくれるか」
さすがに年の功だけあって、藤四郎もうまく切り返していた。
「これはのう、霊魂が乗るための乗り物なのだ。馬や牛に見立てて作るのじゃ。ちなみに、これがワシの傑作、赤兎馬(せきとば)も真っ青のお馬さんじゃ！」

自信満々に、今朝から作っていたキュウリを指す。
が、それは首が微妙に長すぎてキリンのように見えた。あまり器用な性質ではないらしい。
「え、これって、うま？　馬なの？　見えないじゃん!?　馬ってのは、もっとこう……、貸して！」
早速、果物ナイフを借りてキュウリを切り刻んでみるが、沙龍とてあまり器用ではない。
よく分からない物体が出来上がるのは容易に想像できる。
なにせ、高校のときの美術は「2」だったのだ。芸術方面はとことんセンスがないのである。
「乗り物ならなんでもよいのじゃ。好きなものを作ってみい」
「あ、なんでもいいんですか。じゃあ……」
千春は、左手一本でカッターナイフを駆使し、なにやら細かいものを作り始める。
「ホウ、千春君は器用じゃのー」

そりゃ、うちのエースだからね！　と沙龍が言うと、なぜお前が自慢するのじゃ、と藤四郎。

さらに、カバを作れとは言ってないぞ、と藤四郎が言えば、カバじゃない、これは私がむかし乗ってたカッコイイ駿馬だ、と沙龍は反論する。

もう二十年くらい一緒に暮らしている祖父孫のようなやり取りだ。互いに遠慮がない。

そして、千春はというと、

「……」

やはりこういうときでも、黙々と作業するのである。

既に、手元には車輪のようなものができあがっていた。

右手はギプスで固めたままだが、指先は少し出ているので、支えるくらいなら使える。

「これに乗ってご先祖様たちが帰ってくるの？」

沙龍がふたつめの精霊馬を作りながら言う。

「うむ。なるべく早く帰ってこれるように、こうして馬を用意してやるのだ。逆

に、あの世に戻るときはなるべく遅いほうがいいので、こっちのナスで牛を作るわけじゃ」
「へー。じゃあ、馬に乗れる人じゃないとダメだね。お母さんは、馬に乗れるの？」
「ううむ……。乗馬は何回かしたはずだが……。百合子はどうかのう。ちょっと変わり者だったからのう。家を嫌って出て行ったのだから、戻ってはこないかもしれんのう」
諦めの心境なのか、藤四郎の口調は決して重くはない。
「……そんなことないですよ」
そう言ったのは千春である。
「……？」
藤四郎が妙な顔を向けるので、慌てて言い直す。
「家を嫌って出て行ったわけじゃないと思います」
根拠のない、老人を慰めるためだけの優しい言葉だろう、と藤四郎は思った。
「そうだといいんだが。ワシもそろそろ後悔するのに飽きたからのう」

「後悔って？」
沙龍が聞く。
「ウム……」
渋い顔をして、しかし、藤四郎は二の句を告げようとはしない。
そのうちに、千春のハーレーダビッドソンが完成した。かなり細部まで作りこんである。
「うむ、確かにこれなら早そうじゃ。しかし、見事じゃのうー」
「四気筒にしてみました」
「無駄に凝ってる……」
「キャーメラに撮っておかねば。お、スガさん、うちに、キャーメラなかったかのう？　いやいや、お菓子じゃなくて。ほれ、写真機のことじゃ」
藤四郎はカメラを探しにどこかへ行ってしまった。
夕方になって、玄関の前でスガさんが用意した素焼きのお皿に、藤四郎が火を

炊いた。
特に見張っている必要もないといわれたが、しばらく、沙龍はその火を見つめていた。
ユラユラと揺れる炎は、ご先祖の霊が帰ってくるときの目印になるのだという。
傍らには、今朝作ったキュウリの馬やバイクが並べられている。
千春が、いつの間にかそばに立っていた。
「結局、ずっと付き合わせちゃってるね。そろそろ、東京に戻りたいんじゃない？」
そう言うと、千春は首を振る。
「そんなことないですよ。タダでこんなお屋敷に泊まれて、おまけに豪勢な料理も出てくるし。得している気分です」
「確かに魚料理は美味しいよね」
ちょうど、板前さんが荷物を抱えて玄関前を通りすがったので、ニカッと笑いながら言ってやった。

三十前後の偉丈夫で、普段は駅前の旅館で働いているそうだが、こうして、神谷邸に呼ばれればすぐやって来る。
彼も、ニッと白い歯を見せながら、
「今日も海の幸、いっぱい持ってきましたぜ。お嬢さん」
「うん、全部食べるよ！」
勝手口のほうへ消えた。
「正式なお盆ってこうやるんですね……」
千春が、迎え火の炎を見つめながら言った。
木片がパチパチと音を立てて燃えている。
「なんか、貴重な体験をさせてもらった感じです。部外者なのに」
「春ちゃんは、こういうの、本当に信じてるの？」
「え？」
「霊魂の存在とか。死んだ人たちは魂の状態で戻ってくるとか。日本人はみんな心のどこかでそういうのを信じてるのかなー、って」
「うーん、どうでしょう。『そうだったらいいな』っていう純粋な想いなんじゃ

ないか、って気はしますけど」
「想い、か……。でも、じーちゃんの話だと古いご先祖様もみんな帰ってくるって話なんだけど、そんな何代も前のご先祖なんて、もう転生してるんじゃ？　って気がするんだよね」
「転生、ですか？　仏教のいう輪廻転生？」
「うん。日本と中国ではところどころ解釈は違うかもしれないけど、たぶん、中身はそれほど変わらないと思う」
「馨さんは、輪廻転生って信じてるんですか？」
「おや。質問が逆転したね。そうだなー。それも、春ちゃんと同じような答え方になっちゃうけど、『あればいいな』とは思ってるよ」
「そうなんですか？　でも、中国道教の目的って、輪廻は苦しいものだから仙人になって千年も万年も生きよう、っていうものじゃなかったです？」
「へぇ、詳しいんだね？」
「まぁ、大学に潜り込んで、宗教学とか、思想史とか、勉強してましたから」
「そうなんだ。物好きだねぇ」

と、言われて、苦笑する。
確かに、変わり者だと自分でも思う。
単位も資格も貰えないのに、自分の好奇心や探究心のためだけに大学に通っていたのだ。
今でもたまに聴講生のような振りをして、気になる教授の講義をこっそり聞きに行ったりしている。
「私は別に道教家でもなんでもないからなー。親しかった人が死んでしまって、でも、また会えるなら会いたい、って単純に思うよ」
「容姿はまったく違っても？」
「だって、魂魄（こんぱく）が同じなら、どこかに面影は残ってるもんじゃない？　まぁ、実際そういう人には会ったことないから、分かんないけどさ」
「そうですね……」
「春ちゃんもさ、会いたい人が、居るでしょ……？」
「そうですね……」
記号のような相槌を打って、軽く流そうとしたが、無理だった。

「……」

千春は気付いてしまったのだ。

自分は、家族が欲しいのだ、ということに。

東新宿探偵社に入社して一年、木佐や沙龍が家族に近い存在になりつつあっても、ふたりの関係が少し特殊なので、そこに入りきることができない。

性格的に、一歩も二歩も引いてしまうのだ。

それは時間がたてば解決するのかもしれないが、あのふたりはやがて遠いところに行くことになる、と地霊から教えられた。

自分はおそらく、それについていくことはできないだろう。

せっかく家族になってくれそうな人たちに出会えたのに。

また別れを経験しなければならないなんて。

ずっと一緒に居てくれる家族はどうやって探せばいいのか。

自分の望みはどうやったら叶うのか。

結婚という制度に参加できない以上、千春は半分諦めてもいる。

養子縁組というものもあるが、自分が誰かを養えるほど精神的に大人になれて

いるとも思えないのだ。
「龍王山の山頂で、甲斐弥太郎さんは自分と同じ、無性愛者だった、って話をしましたよね？」
「うん、覚えてる」
「自分には、弥太郎さんの心情がすごくよく分かります。彼は、子供が要らなかったわけじゃないんです」
「え、でも……、前に、春ちゃん、言ってたよね？　エーセクは、子孫を残すことに執着しない、あるいは望まない人間のことだって」
「そうです。でも、その説明は言葉が足りてませんでした。自分が、生物としての本能に欠けているのは確かです。でも、だからって、寂しくないわけじゃないんですよ。ひとりで生きていけるほど強くもないんです。そして、人生の孤独を慰めるための最良の方法は、自分の分身を作ることだってことは、自分にも分かります」
「はるちゃ……」
なんだか、別人のように見えた。

千春がこんな風に滔々と語るなんて。
「でも、ちょっと、生々しい話ですが、子供を持つためにはしかるべき行為をしなきゃいけないわけですよね？　そこが我々の最大のネックなんです。まぁ、これは無性愛者でも人によってだいぶ個人差があると思うんですが、自分は、たとえば『殺すぞ』って脅されたら性交もできると思います。というか、しますね。でも、進んでしたいとは思わないんですよ。あ、ちなみに、童貞ではないです。何回か経験があるんですけど、本当に、なんとも感じませんでしたね」
「……そ、そうなんだ」
「だから、セックスしなきゃいけないなら子供は要らない、ってなるんです。決して、子供が欲しくないわけじゃないんです。少なくとも、自分や弥太郎さんはそうです」
「……えーと」
どう反応していいか分からず、こめかみを押さえた。
ここからは自分の言葉ではないんですが、と前置きして、千春は説明を続けた。

「そして、もうひとつ、弥太郎さんには子供を作りたくても、作ってはいけない、もっと大きな理由があったんです」
「大きな理由って？」
「彼は、父方の斎藤という名で生きようとしていた時期があるそうです」
「『斎藤新助』だね？」
頷いて続ける。
「早死にした父親の名をそのまま名乗ることにしたようです。実際、弟たちにとって、長兄の彼は父親のような存在だったようですね」
「そうなんだ」
「斎藤を名乗って、ずっと独身を貫き、子供を作ろうとしなかったのは、母方の甲斐家の血のせいだそうです。いわく、呪われている、と。自分の子供も間違いなく、甲斐家の呪いを受けることになるだろうから、と。だから、自分ひとりでその呪いを終わらせたかったそうです」
「〝呪い〟……？」
「たぶん、馨さんが龍王山の山頂で言っていた、日に日に衰弱していくという、

病気のことだと思います。しかし、なんらかの事情があって、彼は斎藤を名乗ることをやめた。京都から岡山に来るまでの間に、甲斐に名を戻しています。その理由は、分からないそうです」

「確かに、京都の黒田家では斎藤と名乗っていたらしいけど……」

なぜか、岡山に来てからはずっと甲斐で通しているのだ。

なにがあったのだろう。

京都から岡山に移動するまでの間に、彼の固い決意がひっくり返されるようなことがあった、ということか。

知らなかった事実を知った、とか？

（いや、違う……！　黒田家でキサさんのお兄ちゃんに会ったからだ……！）

天啓のように気付いた。当時、まだ小学校に入る前の、黒田家の跡取りである。

甲斐弥太郎は、その子を見て、なにかを悟ったのだ。

（やっぱりそこが鍵なんだ……！）

確か、幼くしてなくなった木佐の兄の名は、黒田きよはる……。

（きよはる……、清春！　……『春』!?）
沙龍は半分口を開けたまま、千春を見つめた。
千春はかすかに微笑んで頷いた。まるで、沙龍の思考が読めるかのように。
もはや、偶然ではあるまい。『春』の名は、沙龍の助けになってくれる人に付けられるのだ。しかし、黒田清春は不慮の死を遂げ、彼が担うはずだった役割は、木佐小次郎がそっくりそのまま受け継ぐことになったのだろう。
「弥太郎さんにとって、甲斐を名乗るということは、人格も少し変わってしまうくらい大きなことなんだそうです。ともすれば、斎藤として生きてきた記憶も薄れるくらいの」
「記憶も……？」
「似たようなことが、解離性同一性障害――いわゆる多重人格のことですが――でも見られますね。この場合は完全に『別人』になっちゃうんですけど」
「春ちゃんも、ちょっと二重人格ぽいよね？」
「自分のは単なる営業用スイッチですよ」
それ、背中にあるんだよね？　と言うと、千春も笑っていた。

「そういえば、碧姐々が言ってたの、思い出したよ。甲斐弥太郎は東京にも京都にも行ったことがないって言ってたらしいんだけど、実際にはそんなことはないんだよね。しっかり、東京にも京都にも行ってる。だから、あの発言は、嘘をついたわけじゃなくて、斎藤新助として行動した記憶がなくなってたってことなのかもしれない」

「そうかもしれませんね……」

そこで、千春が少し青い顔をしているのに気付いた。

「春ちゃん、もういいよ。疲れるでしょ？」

「まだ大丈夫ですよ」

「というより、春ちゃんじゃなくて、地霊のほうに言わないとね。あんまりこの人を酷使しないで。なんだったら、マッキーを呼ぶから」

「松木さんじゃ、霊力強すぎて、地霊のほうが引っ込んじゃいますよ」

「なんなの。もう。ややこしいなぁ……」

「フフッ、謝ってますよ」

しばらくは、ふたりとも黙ったまま、迎え火を見つめていた。

そろそろ陽も落ちてきた頃になって、沙龍が言った。
「春ちゃんはさ、自分の両親のこと、どう思ってる？」
「そうですね……。自分はそういう感情が希薄なんだと思うんですけど、特になにもないというのが正直なところですね」
「そっか……。私も同じなんだよね。恨みも、感謝もないんだ。でも、生きていてよかった、と思ったことならある。高校のときにさ、キサさんに出会ってまだ間もない頃、あの人、なぜか茶碗蒸しを作ってくれたんだよね。それがすんごく美味しくてさ。まだ友達にもなっていなかったんだけど、ああ、私、この人に会うために東京に来たんだなーって。上海で、自棄になって、銃撃戦のまっただなかに飛び込まなくてよかったなーって思ったんだ」
自殺願望は今も昔もないのだが、上海時代はかなり荒んでいたので、そういう心境になったことは何度かあった。
『死にたい』ではなく、『もうどうでもいいや』である。
「自分も、生きていてよかったと思ったことはありますね」
千春が少し目を細めて言った。

「そうなの？　いつごろ？」
「大学で、なるべく目立たないようにしていたのに、やけに目立つ美少年に話しかけられたときと、その一ヶ月後に、初対面なのに『春ちゃん』って呼んでくれる人に会ったときですね」
「そ、そうなんだ？」
「そんなふうに呼んでくれる人、いままでいなかったですから」
そうなのだ。
だから、自分は岡山まで着いて来て沙龍にずっと付き合っているのだ、と千春は思った。

19　墓参り

お盆シーズン真っ只中に、藤四郎とふたりで出掛ける機会があった。墓参りに行くのでついて来い、というのだ。

千春にそれを告げると「行ってらっしゃい」と一言いわれた。

彼は、部屋でひとり、左手を使う練習をしていたところだった。ごく普通の日常の動作から、マジックの特殊な動きまで、よく飽きもせずに毎日続くものだと思う。

座卓に散らばっているトランプは、マジック用の特殊なカードであることは沙龍も知っている。

なんとなくそこから一枚のカードを引いてみた。

沙龍はたまに、カードマジックの練習相手をさせられたりするので、引いたカードに対する千春の口上もだいたい知っている。

スペードのカードなら「おや、強いカードを引きましたね」、ハートなら「恋

愛を示すカードですね。いま、いい時期ですか？」、ダイヤだと「経済と金銭のカードといわれてます」、クラブの場合は「実は四つの中では一番幸運を示すカードなんですよ」。

千春はマジシャンであって、占い師ではないので、当たり障りのないことしか言わない。

スペードなどは本来、凶兆とされるが、そこには触れない、というわけだ。

「……」

特に反応は見せず、元あった場所にカードを戻す。

「じゃあ行って来る」

沙龍が去ったあと、千春はそのカードを裏返して見た。

（スペードの４……）

トランプ占いでは、それがなにを示すのか、沙龍は理解していただろうか。

病気、事故、隠遁、墓――。

いい意味はいっさいない。

ただ、逆位置なら多少意味は違ってくる。そこらへんはタロットの領域だ。

しかし、墓参りに行くのに、墓のカードを引くのなら、ある意味当然だろう、と千春は思った。

この地で、沙龍がトラブルに見舞われるはずはないのだ。

自分用の客間に戻った沙龍は、荷物をひっくり返してみるも、たいした服を持ってきていない。困ったときのスガさんに話してみると、「じゃあ、百合子お嬢さんの服、着てみます？」と言われた。

百合子の部屋で、昭和な白いワンピースをだされて戸惑ったものの、それでも、Tシャツに短パンよりはましだろうと思ったので、すっぽりと着てみた。

沙龍には丈が長すぎて、ロングスカートのようになってしまったが、姿見で見る限り、それほどおかしくもない。

「あらあら、やっぱり、こうして見ると似てますねぇ」

あるいは髪が黒ければ、こうして同じ服を着ている以上、似ていると思えるのかもしれない。

藤四郎は、沙龍の格好を見ても特になにも言わなかった。それが百合子のワンピースだと気付いていない可能性もある。

墓地までは歩いていける距離だという。東京では信じられない話だ。
途中、何度かすれ違うご近所さんたちに声をかけられた。
「あら、センセ、お孫さんとお出かけ？」
「まぁまぁ、百合子さんの娘さんですってー？」
沙龍が藤四郎の孫で、神谷家に滞在しているということは既に知れ渡っているらしい。田舎の情報網は侮れない。
「……あのさ、じーちゃん」
沙龍は倉敷に来てからずっと感じているこの奇妙さを、素直に口にしてみることにした。
「普通、こういう田舎だと、駆け落ちした娘の子供がひとりで戻ってくれば、もっと好奇の目が向けられたり、影でヒソヒソ言われたりするもんじゃないの？」
「……フム？」
着流し姿の藤四郎は、時代劇から抜け出てきたような感じである。
沙龍のワンピースとのちぐはぐ感は否めない。

「まぁ、そうかもしれんのう」
この老人特有の海千山千のやり取りに丸め込まれるほど、沙龍も呑気ではない。
「なのに、そういう奇異な視線が一切ない。私はどこに行っても歓迎される。まぁ、じーちゃんの人徳なのかもしれないけど、ちょっと不思議な感じがする」
「そうか」
「もしかしたら、ご近所さんたちは『駆け落ち』だとは思ってないんじゃないの？」
「……」
図星だったようで、藤四郎が黙った。
「甲斐弥太郎は、倉敷のマドンナをかっさらった行きずりの男ではなくて、もっと別の、なんていうか……、尊敬されるような存在だったの？」
「……」
「私のお母さんは神隠しにあったって言ってた人が居たけど、その認識はあながち間違ってないんじゃないかって気もするよ。また、別の人は、百合子さんは竜

王に嫁いだ、なんて言ってた。じーちゃんよりさらに十歳くらいは老けた爺様だったけど」
瀬戸内という特殊な気候がもたらした、竜王信仰。
岡山にやってきた甲斐弥太郎が、なぜ竜王の化身のように思われているのか。
それを否定も肯定もせず、藤四郎は別の話をした。
「お前、歳はいくつだったか？」
「十九」
「若すぎるな。その歳でなにを見てきた」
「……なにって言われてもね。いろいろ見なくていいものも見たかもしれないけど、私にとっては日常だったからね。そんなに大したことでもない」
「そうか……」
話はそこで中断され、歩いて数分のお寺に着いてからは、墓参りの道具を一式借りて、ふたりで黙々と掃除をしたり、お花を添えたりした。
立派な墓石には「神谷家之墓」とだけ彫られてある。
沙龍も見よう見真似で手を合わせ、線香を炊いた。

「百合子は、恐らく、ここにはおらんじゃろう。骨も入ってないしな」
「お母さんの遺骨は、村の外れの墓地に埋葬されていたと思うよ。私も村を出るまでは、毎月、お母さんのお墓参りをしていた」
「そうか。バカオヤジが建てた墓か？」
「たぶん」
とはいえ、よくは知らない。
沙龍にとって母同然だった香林が語ってくれた話によると、弥太郎は百合子が亡くなってからはもう亡霊のようだったという。既に生きる力を亡くしていたのだろう。
お参り用の手桶を寺務所に返すとき、若い妻子が応対してくれた。
子供はまだ歩き始めてそれほど経っていない感じなのだが、つたない言葉で「あいがとーござましたー」などと言っている。檀家さんとのやり取りには慣れているのだろう。
歳を聞くと、二歳とのことだ。
帰り道には、独り言のような言葉が出た。

「私、あの歳までは、甲斐弥太郎と一緒に過ごしていたはずなんだよね……。だけど、なにも覚えてない」
「……」
「じーちゃんは、なにか知ってるんじゃないの？　甲斐弥太郎の正体とか」
背筋を伸ばして歩く藤四郎には、一分の隙もない。
いま、たとえば、悪漢が銃を持って襲ってきたとしても、軽く返り討ちにしてしまうだろう。
銃弾すら撥ね除ける、完成された肉体。そんな風にも見える。
「……具体的にはなにも知らん」
長らく沈黙したあと、藤四郎はそう言った。
そして、長い、長いため息をついた後、自分の私有地だと言っていた場所の石垣に座って、話し始めた。
「あそこに、小学校の校舎が見えるじゃろう」
「うん、白いの？」
藤四郎の指す方向に、鉄筋の古びた建物が見える。

「あれが、百合子の通っていた小学校じゃ。中学も、ここから歩いていけるところにある」
「うん」
「高校と短大はバスで通っていた。まぁ、いずれも、そんなに離れてはいない」
「うん」
「つまり、百合子は、倉敷しか知らんのじゃ。大都市には行ったことはない。そんな世間知らずの娘が、ふらりとやって来た風来坊のような男に、なぜ、ついていこうと思ったのか、ワシにはいまだに分からんのじゃ」
藤四郎は、どこを見ているのか分からぬ目をしていた。
それは、考えて答えの出るようなことではない。そう思って、数十年を過ごしてきたのだろう。諦めや後悔と共に。
「百合子は黙って出て行ったわけではない。甲斐弥太郎と結婚するつもりだ、とハッキリ言った。しかし、ワシが反対したのだ」
「どうして？」
「そうだな。理由は軽く百以上あるが、全部聞くか？」

「いや、上位三つくらいでお願いします」
「そうか……」
残念そうな顔をして続けた。
「普通に好き合った二人なら、相手に多少問題があったとしても、ワシとて反対はしなかったのじゃ。しかし、百合子があやつに惚れているようには見えなかった。甲斐のほうも然り。ただ、お互い、敬意のようなものはあったように思う」
「〝敬意〟……？」
「うまくは言えんが、要するに男女の仲ではなく、息の合った子弟のような……、そういう感じじゃな」
「『相手に多少の問題』ってのは？」
「ウム。甲斐は一見、普通のヤサ男なんじゃが……、お前と同じ『なにか』を抱えていた。それがなんなのか、ワシにはいまこうして再び甲斐の人間を前にしてみても分からんが、ひとつ分かることがあるとすれば……。気を悪くせんでほしいのだが、それは『怪物』としか言いようがない」
「いや、合ってるよ、じーちゃん」

藤四郎は武道を極めた者特有の勘で、弥太郎と沙龍の抱えるものの大きさが分かるのだろう。
具体的になにかは分からずとも、気配は充分察することができる。
それは、黄龍という、桁違いの神獣の力だ。
「その『怪物』の気配は、ワシの見る限り、お前のほうが大きい」
「なるほど……」
本来、男性にしか顕れないという保持者の能力が、なぜ沙龍に顕れたのか。
その理由を明確に知る者は村には居なかったが、長老たちは意味深なことを言っていた。
『偃月ではなく、お前が覚醒したことに意味がある』
幼い沙龍はそんな言葉を聞いた記憶がある。
つまり、彼らにとって、偃月は保険だったのだ。どこまでも勝手な話である。
通常通りなら甲斐家の特殊な遺伝子を持つ男子、つまり、偃月が『保持者』になるはずだったのだが――。
唯一、そのあたりの事情を知っているらしい風林はもうこの世には居ないの

で、真実は分からずじまいである。
「じーちゃんは、その『怪物』を前にして気味悪くないの？」
沙龍は石垣の横に立ったまま、話していた。
この白いワンピースを汚すわけにはいかないからだ。
「この歳になると大抵のことには驚かんわ」
「甲斐弥太郎にもうひとり、子供が居るって知っても？」
「なんじゃと？」
「……まぁ、百合子さんの子じゃないんだけどね。私、異母弟が居るんだ」
「ほ、ほう……？　あの鬼畜色男め、百合子亡き後に、すぐ再婚したということか？　それとも、不倫なのか？」
「んー、色々事情があったらしいよ？　こればかりは、甲斐弥太郎を責めないでやってほしいんだ。彼も不倫したくてしたわけじゃないと思うし、お母さんも承知してたんじゃないかと思う」
「そうか。お前も、難儀だな。その歳で親の不倫にまで理解を示さなければならんとは」

「まぁ、ドライな言い方をすると、一緒に過ごしてないからね。ひとつ屋根の下で飲み食いした記憶でもあれば、複雑な心境にもなるのかもしれないけど」
「ウム……」
藤四郎はスクッと立ち上がって、言った。
「ひとつ、甲斐から聞いていたことがある」
「うん……？」
「甲斐家の人間は、代々短命なのだそうじゃ。あやつは、遺伝的な問題、と言っておった。病気を持っておったようじゃな。だが、疾患のことについては、それ以上のことは聞いていない」
「そうなんだ……」
やはり、ここでも何も分からないのか、と落胆した。
なんとなく予想はついていたが、甲斐弥太郎の口の固さを再確認しただけである。
なにをどう調べても、甲斐家のことがなにも分からない。これ以上は、調べても無駄のような気がしてきた。

しかし、藤四郎は、沙龍の知らない事実を教えてくれた。
「その遺伝のことがあるから、子供を作るつもりはなかったのだが、京都で決心がついた、とも言っていた。自分の子供には、男でも女でもいいように、馨という名を付けるつもりだ、と。井上侯（※井上馨は侯爵だった）とはなにか関係があるのか、と聞いたら、昔、恩を受けたことがあるなどと言っておったが、まぁ、それは冗談じゃろう」
「ふぅん……」
「ワシがお前の存在を知っていたのは、十八年前、中国からの消印で、封書が届いたからだ。差出人の名前も、手紙もなかったが、甲斐だろうと分かった。百合子の遺髪と、小さな足型が入っていたからな。……まぁ、百合子のことは覚悟はしていた。体は丈夫なほうではなかったし、昔からちょっと変わったことを口走る子だったからな」
「……どんな？」
「人間に生まれたのは今回が初めてで、あまり長くは居られない、とかな。詳しく知りたければ、あれの働いていた神社に行って聞いてみるといい。ワシの同級

生の神主がたぶんまだ居るはずじゃ」
「うん、時間があったら行ってみる」
阿智(あち)神社というらしい。場所を聞いておいた。わりと近くのようだ。
「甲斐弥太郎はなんでじーちゃんちに来たの？」
歩きながら、今度は雑談のように話した。
「単なる行き倒れじゃ。無一文で旅をしていたとかで、ろくに食べてなかったらしい。ウチの門下生が、近所で倒れているのを見つけて、ウチに運んだのじゃ。まったく、時代劇みたいな話じゃろう？」
「ふーん……、それで、お母さんと仲良くなったのか」
「あのとき、ワシが変な好奇心を出して、奴を泊めたりしなければ、百合子も駆け落ちなどしなくて済んだのかもしれんが、それは、いまさら言うても詮無きこと」
「好奇心って？」
「ウム。奴は神道無念流(しんとうむねんりゅう)の技を持っていたのだが、どこか、我流になっているのが不思議でな」

「ああ、それはきっと甲斐のほうの技だね。私も以前、調べようと思って、でも、断念した」
「そうか」
最後に、藤四郎はこの地方に伝わる昔話を教えてくれた。
太古、瀬戸内の一帯を治めていたのは陽(ひ)の神であったという。その土地神のせいで日照りが続くので、困った民草は、雨の神を呼ぶことにした。
それに応えたのが、竜王であったというのだ。
「鎮守の神は海より出(い)でし白き竜――、そう云われたそうじゃ」
「チンジュの神……、白き竜……？」
白は西だ、と漠然と思ったが、ここでいう竜王は例の「八大竜王」のことだろう。五行説とは関係ないかもしれない。
「百合子が竜王に嫁いだ、と言いだした者が居たのは、甲斐が倉敷に来てから珍しく雨が続いたからじゃ。偶然じゃろうが、そう言い出した者には、あやつが竜王の化身に見えたのかもしれん」
「偶然……なのかな」

弥太郎本人に雨を降らせる能力や意思はなくても、そういった力を持つ者が背後に居た可能性はある。
つまり、八大竜王ではなく、弥太郎に『真の龍穴』の座標を教えた、四海龍王の誰かが？
（白き竜……、つまり、西海龍王ってこと？）
どういう因縁があるのだろう。一見、とても無関係に思えるのだが。
ほどなくして、立派な神谷邸の門が見える頃になると、藤四郎が好奇心いっぱいの声音で聞いてきた。
「で、お前の〝かれしぃ〟はどっちなのじゃ？　小次郎君か？　千春君か？」
「じーちゃん、言ってる内容が高校生レベルなんだけど……。どっちも彼氏じゃないよ。私の彼氏はいま東京で……」
あ、と思った。
椎名に最後に連絡したのは……、いつだったか。思い出せない。
岡山に来ていることすら言っていないので、そろそろ愛想を尽かされてもおかしくはない。

椎名に振られたら、一週間は落ち込むだろうな、と覚悟した。
ということは、マメに連絡していなくとも、結構、気に入っているのである。
ただ、これが鉄太郎だったら、もっと一生懸命電話したりメールしたりするのだろう、と分かってはいる。
「イロコイは面倒くさいな」
やっぱりそんな感想が漏れた。

20　阿知王（あちおう）

送り火を焚いて、お盆が終わると同時に、道場での稽古も再開され、お盆期間中は静かだった神谷邸も、いつもの門下生たちが出入りする状態に戻った。

千春は朝から地元の病院に行っている。経過は良好らしく、ギプスが取れるのも早くなるかもしれないとのことだ。花園神社で平癒祈願をしたおかげだね、と言ったら、真面目な顔で「そうだと思います」と返された。

沙龍は今日はひとりで、例の、百合子がバイトしていたという神社に来ている。美観地区のすぐそばにある、阿智（あち）神社というところだ。

ここでも、沙龍は歓迎された。

藤四郎の同級生だという神主は、頭の禿げ上がったミイラみたいな老人で、とんでもないことを口にした。

なにせ、「百合子さんには似てませんなぁ」とハッキリ言ったあとで、「藤四郎さんに似てますなぁ」と言うのだ。

沙龍はもちろん、引きつった顔をしてみせた。
「あのキチガイジジイに？」
そう言うと、神主も笑っていた。
「まぁ、藤四郎さんは昔から変人でしたからな」
神主は、社務所でお茶を振舞ってくれて、緋袴を穿いた百合子の写真も見せてくれた。
その巫女さん装束は、沙龍のなにかを刺激した。
今夏、百合子の写真は何枚か見たが、この赤い袴姿こそが彼女の本当の姿だという気がする。
白いワンピース姿も、制服姿も、どこか借物めいているのだ。
「もう、二十年前なのですなぁ。時間が経つのは早いことで……。百合ちゃんがうちに来たのは中学生くらいでしたか。小さい頃から、普通の人には見えないものが色々と見えたそうですよ」
「霊感が強いってことですか？」
「そういうことになりますな」

本人の言だけなので確認しようもない話だが、少なくとも、この神主は疑ってはいないようだった。
「百合ちゃんは、小さい頃はよく、自分は一時的に人として生まれただけで、本性は『神の使い』だと言っていたそうですな。藤四郎さんは、子供の妄想だと思っとるようですが、わたしゃ、間違ってないと思いますワ。分別がついてからはそういったことも言わなくなったようですが、ウチで働いてたときは、よく神妙な顔をして、誰かと話してましたワ」
「……誰と？」
「誰でしょうな。ウチの祭神は宗像三女神（むなかたさんじょしん）（※玄界灘の女神）ですが、その神さんたちか、まぁ、竜王様じゃろう、とわたしゃ思っとりますワ」
「龍王……」
ここでも、その名が当たり前のように出てくる。
「阿智という名に、なにか聞き覚えはありますかな？」
闇雲にそんなことを聞かれた。
「いえ……」

「地名なんですが、もともとは阿知王(あちおう)もしくは阿知使主(あちのおみ)という渡来人がこの辺りに住み着いたという話でしてね。どうもその人、後漢の霊帝の子孫だったらしいですワ」

「あちおう……？」

漢字の読み方が違うのだろう、と思った。中国語だと別の音になるはずだ。

後漢の霊帝といえば、三国志で有名な献帝(けんてい)の父で、献帝の二代前の皇帝である。

ということは、もしかしたら、あの名もなき村を作った漢民族と、倉敷に住み着いたその渡来人は、先祖が同じかもしれないのだ。

壮大なホラ話にも思えるが、その名を冠した神社で百合子が働いていたということに、奇妙な縁を感じずにはいられなかった。

神社からの帰り道、相馬高広に出くわした。

いまから神谷邸に行くということで、仕方なく、一緒に歩くことになった。

結局、この師範代と結婚はしなくていいことになったわけだが、ややこしい話に巻き込まれて彼もいい気分ではあるまい。

そう思っていたのだが、高広のほうはなんとも思っていない様子だ。
藤四郎の突拍子もない性格を弁えているということだろう。
この短い間に、高広からは高校の歴史の先生をしているという話を聞いた。非常勤なのでわりと時間の融通がきくらしい。
「岡山の歴史も詳しいんですか？」
世間話ついでに聞いてみた。
「専門はヨーロッパ史なんですが、郷土史も独学で少しやりました」
「そうですか。いま、阿智神社に行ってきた帰りなんです」
「ああ、確か、百合子さんが巫女をやっていたところですね」
「はい。神主さんからは、神社の名前の由来になった、渡来人の話を聞いてきました」
「阿知使主ですか。古くから岡山に住んでいる地元の人は、みな、彼を祖に持つのかもしれませんね」
「相馬さんちは違うんですか？」
「うちは、江戸時代に、近江のほうから移り住んだと聞いています。神谷先生は

生粋の岡山県人でしょうけど」
「へぇ……」
「じゃ、失礼します」
神谷邸の門をくぐったあと、高広は、直接、道場のほうへ向かった。
彼に関しては、ごく常識的な、悪く言えば面白みのない人間、という感想を持った。
どこか冷めているのは家庭環境のせいだろうか。
昼前に千春が帰ってきた。
石膏タイプのがちがちのギプスが、グラスファイバー製の軽いものに変わっている。だいぶ動きやすそうだ。
身軽になったというお祝いを兼ねて、祐介少年を交えて、デミカツ丼を食べに行くことにした。
この前行った、学生向けの食堂ではなく、今度はサラリーマンに人気、というお店に案内してもらった。
話題は、自然と、遺産を巡っての祖父孫対決のことになった。

祐介はあのとき同席していなかったので、興奮気味に「どうやって小次郎さんを負かしたんですか!?」などと聞いてくる。高広からはなにも聞いていないようだ。
「いや、ただの反則だから」
「だいたい、隙、ないでしょ？　あの人」
「まぁ、それを、あっち向いてホイ、するのが、私の得意技なんで」
「……」
千春は微笑んでいるだけだ。
「それで、結局、遺産は貰うことになっちゃったんだ？」
「まぁ、じーちゃんの手前、そういうことになったんだけど。どうやって言い逃れしようか、いま考えてるよ」
「えー？　なんでー？　貰っちゃえばいいのに」
少年は無邪気である。
「だって、私はここに住むつもりないし。管理とか、心底面倒くさいじゃん」
「そういう問題……？」

「なんだったら、祐ちゃんが相続してあげなよ。遠縁なんでしょ？」
「え？　オレ？　確かに、オレの母親は神谷家の分家筋の出身なんだけどさ……。神谷先生の意向ってもんがあるでしょー」
「じーちゃんの言い分だと、赤の他人じゃないなら、誰でもいいって感じするけどなー」
「うーん……」
祐介少年が苦笑するかたわらで、千春は違和感なく左手で箸を使い、デミカツ丼を黙々と食べていた。
既に、右の手のひらも使える状態なのだが、しばらくはこのまま左で通そうということらしい。
「もう、することなくなっちゃったね」
沙龍が誰にともなく言った。
「そろそろ東京に戻ろうか、春ちゃん」
「そうですね」
ふたりを交互に見ながら、祐介が悲しそうな顔をしていた。

その日の夜は、藤四郎と過ごすことにした。
縁側で、スイカを食べつつ、将棋の駒の動かし方を教わりながら、対戦をしている。
「まったく、外国育ちめ。将棋のルールも知らんのか……」
藤四郎は最後までそれを言っていた。
「しょうがないじゃん。こんなゲーム、なかったんだから」
中国にも似たようなゲームはあるが、あくまでも似ているだけだ。
象棋（シャンチー）という。故郷の村でもたまにやったが、沙龍はこの手の対戦型ボードゲームはあまり得意ではなかった。
「無鉄砲な奴じゃのう。だから、もうちょい周囲から攻めろ、というのに」
沙龍は、とにかく猪突猛進に攻めようとするので、藤四郎がそれを窘（たしな）める。
「だって、王を獲ればいいんでしょ？　まどろっこしいことせずに、正面突破が一番早いじゃん」

「それは雑魚相手の場合じゃ。敵のほうが上手の場合は数を減らさないと、大将は獲れんじゃろうが」
「んー。でも、結局、それをやるとこっちも疲弊するわけだし」
そう言って、やはり歩兵を敵の本陣に突っ込ませる。
結局は、藤四郎の伏兵にしてやられるのだが、戦法を変えるつもりはないようだった。
「じーちゃん、長らく世話になったけど、明日、帰るよ」
「ウム……」
「とりあえず、じーちゃんにはあと三十年は生きてもらうつもりだから、遺産の話はまだ先でいいよね？」
「お前は、ワシを足腰立たなくなるまで生かす気か。せめて、二十年にしてくれんか」
「まぁ、どっちでもいいよ」
「ウム……」
「ご飯も美味しかったし、楽しかったよ」

「そうか。いつでも帰ってこい。ここは、お前の家でもあるんだからな」
「うん、ありがとう」
そうして、沙龍の夏休みは終わった。

21　遠いところ

千春が倉敷での最後の晩、もう一度、ひとりで龍王山に出かけていたことは、沙龍は知らない。また、知らせる必要もなかった。

山頂の『龍王宮』の石碑に、ちょこんと座っているのは、千春にとってはだいぶ馴染みになった、赤い袴を穿いた小さな地霊だった。

ほのかに発光した彼女の姿は、二十センチにも満たないだろう。とても小さな存在である。

昼間は見えにくいし、恐らく、普通の人には見えていないのだろうが、こうして夜になれば、よく見える。

「これで、よかったんですか？　神谷百合子さん」

「だいたい、予定通りです。助かりました。ありがとうございました」

ぺこり、と頭を下げ、鈴が鳴るような小さな声で、彼女はそう言った。

この地霊は、病魔を退けるための薙刀を持っている。

千春もこの薙刀で怪我の痛みをいくらか祓ってもらった。
が、彼女にできるのはせいぜいそれくらいなのだという。大がかりな呪いを払拭することはできないのだそうだ。
「馨さんは、『甲斐家の呪い』を克服できるんですか？」
「それは、私には分かりません」
「助ける手段はないんですか？」
「それも、分かりません」
「……」
「でも、希望はあります」
「希望？」
「でなければ、弥太郎さんも決心はしなかったでしょう」
「……」
「あとは、彼女次第です。諦めなければ道は拓けるでしょう。私はそう信じています」
「そうですか……」

なかなか放任な母親だな、と千春は思う。
地霊というのは、もともと、こういう淡々とした存在なのかもしれない。
彼女には人であったときの記憶はあるのだが、情の部分では、もう人ではないのかもしれなかった。
「鈴木千春さん、お礼にひとつお教えしておきますが、貴方の探し物は海を渡らないと得られないと思います」
「海……？　海外ですか？」
「はい」
そんな漠然としたことを言われても、困る。
地球上を歩き回れというのだろうか。
「具体的にはどこです？」
「かつて、貴方を育てた方が暮らしていた場所――」
アメリカか。
それでも、広すぎると思った。
あの大陸を興行しろと？

「無理にとは言いません。このまま、日本に留まっても、お金に困ることはないでしょう。今まで通り、生きていけると思います。でも、海を渡れば、貴方はかけがえのないものを見つけることができるでしょう」

「……」

占い師みたいなことを言う、と思った。

そういえば、松木ゴローが、以前、気まぐれに易占いをしてくれたとき、同じようなことを言っていた気がする。

『んー、千春君さー、なんか自分でいろいろ押さえ込んでない？　結構、思い切ってやっちゃったほうが吉って出てるんだけどなー』

そのときは、なんのことやらよく分からなかったし、どうとでも取れるようなことを言っているのだろうと思っていたのだが、もしかしたら――。

「そうですね、考えてみます」

木佐と沙龍がどこか遠いところに行ってしまうまでは、あのふたりのそばに居ようと思う。

東新宿探偵社は、その一年後の夏に解散された。
さらに、その数年後には、アメリカで『ハリー・タカヤマ』を名乗る青年が彗星のごとく現れ、ショービジネス界を席巻することになる。
沙龍と木佐はそのニュースをどこで聞いただろう。
あるいは、地図上にはない場所かもしれない。

この国、といっていいかどうかは分からないが、この都では、季節は常に春だった。
花の匂いを含んだ緩やかな風が、そこかしこに流れていた。
四神府（しじんふ）の北のオフィスでは、沙龍が外側から窓をヨイショと開け、中の人に声を掛けている。
「おーい、キサさーん」
手にしているのはどうやら横文字の雑誌である。

帝都の記者クラブに置いてあるものだ。そこでは、世界各国の新聞、雑誌などが数日遅れで手に入る。
本来は、持ち出し禁止なのだが、こっそり持ってきたのだろう。
事務仕事をしていた木佐は、沙龍の手にしているのが『People』（※アメリカの芸能雑誌）だと分かると、
「鈴木の記事だろ？」
先に言ってやった。
「なんだ、知ってたの」
「こういうのはネットのほうが早いんだよ。アナログ人間め」
雑誌の特集記事には、『三代目ハリー・タカヤマ』の謎の経歴についての考察や、二代目との関係、各地での興行の様子などについてレポートされてあった。
そして、小さいながらに、プライベートの写真も掲載されていて、沙龍と木佐はそれを見て盛り上がっているのだ。
どこかのカフェで、小さな子供を抱いて注文している千春と、その後ろに、金髪にサングラスをかけた女性が居る。

「春ちゃん、子供作ったのかなぁ……。あ、それとも養子とか？」
「でも、ハーフっぽいし、鈴木に似てる気がする」
「まぁ、私と同じ、体外ナントカって手もあるしな……。この金髪美人が奥さんかな？」
「そうだろうな。二代目ハリーさんの、離婚した奥さんが、離婚後にひとりで産んだ娘って書いてあるから、感覚的には兄妹なのかもしれない」
「やーね、英語の記事なのにスラスラ読んじゃって……。え？　つまり、春ちゃんの養父の実の娘ってこと？」
「そうらしい。本人は娘が居るの、知らなかったみたいだけど。鈴木も、たぶん、会うまでは知らなかったんだろうな」
「そっかー。よかったよ。春ちゃん、家族欲しがってたもんね」
「そんなこと、言ってたか？」
「いや、言ってないけど、そんな感じだったね」
よかったよかった、と沙龍はしきりに言っている。
そうして、「あ、雑誌返してこなきゃ」と、用が済んだらさっさと去ってい

く。

窓はこのまま、開け放しておこう。

常春の陽気の中、木佐は事務仕事に戻った。

【岡山編・終わり】

People
Xiao